の中に食堂、踊り場、酒場等があり、大きな暖爐に火が燃えて居た。家の前は、道を隔てゝ窪地になつて、其の中にベントン川が、今はすつかり凍つて流れて居た。

「さあ、これが例の川だよ」道々大分、飲んで來たヒッグビイは、すつかり暖まつて了つて、チナ・コーゲルを車から助け降し乍ら、嬉しさうに言つた。皆は暫く立止つて、川景色を眺めてから、木立の中へ這入つて行つた。

「みんなで、あすこへ行つてスケートをするといゝんだが、みんな、行かないだらうな。まア、いゝや、仕方ないや」とヘッグランドが殘念さうに言つた。するとルシル・ニコラスが、窓の中の焚火を見て、「おや、火が燃えてるわよ」と言つた。

やがて自動車を車庫に入れてから、彼等は旅館に入つて行つたが、這入ると直ぐヒッグビイは、自動ピアノの處に行つて、五仙白銅を投込んだ。と、それに張合ふ樣に、ヘッグランドもビクトローラの處に走つて行つて、「怖ろしの熊」のレコードを掛けた。

みんなの知つて居る此の節が鳴り出すと、チナ・コーゲルが直ぐ言つた。「さア、みんなで踊らうぢやないの。あんた、あのがらくたピアノを止めて呉れない」

「駄目だよ。あれを止めるには、白銅を入れない手しかないのだから」とラッタラアが笑ひ乍ら説明

した。

丁度其處へ、一人の給仕が這入つて來た。ヒッグビイが、皆なの好きな物を尋ね始めたが、ホルテンスは自分の魅力を示さうとしてか、部屋の眞中に出て行つて、後足で立つて居る熊の恰好をし乍ら、歩き廻り始めた。と、スパーサーも、たつた一人で居る彼女の機嫌を取る爲か、彼女の後にくつ付いて、其の眞似をし始めた。その樣子を見ると、ホルテンスは直ぐ熊の眞似を止めて、その儘、彼に手を貸して、ひどく活潑にワンステップを踏み始めた。その瞬間、踊り下手なクライドは、急に嫉ましく苦しくなつて來た。彼は、最初から既に、彼女からうつちやられて居る事を考へると、堪らなかつた。しかし、スパーサーの何處となく世馴れた樣子に興味を持つたホルテンスは、クライドの事なぞは忘れて、此の新しい男の巧みな踊りに、自分の歩調を合はせて居た。と、それに負けないやうに、他の連中も忽ち相手を選んで了つた。ヘッグランドとメイダ、ラッタラアとルシル、ヒッグビイとチナ・コーゲル。後にはローラ・サイブとクライドが殘つたゞけだが、クライドは彼女を餘り好かなかつた。彼女のぶくぶくと肥つた顏や、助平らしい眼は、一向、クライドの興味を引かない上に、自分でもダンスは拙いと思つて居る彼は、他の連中がふざけ散らして踊つてる中を、只ありきたりのワンステップを踏んで居るより仕方がなかつた。

だが、かうして踊つて居る時、クライドは不圖、例のスパーサーが彼女にしつかりと抱き付いて、彼女の眼に見入つて居る事を發見した。而かも彼女は默つて許して居る。彼は鉛を飲まされたやうな氣がした。彼女はもう此の男に惚れたのだらうか？　しかも彼女は、たつた今、彼を好きにならうと約束したのではないか。彼女は浮氣なのだ。――と、彼は思つた。――恐らくは、本心では、自分の事なぞは何とも思つて居ないのであらう。彼は直ぐにも立つて行つて、彼女をスパーサーから引離したい思ひがしたが、此のレコードが鳴つてる間は、どうすることも出來なかつた。

やがて、其處へ、給仕人が歸つて來た。大きな盆に載せたコクテルやジンジャアエールやサンドヰッチを、小さいのを三つ繼ぎ合せた卓子に置くと、スパーサーとホルテンスとのほかは、みんな卓子に集つて來た。クライドは、すぐそれに氣附いて、この女を誠意のない浮氣者だと思つた。彼女は、內心では、彼のことなどは何とも思つてゐないのだが、あの外套が欲しいばかりに、それを裝つて居るのだ。畜生！　これが最後だ、やつつけてやれ、と思つて、彼は彼女を待つてゐた。しかし、みんなが卓子に集つて居るのを見ると、やがて、二人も、ダンスを止めて近づいて來た。クライドは苦り切つた靑い顏をして、無頓着さうに立つてゐた。それに氣附いたローラ・サイブは、そつとチナ・コーゲルのところへ行つて、彼が怒つて居る理由を說明した。

と、やがて、クライドの苦り切つた顏に氣附いた。ホルテンスが例の熊の眞似をしながら、彼のところへやつて來た。

「どう？　面白いでせう？　私、あんな音樂で踊るの隨分好きなのよ」

「それは屹度面白いでせうよ」

羨望と失望とに燃えながら、クライドは答へた。

「まア、どうしたのよ？」彼女はわざと何も氣附かない顏をして、怒つたやうな低い聲で言つた。

「私があの人と先に踊つたので怒つて居るのぢやない？　まア、馬鹿ねえ。それでは何故、あなたが一番に出て來ないのよ。私のすぐ傍にゐたのですもの。踊らうと言はれゝば、斷るわけには行かないぢやないの」

「だから僕も斷れと言ひはしないですよ」クライドも、ほかの連中に聞かれるのを恐れて、低い皮肉な調子で言つた。しかし、男のからだに抱きついたり、眼の中に食ひ入つたりするやうなことは、しないでも好いでせう。しないと言つたつて、僕は見てたんだから」

ホルテンスは不興げに彼の顏を見た。彼がこんなにつけつけとものを言ふのは、これが初めてゞあつた。彼女は、自分が甘い顏を見せ過ぎたので、自惚れて來たのだと思つたが、あの外套のことがあ

る今は、彼を無視してるやうに見せかけてはいけないと思つた。

「だけど、それだけのことぢやないの」圖星を指されたホルテンスは、內心いら〳〵しながら、怒つたやうに答へた。「ほんとにあんたつて妙な人ねえ、そんなに嫉妬深くては、私も堪らないわ。ちよつとばかりあの人と踊つたゞけのことぢやないの」

彼女は向ふへ行かうとしたが、二人の間の默契を考へて、彼をなだめやうと思つたので、クライドの袖を引つぱつて、ほかの連中の聞えないところへ連れて行つた。

「ねえ、あんた、後生だから、そんな顏なんぞしないで置いてよ。私には、變な氣持なんぞ何もないのよ。だつて、みんなが踊るんぢやないの。何か意味を持つて踊る人なんか、一人もゐやしないわよ。だから、約束通り、二人仲よくしようぢやないの？　どう？」

彼女は、私が好きなのはあんたばかりだと言はないばかりに、しげ〳〵と彼の顏に覗き込んで、例の肉感的なおちよぼ口を造つて見せて、接吻でもしたい樣な樣子をした。

「よござんす。無論僕は馬鹿かも知れないけれど、たゞ見た通りに云つたゞけなんだから。實際僕は、狂人になるほどあなたに惚れてるんだから、どうにもならなかつたのですよ。併しまあ、そのうちには、こんなに馬鹿ではなくなるでせう」

彼は諦めた樣に低い聲で云つたが、其聲は悲しさうであつた。併し彼女は、手もなく參つて了ふ男の樣子を見て、「ほんとにさうして頂戴。もつと後、他の連中が見てゐない時に接吻をして上げますからね」と云つたが、同時にスパーサーの目が自分の方へ注がれてゐるのも意識してゐた。彼女は、スパーサーが自分に心を引かれて居る事を氣附いてゐたし、彼女自身も、彼に、誰にもまして心を奪はれて居るのを知つてゐた。

十八

かうして暫く、踊つたり飲んだりした後に、例のヘッグランドが再び下の川の事を云ひ出した時、其日の樂しみは絕頂に達した。

「どうだい？　あの氷は。すつかり張りつめてるぢやないか。皆で下りて滑らうぢやないか？」

皆はぞろ〳〵と下りて行つた。ラッタラアと、チナ・コーゲルとが、手に手を取つて走り出すと、續いてスパーサーとルシル・ニコラス、ヒッグビーと、ローラ・サイブ、クライドとホルテンスも、それ〴〵一緒に走り出した。其川は、風に吹き晒された、曲りくねつた小さい小川に過ぎなかつたが、氷の上に出た若者達は、直ぐに昔話の森の神や、森の乙女になつてしまつた。彼等はあちこちと滑り廻つて、

ヒッグビー、ルシル、メイダの連中は、忽ち氷の上にひつくり返つてしまつたが、直ぐに立ち上つて大きな聲で笑ひ出した。

ホルテンスも、始めの中はクライドに助けられて、よち〳〵と歩き廻つてゐたが、そのうちに獨りで走り廻れる樣になつて、態とらしい悲鳴を上げたりした。今やスパーサー許りでなく、ヒッグビーまでがホルテンスを追驅け始めて、態とらしく倒れた彼女の上に乘りかゝつたりした。そのうちにスパーサーは、彼女の手をとつて、無理に引きずる樣な恰好で、上流の人目に止まらない處へ連れて行つた。クライドは既に嫉妬を起さない決心では居たが、此の樣子を見ると、スパーサーが此の機會を利用しさうに思へて仕方がなかつた。二人はきつと逢引の打ち合せでもするに違ひない。若しかしたら接吻位するかも知れない。無論彼女も斷り切れないに違ひない。——思ひ出すと、クライドは段々心配になつて來た。

クライドはよつほど彼等を追かけて行かうかと思つたが、丁度其時、ヘッグランドが、皆を呼び集めて、手をつなぎ合はうと云ひ出した。止むを得ずクライドも其仲間に加はつて、ルシル・ニコラスの手を取つたが、そこへ、スパーサーとホルテンスとが手を取り合つて歸つて來た。今や皆は手をつないで、片足で立つて居た。やがてヘッグランドの掛聲で、お互にぐる〳〵と驅け廻り始めたが、とうと

う皆が倒れて了つた。倒れた其の瞬間、ホルテンスとスパーサーとは、互に抱き合つて轉び廻つた末に、巧に雪と小枝に覆はれた岸の陰に逃げて行つた。雪に汚れたホルテンスのスカートは、其時膝の上までもめくれ上つて居たが、彼女は赤い顏もしないで、如何にも面白さうに笑ひ乍ら、スパーサーと手をとり合つて座つてゐた。ローラ・サイブも同じ樣に、ヒッグビーと抱き合つて倒れたまゝ、意味有りげに其のまゝ身動きをしなかつた。彼女のスカートもすつかりまくれ上つて居たが、スパーサーは立ち上ると同時に、彼女の奇麗な足を指して、齒を一杯出して笑ひ出した。同時に、誰も彼も妙な叫聲を上げて笑つた。

「馬鹿野郎」とクライドはひそかに考へてゐた。「何だつてそんなに女の尻許り追つかけてやがるんだい？　人並に樂しみ度いのなら、自分の女を連れて來ればいゝではないか。何の權利で、人目を隱れたりしやがるんだい？　俺が何にも知らないと思つてるのかい？　一體、ホルテンスが俺と一緒に居る時に、あんなに嬉しさうに笑つた事があるだらうか？　何を血迷つて、あんな男にちやほやしやがるんだらう？」

彼は暫く暗い顏をして睨みつけてゐたが、それに無頓着に、皆はまた手をつなぎ始めた。今度もクライドがルシル・ニコラスの手をとつて、最後にスパーサーとホルテンスとが並んでゐた。併し此の

遊に夢中になつてゐるヘッグランドは、クライドの氣持等には全で氣附かないで、「おい、誰か他の人が最後になれよ」

と云つた。そこでラッタラアとメイダ、クライドとルシルの順で、ホルテンス達の後に附いた。併しホルテンスはまだスパーサーの手をとつては居たが、其のまゝクライドの方に移つて來て、片方の手で彼の手をとつた。今や彼女は、兩手にスパーサーとクライドとを持つてゐる譯だつたが、スパーサーがしつかりと彼女の手を握りしめてゐるのを見ると、クライドの怒はまた燃え上つた。何だつて、彼奴の爲に連れて來てあるローラ・サイプにくつ附かないのだ？　然もホルテンスまでが、此の男をそゝのかして居るのではないか。

悲しみと怒とに氣を取られた彼には、此の遊びも身に泌まなかつた。彼はよつほど立ち止つて、スパーサーと喧嘩をしてやらうかと思つたが、さうする暇もないうちに、ヘッグランドが走り始めた。

そこでクライドも、一生懸命に體軀の平均をとる樣に努めたが、やがてルシルやラッタラアやメイダと、一緒に投げ出されて、髮鰻の樣に氷の上をきり〳〵舞ひした。其の瞬間、ホルテンスはさりけなく彼との手を離して、スパーサーに抱きついたのであつた。他の連中とからみ合つて、滑かな氷の上を四十尺も擲り出されたクライド達は、向ふの岸に行つて漸く重り合つて止つたが、其の時ルシル

は、彼の膝の上に俯向きに倒れて、際どい恰好をしてゐたので、彼も思はず噴き出してしまつた。ラッタラアと並んで倒れたメイダは、恐らくわざとさうしたのだらう、兩足を高く空中に上げてゐた。皆が大聲に囃し立てたのは勿論である。恐らく、其の聲は、半哩の先からでも聞かれたであらう。滑稽者のヘッグランドが、それを見ると忽ち四つん這ひになつて、自分の腿をたゝき乍ら唸り出したので、皆は更に大聲で笑ひ續けた。クライドも、自分の嫉妬を忘れて笑聲を合せたが、彼の氣分は本當に變つて居たのではなかつた。ホルテンスの遊び振りが、無邪氣であるとは思へなかつたのだつた。

やがて、ルシル・ニコラスとチナ・コーゲルとが、疲れて仲間から外れると、ホルテンスも列から離れた。クライドはすぐ仲間から離れて、彼女のあとを追つた。ほかの連中も、やがて、それ〴〵に、別れ別れになつて、ラッタラアはルシルの後を追ふし、ヘッグランドはメイダを連れて、下流の曲り角の向ふに隱れてしまつた。結局、あとには、スパーサーとローラだけが殘つたが、そのうちに、彼等も、何處にか行つてしまつた。

二人きりになると、ホルテンスは、川ばたに倒れた丸太のところに行つて、その上に腰をかけた。感情を害して居るクライドは、しばらく默つて立つてゐたが、それを察した彼女は、クライドの外套の帶を取つて、輕く引つぱりながら、

「お馬どう〳〵」と戯れた。「でも、このお馬、今日は氷の上を辷らなきやならないわね」
しかし、すつかり苦り切つて居るクライドは、今はさう易々と誤間化されはしなかつた。
「何だつて君は、あんなスパーサーなんぞに、あんなにくつつかせて居るのです？　先刻、向ふの曲り角に隠れて行つた時には、一體、何を話したのです？」
「何も話さなかつたわよ」
「ふん、さうでせう。そして、接吻も何もしなかつたのでせう」
彼は皮肉に、苦々しげに言つた。
「勿論だわ」と、彼女も吐き出すやうに、斷乎として言つた。「あんたは一體、私を、どんな女だと思つて居るの？　初めて會つた男に接吻をさせるなんて、そんな女ではないことよ。第一、あんたに、そんなことをさせたこと？」
「しかし、それは、あの男ほどに僕を好きでなかつたからでせう」
「おや！　さうなの、それならそれでいゝけれど、併し何の權利があつて、あたしがあの人を好いてるなんて云へるの？　あんたがあんな風にあたしを見張つてる限り、あたしだつて多少の慰みはしたくなるわよ。あんな風にされゝば、私だつてくさ〳〵しちやうぢやないの？」

彼女は今、クライドの主人顔を見て、すつかり怒つて居た。
かう反噬されるとクライドも、多少ひるんで、直ぐに自分の口調を變へ樣と思つた。そして彼女がまだ一度も自分を眞實に好いてると、口に出して云つた事のないのを思ひ出した。
「併しこれだけの事は云へますね。僕が若し誰かを好いて居るとすれば、誰にでも彼にでも色目を使ふ樣な事は決してしないと云ふ事を」
「まあさう？」
「無論ですとも」
「併し、それでは誰が色目を使つてたか云つて御覽なさいよ」
「あなたさ」
「まあ、止して頂戴。私と喧嘩するより外に能のないあんたなら、歸つて貰つた方がよつぽどいゝわよ。私が食堂で彼の人と一緒に踊つてゐたと云ふ事は、ちつとも彼の人に色目を使つたと云ふ理由にはならないぢやないの。あたし、眞實にあんたのする事を見てゐるとくさ〳〵しちやうわよ」
「へえ！　僕がねえ」
「さうよ。あんたがよ」

「ふん、成程。僕が行つちまへば邪魔がなくなりますからね」
「さうよ。いつもいつもそんな風に許り私を考へてるんなら、行つちまつて貰つた方がよつぽどいゝわよ」
さう云つて彼女は、じれつたさうに氷を靴で蹴つた。併しクライドは、此の調子で押し通す事の出來ない自分である事を感じ始めて居た。
彼は餘りにも切實に彼女を求めて居り、其の足に踏みにじられて居るのだ。彼が弱々しい目を上げて、神經質に彼女の顏を見つめて居ると、彼女の方でも亦、あの外套の事を思ひ出して、もう少し可愛がつてやらうと決心した。
「あなたは彼の男の目に見入つてゐたでせう？　さうぢやないですか？」
彼は再び、先刻のスパーサーとのダンスを思ひ出して、弱々しげに尋ねた。
「何時よ？」
「さつき、彼の男と踊つてた時」
「嘘よ。知らないわよ。併し、たとひ私があの人の目を見てたとしても、それがどうしたのよ？　別に意味なんか無いぢやないの。一體、誰でも、他人の目を見ては惡いものなの？」

「あんな目附きではね。あれではどうしたつて惚れてるとしか思へないぢやないですか」
ホルテンスは、たまらないと云ふ樣に舌を鳴らした。
「チエッ！　チエッ！　チエッ！　もうそれだけ？」
「それから、先刻は、向ふから歸つて來た時、僕の處へは來ないで、彼の男と二人で一番端に並びに行きましたね。僕はちやんと見てゐたんだ。二人はいつでも手をつなぎ合つてゐたぢやないですか？　しかも、あなたは轉んだ時でさへ、彼の男と手を握り合つてゐたではないですか？　あれが浮氣でなくつて何です？　少くともあの男はさう取るに違ひないですよ」
「併し私には、浮氣した覺えなんぞちつともないんだから仕樣がないぢやないの。それはあんたがさう云ふ風に考へたいのならば、それでもいゝわよ。私だつて、お止しなさいとは云はないわよ。だけど、あんたが云ふ通りにすれば、誰だつて何も出來なくなつて了ふぢやないの？　一體、氷の上で手を把り合はないで何が出來るのよ？　そんな事を云へば、あんたとルシル・ニコラスとだつてよつぽど變ぢやないの？　ルシルがあんたの上にのつかゝつた時、あんたはどうしてたのよ？　笑つてたぢやないの。でも、私は何も考へはしないわよ。あんたは一體、私にどうしろと云ふのよ？——まあ、こゝへ來て腰掛けない？——犬の尻尾の樣に、どこへでも隨いて歩けつて云ふの？　それともあんたが隨いて來

てくれるの？　それよりも、一體、私を何と考へてるのよ？　胡栗の實だとでも思つてるの？」

彼女は、クライドに叱られてゐるのだと思ふと不愉快であつた。こんなクライドよりも、あのスパーサーの方がどんなに好いか知れないと思つて居た。少くともスパーサーの方が、もつと手つとり早くて、解りが好くて、さつぱりしてゐると思つてゐた。

クライドが帽子をとつて憂鬱さうに頭を掻いて居るのを見上げ乍ら、ホルテンスはまづ彼の事を考へ、それからスパーサーの事を考へてゐた。スパーサーはもつと男らしいし、こんな泣き蟲ではなく、うぢ〳〵と不平を云ふ樣な男でもない。が、同時にまた、何の役にも立たない男にも違ひない。そこへ行くとクライドは、兎に角利益にはなる男であつた。どこにこの男程に自分の爲に盡してくれる男があるだらう！　然も、他の連中は皆どこかに隱れに行つて居るのに、クライドだけは、決してそんな事をさせ樣とはしないではないか。彼女は、少くとも自分の計畫が成就するまでは、そんな關係になる事を恐れてゐるのであつた。此の喧嘩がそれを避けさせた譯でもあつた。

「併しクライド、こんなに喧嘩許りしてゐてもつまらないぢやないの。どんな益があるのよ。こんなに喧嘩をする積りなら、私を連れて來なければいゝぢやないの？　私だつて來るんぢやなかつたわ」

暫くして彼女は、彼を宥め樣としてかう云つた。が、云はれると共に、クライドは再び女の魅力に

把へられて了つた。彼はそつとホルテンスの體軀に手を廻して、思ひ切り抱きしめると共に、唇を押し附け樣とした。併し、突然スパーサーを好きになつてゐた彼女は、クライドに對する現在の不快な氣分も手傳つて、急にクライドを振り離した。何だつて、こんな男に自分の氣に染まない事をさせる心要があるだらうと、彼女は自分自身に云つた。自分は今日、此の男に親切にしてやる約束はして來てゐない筈だ。少くとも今は、こんな男の手に落ちたくない。其の爲にどんな事にならうとも構はない

「併し、かうした女の氣持は、クライドにも解つてゐた。彼は、彼女の氣持が今どんなものであるかを察して、一二歩たぢろいでから、憂鬱さうに女の顏を見つめてゐた。

「あなたは僕を好きだつて云ひましたね？」

クライドは、此の日の樂しみの後かたもなく消えて行くのを感じ乍ら、殆ど亂暴に近い氣持でかう云つた。

「えゝ、云つたわ。だけどそれはあんたが私に親切な時に限つた話よ」

彼女は何とかして、彼への最初の約束を誤間化さうと思つて、狡るさうに答へた。

「ふん、で、どんなに僕を愛したんです。かうして二人限りでゐるのに、あなたは體軀に觸る事さへさ

せないぢやないですか。一體あなたは何の積りであんな事を云つたのか、それを先づ僕に聞かして下さい」

「私が何と云つて？」

彼女は、只時間を延したい爲にかう反噬した。

「白ばくれなくてもいゝですよ」

「あゝ、あれ？　あれは併し、今直ぐの事ではなかつたぢやないの？　私達が話したのは——」

かう云つて、彼女は曖昧に口を噤んだ。

「いや、併し、僕は覺えてますからね。いづれにしても、併し、あなたが今僕を好いてゐない事だけはつきりしてるんだから、若しあなたが眞實に僕を愛してるのならば、今直ぐだの、來週だの、來來週だのと云ふ必要はどこにもないぢやないですか？　僕が或る約束を果すか果さないか、あなたの問題は只それだけで、僕を好く好かないは問題ではないんでせう」

「そんな事はなくつてよ」

圖星を指された彼女は、其の爲にいらくして、苦々しげに云つた。

「そんな事を云ふのは止して頂戴。私もうあんな外套の事なんぞ何とも思つてやしないんだから、あん

なお金なんぞ何時だつて返して上げるわよ。それよりも、あんたと一緒に居なきやならない事の方が、何なに辛いか知れないわよ。あんたに助けて貰はなくつたつて、外套なんか何時でも買へるんだから」

かう云つて、彼女は歩き去らうとした。併しさう云はれるとクライドは、彼女を宥め樣として彼女を追つて走り出した。

「いや、ホルテンス、鳥渡待つて下さい。僕はそんな積りで云つたのぢやないんですから。僕があなたに狂人の樣になつて居る事は、あなたにも解つてるぢやないですか。僕は決して其の報酬を得たいからあの金を上げたんぢやないんですから、あなたが何をして呉れなくつても、僕は構はないんです。實際僕は、世界中にあなたの樣に好きな人はないんですからね。それだけでもう、あの金をあなたに上げてもいゝんです。併し僕は、あなたも多少は僕を好いてくれてるんだと思つてたんです。實際ホルテンス、あなたはそんなに僕が嫌ひなの？」

クライドの怖氣附いた樣子を見ると、彼女は自分の優越を感じて、多少言葉をゆるめた。

「無論嫌ひぢやないわよ。だけどね、それは、あんなに舊式な扱ひをされてもいゝと云ふ意味ではないわよ。どこの女だつて、今が今、あんたの云ふ通りにしろと言はれたつて、それは出來ない場合があるものなのよ」

「それはどう云ふ意味なんです」クライドは、彼女がどう云ふ積りで云つてゐるのか解らないで尋ねた。「僕には全で解らないんですが」

「解つてゐるわよ」

彼女には、彼が解らないと云ふ事が信じられなかつた。

「あゝ、さう、さう云ふ意味ですか。いや、あなたの云ひ度い事は解つたです」と失望して云ひ續けた。

「つまり、皆がよく話す、あの馬鹿げた事なんでせう？」

彼は、ヒッグビーやラッタラアや、エディー・ドイル等がホテルで話して居る事を、殆ど文字通りに思ひ起してゐた。彼等は、かう云ふ場合の女の事を細かに話し合つて、女がせつぱ詰つてくると、こんな嘘を云ふ事等も話して居たので、クライドにも其の意味が呑み込めたのであつた。

「だけどあんたつて隨分嫌な人ね」と彼女は態と感情を害した樣子をして云つた。「こんな事は誰も口では云へない事だから、あんたが信じないのは無理もないけど、併し眞實なんだから仕方がないわ」

「いや、それは僕にも解つたですけれど」彼は悲しげではあつたが、でもそんな事は之までにもあつた事だと云つた樣な、多少亢然とした顏附で答へた。「いづれにしても、あなたが僕を好きでないと云ふ事は事實なんだから。僕はもうすつかり解つたんだから」

「まあ、ほんとに嫌だわ。これ程云つてもあんた、解らないの？　私、それは誓つてもいゝわ。そんな嘘なんぞ吐かないわよ」

クライドは其處に立ちつくしてゐた。この小さい嘘に面しては、彼ももう何も云へない事を知つた。彼女には何を強ひる事も出來ない。たとひ彼女が嘘を吐いてゐるのであつても、彼は只それを信じた樣な顏をするより仕方がなかつた。然も今や、非常な悲しみが彼の上に襲ひかゝつて來た。彼女が結局彼のものになり得ない事が、今はもう明かであつたからである。併し、自分の嘘を感附かれてゐる事に氣附いて居るホルテンスは、今少し何とか云つて、彼を引き附けて置く事が必要だと感じた。

「ねえクライド、後生だから私を信じてよ。眞實に私さうなのよ。だけど來週はもう大丈夫よ。それは私誓つてもいゝわよ。だからあんたも信じて呉れない？　私がいゝと云つたら、何もかもあんたに許すつて意味なんだから。ほんたうよ。私あんたが嫌ひぢやないんですもの。ね、いゝでせう。信じて呉れるでせう」

此の最後の方の言葉は、クライドを頭の先から足の先まで突き通した。彼はもう一度笑顏を見せて、快活になり始めた。その中に時間が來て、ヘッグランドが呼んだので、幾度か接吻をした後に、二人は手を把つて自動車の處へ行つたが、其の時の彼は、もう自分の夢の實現される事を信じ切つてゐ

た。あゝ、その夢の日の何と云ふ輝かしさよ！

十九

カンサス市への歸り道の大部分には、クライドの愉快な幻想を破る樣なものは何もなかつた。彼はホルテンスの側に座つて居たし、ホルテンスはまた彼の肩に頭をもたせ掛けてゐた。尤も、此の車に乘る時に、スパーサーがそつと彼女の手を握ると、彼女もそれに意味有るらしい答へをした事があつたが、クライドは何も氣附かなかつたのであつた。

併し、その時は既に時間も遲くなつて居たし、ヘッグランドやラッタラアやヒッグビイが頻りに速力を要求してもゐたし、それにスパーサーがホルテンスから目配せを與へられて、すつかりいゝ機嫌になつてゐる上に、少なからず醉つぱらつてもゐた爲に、彼等は間もなく近郊の灯を認め得る樣になつた。今や自動車は、首がちぎれる樣な速さで走つてゐた。併し、東行の幹線鐵道が彼等の道と交叉する或る踏切りにかゝつた時、丁度二つの貨物列車が擦れ違ふのにぶつつかつたので、彼等は永い間待たされなければならなかつた。それに、其の日雪降りになつた北カンサス市の道路は、今やすつかり雪に被はれて、ひどく滑り易くなつて居た爲に、其の運轉には非常な注意を要する狀態になつてゐた。其

の時は丁度五時半であつた。普通に全速力で行けば、後八分もすればホテルの近くに着ける筈であつたが、ハンニバル橋に近い或る踏み切りで、もう一度待たされた爲に、橋を渡つてウィアンドット街に這入つた時には、既に六時に二十分しかなかつた。然もかうなると、今日一日の樂しさなどは、此の四人の頭からは吹き飛んで了つた。彼等は既にホテルに遲くなりさうなのを氣遣つてゐたからである。

「おい、此の調子では駄目だぞ。これでは着物を着替へる暇もないぢやないか」

神經的に時計を弄り廻してゐたラッタラアがヒッグビイに云つた。

それを聞くとクライドも「畜生！　もつと急ぐんだつたなア。時間に遲れたら大變ぢやないか。だから僕は、今日來たくなかつたんだよ」

その突然の取亂し方を見て、ホルテンスが側から云つた。

「あんた、間に合はないと思つて？」

「えゝ、此の調子ではねえ」

併し、綿の樣に降り頻る外の雪を見てゐたヘッグランドは、「おい、ウヰラード、どうも少ししくじつたらしいね、今日は。これで僕達、時間に遲れると、大した痛事になるんだからねえ」と叫んだ。

ヒッグビイにも、もう賭博打らしい落着きはなかつた。

「僕達、よつほどうまく云ひ抜けないと、首だぜ。誰か何とか考へて呉れろよ」

併しクライドは、只、いら〳〵と溜息をついて居る許りだつた。

だが、街の中心に這入るにつれて、思ひ掛けない車馬の雜沓が、あらゆる四辻に待つて居た。其の爲に次第にいら〳〵して來たスパーサーは、九番街の四辻に近附いて、交通巡査が止れの合圖をして居るのを見た時には、殆ど堪へられない思ひになつてゐた。

「畜生！　また手を擧げてやがる。一體どうしたらいゝんだい。こゝからワシントン街に廻る手も有るんだが、それだつて時間はやつぱり同じこつたからね」

まる一分待たされた後に、彼等は漸く動き出す事が出來た。彼は直ぐに自動車を右に廻して、三帳場許り行つてから、ワシントン街に這入つた。

だが、此處もやはり同じ事だつた。道の兩側には長蛇の樣な車の列がのろ〳〵と動いてゐて、街角毎に大切な時間を空費しなければならなかつた。ワシントン街と十五番街との街角に行くと、クライドがラッタラァに叫んだ。

「十七番街に行つたら、車から降りて歩いて行つたらどうだらう？」

「そんな事をしたつて何にもなりやしないよ。歩くよりはやつぱり早いからね」とスパーサーが大聲

に云つた。

彼は出來るだけ他の車との間を詰めて走らせてゐたが、十六番街に行つて左の方に幾らか閑散な通りを見附けると、直ぐに其の方に廻して、もう一度ウィアンドット通りに出て行つた。丁度彼等が、其の角を曲らうとする時だつた。高速力で急に方向を變へ樣とした時、九つ許りの女の子が、其の四角に向いて走り出して居たが、忽ち自動車のまん前に飛び出して來た。スパーサーには、それを避ける暇も何もなかつた。あつと云ふ間に娘を敷いた自動車は、五六間も引きずつた後に漸く止まつた。同時に半打近い女達の裂ける樣な叫び聲と、それを見てゐた多數の男達の怒罵の聲が起つた。

忽ち往來の人達は、車に轢き倒された子供の方に押し寄せて來た。其の樣子を眺めたスパーサーの頭は、一瞬間、名狀し難い恐怖に襲れてしまつた。巡査、監獄、親父、自動車の持主、――樣々な形の嚴罰が群つて押し寄せて來た。車の中の連中は連中で、それ〴〵「やあ、敷いちやつたぞ」「ほう、子供を殺しやがつた」「まあ！　どうしませう」「神樣！」「神樣！」等と苦しげな叫び聲を擧げてゐたが、スパーサーは皆に振り向いて叫んだ。「巡査が來やがつた。逃げようぢやないか〳〵」

口もきけないほど恐怖に打たれて居る他の連中が、答へる暇もない中に、忽ち操縱槓を第一に入れ、第二に入れた彼は、頓て堪へられるだけの瓦斯を機關に送り込んで、全速力で次の街角を通り越さう

とした。併し既にこちらの街角の人沓みに氣附いて居た一人の巡査が其の街角に立つて居て、其の騷ぎを確め樣として、こちらに歩き出さうとしてゐた。然も、丁度其の時「あの車を止めろ」「あの車を止めろ」と云ふ聲が、彼の耳に屆いた。と、其の街角から來た一臺のセダンを追かけ乍ら、一人の男が、「其の車を止めろ。子供を轢き殺したのだ」と叫んでゐるのが目に這入つた。

それらの樣子を見て、巡査は口笛を口に當て乍ら、自動車の方に近づかうとした。しかし、事體が急だと見たスパーサーは、素早く、十七番街の方に逃込んで、殆んど四十哩の速力で走り出した。忽ち、一臺の貨物自動車の横腹とすれ合つたり、他の自動車の泥除けを壞したりして、瞬く間に、街路一面の浪藉を働いた。その間、自動車の中では、一人殘らず石の樣になつて、眼を見張り手を握つておどおどして居た。そしてホルテンスやルシルやチナなどの女達は、口々に「あゝ神樣！」だの、「まア、どうなるんでせう！」などと叫んで居た。

しかし、かうして追馳けて來た群衆や巡査を出し拔くことは、決して容易ではなかつた。自動車番號が解らない上に、停車の意志がないと見てとつた巡査は、直ぐに長い鋭い呼子笛を吹鳴らした。すると、その樣子を見てとつた隣の街角の巡査も、自分の呼子笛を鳴らし始めたが、直ぐに通りすがりの自動車に飛乘つて、此の自動車への追跡を命じた。忽ち三臺の彌次自動車までそれに加はつて、け

たゝましい警笛を上げ乍ら追跡を始めた。

しかし、此のバッカードの速力は、それを追跡するどの車よりも遙かに早かつた。始めの中こそ、「あの車を止めろ」「あの車を止めろ」と呼び叫ぶ聲が聞えて居たが、やがてそれ等も聞えなくなつて、たゞ、遠くの方から亂暴に鳴らし立てる警笛だけが、かすかに聞えるやうになつた。

その樣子にいくらか元氣づいて來たスパーサーは、直線路を追はれてゐる事の不利を悟つて、直ぐにマックギイの方へ折れ込んだ。それは幾らか靜かな通りだつたので、忽ち二三張場を飛んで、また、ギルハム公園の方へ折れて行つた。しかし十三番街の邊りになつて、遠くに人家の建て込んで居るのを見た彼は、此の道を行くよりも寧ろ北の方へ進路をとつて、郊外へ逃げた方がいゝやうに思つたので、直ぐに左の方へ折れた。人通りの少ない此の邊の町々を縫つて歩く中には、やがて追手を出し拔けるだらう。少くとも、他の連中を何處かへ降してから、車をギャレーヂに入れる餘裕が出來るだらう——と思つて居たのだつた。

此の計畫は旨く行きさうであつた。此の邊の通りには、もう殆んど家もなかつたし、通行人も見えなかつたので、彼は此の車の所在をかくす爲めに、燈火を消して了つた。車は相變らず早い速力で東へ行き、北へ曲り、又東へ行き、南へ曲つて逃げ廻つたが、最後に或る通りへ出ると、二三町も走つ

た所で、突然、道路の補裝がなくなつて了つた。しかし、そこから一町計り向ふに、四つ辻のあるのを見た彼は、其處を曲ればまた補裝道路があるだらうと思ひ、尙も走り續けて急角度で左の方へ曲つた。瞬間に、車は道路工夫の殘して行つた石の堆積に、烈しい勢ひで乘上げようとした。燈を消した車からは、それが見えなかつたのであつた。しかも、此の堆積から斜に反對側の歩道には、一ぱいに建築材料が積み上げてあつた。

補裝の石ころに觸れると同時に、急角度に曲つた自動車は、そこで、殆んどひつくり返らうとしたが、餘力が更に反對側の材木にぶつからして了つた。只、眞正面にぶつかる代りに、斜にぶつかつて右側の車輪が材木の上に乘上つた爲に、辛じて破壞をまぬかれたが、その爲にしかし、完全に左側の草と雪との中に顚覆して了つた。硝子や車體の壞れる烈しい響と共に、乘つて居る者は全部、折重つて倒れた。

その後は唯、烈しい混亂があつたと言ふ以外に、クライドにも誰にもよく解らなかつた。運轉臺に坐つて居たスパーサーとローラ・サイブとは、したゝか風除け硝子と屋根とにぶつかつた後に、氣を失つて了つた。肩と脇腹と、左の膝とをぶつつけたスパーサーは、救護車が來るまで身動きも出來なかつた。車の中では、クライドが左の端に居て、それに續いてホルテンス、ルシル、ラッタラアと竝

んで居たので、彼は忽ち、みんなの下敷きになつた。一番右に居たラッタラアは、乘上げると同時に前の方へ投出されて、したゝか操縱輪にぶつかつた爲めに、顏や手や肩に相當に重い創を受けたが、直ぐに立上つて、漸くこぢ開けた戸の外へ這ひ出した。

外に出ると、ラッタラアは、顚覆した車によじ登つて、先づルシルを引出しに掛つた。「ね、靜かにおしよ。大丈夫だよ。僕が出してあげるからね」彼は一生懸命に叫び乍ら、彼女を引張り上げ、やがて雪の上に抱き降した。續いて彼はホルテンスも助け出したが、彼女の左の頰と額と兩手には、血が流れて居た。彼女は殆んど無意識で、只全身をわな〳〵と震はせながら、しやくり上げて居た。

丁度その時、クライドも頭を上げて、左の頰や肩や腕から血が出て居るのに氣付いたが、直ぐに自分も早く出なくてはならないと思ひついた。彼は、眼まぐるしく働き出した頭の中で、子供を殺した事を思ひ出した。盜んだ自動車が壞れた事を思ひ出した。無論、ホテルの方は駄目になるに違ひない。追跡して來た巡査にも、やがて見つかるに違ひない。見ると、彼の下にはスパーサーが打倒れて居て、既にラッタラアが介抱をして居ろらしかつた。ローラ・サイブもその側で意識を失つて居た。自分もラッタラアを助けて、何かしなければならないと思つたが、同時にまた、ラッタラアさへ居なければ、此の儘、逃げ出したいやうな氣もした。併し、ラッタラアは一生懸命だつた。「おい、クライ

ド、手を貸して呉れ。君は大丈夫かい。ローラ・サイプが氣を失つてるんだ。兎に角、引張り出さうぢやないか」いら〳〵と叫び乍ら、彼はローラを引張り上げようと努めて居た。クライドも、自分が攀じ出る代りに、先づ彼女を出さうと思つて、壞れた硝子窓の上に立つて、彼女を支へ上げようとしたが、ぐつたりと重くなつてゐる彼女を差上げる事は、容易なわざではなかつた。彼はやつとの事で、彼女をスパーサーの横から引張り出して、辛じて座席の間に横へるだけだつた。

その間に、前の方に居たヘッグランドが、漸く外の方に這ひ出して來た。しかし、這ひ出すと直ぐ、彼はかう叫び出した。

「何と言ふざまだい。何だつてこんな事になりやがつたのだい。ぐづ〳〵して、巡査に捕まるよりは逃げ出した方がましだよ」

しかし、他の連中が未だ倒れて居て、泣いて居るのを見ると、流石の彼もさうしても居られなかつた。彼は直ぐメイダの方に手を出した。「さあ、手を出して御覽。引張り上げてやるからね。早く、早く」と言つたが、直ぐまたヒッグビイの上に倒れ掛つて居るチナ・コーグルを捉へて、それを引張り出さうと努めた。上の重みがとれたヒッグビイは、漸く身體を起して、頭や顔を觸つて見て居た。

「さア、手を出した。早く、早く。ぐづ〳〵しては居られないんだからね。痛むのかい？　まア、出

て見なくちや解らないよ。誰か其處に來るらしいからね。惡くすると巡査かも知れないんだから」

ヘッグランドはさう言ひ乍ら、ヒッグビイの左手を攫んだが、ヒッグビイはそれを拒んで、

「おい、そんなに引張るなよ。僕は大丈夫だ。自分で出るよ。他の連中を助けてやり給へ」

彼は立上つて、壞れた窓から邊りを見廻したが、やがて倒れかゝつた座席を踏臺にして、車の外に出て來た。彼も直ぐヘッグランドやクライドに力を合はせて、みんなを助け出し始めた。

一方、クライドより先に車から出されたホルテンスは、自分の顏をさはつて見て、頰や額から血が出てゐるのを發見した。此の創で、彼女の美貌も永久に失はれると思つた彼女は、突然、或る自分勝手な恐慌に襲はれて、總ての事を忘れて了つた。彼女にはもう、他の連中の不幸も、巡査に發見される危險も、子供が傷ついた事も、高價な自動車が壞れた事も、もう問題ではなかつた。自分の美貌が害はれるかも知れない――さう思つた彼女は、急に兩手を振り舞はし乍ら、啜り泣き始めた。

「まア、どうしよう。どうしよう。こんな顏になつちやつたではないの」絶望的に叫んでゐた彼女は、急に、此の儘ではいけないと思ふと同時に、誰にも言はないで、三十三番街を、街の燈の方に歩き出した。彼女は只、出來るだけ早く自分の家に辿りついて、何とか自分の爲めにしなくてはならないと言ふ事だけを考へて居た。

實際、彼女の心にはもうクライドも、スパーサーも、ラッタラアも、他の娘達も何もなかつた。彼女は只、自分の傷つけられた美貌の事ばかり考へて居た。時々、殺された子供の事や、巡査に追跡された事が頭に浮んで來たが、それは唯、スパーサーが他人の自動車を盜み出して來たからだと感じられるだけだつた。多分、皆な拘引されるのだらうとも思つたが、それも、自分に怪我をさせたんだから止むを得ないと思へる位のものだつた。クライドに對しては、こんな旅行に彼女を誘ひ出したと言ふ點で、非難されてもいゝ男だと思つてゐた。他の亂暴なボーイ達に對しては、こんな馬鹿な事を仕でかしたと言ふ點で、怪しからんと思つて居た。

他の娘達は、ローラ・サイブを除いては、誰も重い怪我なぞはして居なかつたが、唯、氣持の上ですつかり脅かされてしまつて居た。彼女らは、巡査に攫つて、刑を受けるかも知れないと言ふ怖れの爲めに、すつかり脅え上つて、口々に罵り騷いで居たので、とう〳〵ヘッグランドが大きな聲で呶鳴りつけた。

「おい、後生だから靜かにしろよ。これでも俺達は一生懸命ぢやないか。そんな聲を立てゝ、巡査にでも來られたらどうするんだ」

此の言葉に應じた樣に、丁度その時、一人の郊外居住者が、遠くから此の物音を聞きつけて、ゆつ

くり此方に近づきつゝあつた。

「何かあつたのですかい？　怪我人があるんですね。そいつは大變だ。それに素晴らしい自動車ぢやないですか。何かお手傳をいたしませう」男は近づいて來て、此の光景を見ると、さう叫んだ。

其の聲を聞いて、クライドが邊りを見廻すと、もうホルテンスは居なかつた。彼は止むなくスパーサーを車の中に寢かした儘、心配さうに邊りを見廻した。今や、巡査に捕まるかも知れないと言ふ思ひだけが、強く彼の心に迫つて來てゐた。これだけはどうしても逃れなければいけない。捕つたが最後、彼の前途はもう暗黑だ。無論、母にも解るし、スクワイヤ氏にも知られて了ふ。何よりも彼は、監獄にぶち込まれるだらう。それは何と言ふ怖ろしい事だらう！　――それらの思ひが錐のやうに彼の胸に突刺して來たが、同時に、ホルテンスは何處に行つたらうと言ふ問題が彼の胸に浮んで來た。彼は先づ、何よりも、彼女を助けて、彼女の行きたいと思ふ所へ連れて行つてやらうと思つてゐたからだつた。

しかし、丁度その時、遠くから警笛の響が聞えて、少くとも二臺のオートバイが、非常な速力で此の地點に向つて走つて來る樣子が解つた。先刻の物音を聞きつけて、此の郊外居住者の妻君が掛けた電話が、既に通じたからだつた。

「あゝ、來ました、來ました。家の女房に電話を掛けるやうに言つといたもんですからね」
その音を聞いて、その郊外居住者はかう説明した。
「おい來たぜ。皆な逃げろ」
ヘッグランドが先づ叫んで、メイダの手を取つた。彼は眞直に三十五番街を東に走つて行つたが、こんな路を走つて居る事の危險を感じて、直ぐ東北に折れて、廣い野原を横ぎつて市街から逃れた。
クライドも同じやうに、其處を逃出したが、ヘッグランドとは反對に、クリーブランド通りを南の方へ走り出した。しかし、彼も直ぐに、此の道の不得策を悟つて、野原の方に足を向けた。而かも野原に出て見ると、その邊りには所々、叢があつたので、彼は先づその中に隱れ込んで了つた。
後には、只、スパーサーと、漸く意識を回復し初めたローラ・サイブとが殘されて居た。
「ふゝん、やつこさん達、此の車を盜んだんだな。成程、あいつらに持てる車ではないわい」
樣子を見て、先刻の見物人はさう呟いた。
丁度その時、最初のオートバイが其の場所にやつて來た。
「ホホ、お前さんは逃げなかつたんだね。抜け目のない野郎らしいが、感心に殘つて居たもんだね。お前が捕まれば、それでもう澤山だよ。しかし、他の連中はどうしたんだ。何處へ行つたんだ」

餘り遠くないクライドの叢に、さう言ふ聲が聞えて來た。
やがて例の郊外居住者が、此の場の樣子を説明し始めたらしかつた。自分は唯、見物に來たゞけで、乘つて居た連中はみんな逃げ出して了つた事や、今直ぐ追跡すれば捕るに違ひないと言つて居るのが、未だ叢の中に居るクライドにも聞えて來た。彼はそつと四つん這ひに這ひ出して、雪の上を南の方へと歩いて行つたが、やがて西の方に遙かな明りを見ると、また其の方へ歩き出した。かうして彼は、幸運でさへあれば、不幸と刑罰と絶望との境から逃れられさうに思へて、歩き續けた。

第二部

一

ニューヨーク州、ライカーガス市のサムユエル・グリフィスの家では、折から夕食時分になつたので、家族の者がそろ〳〵食堂に集りつゝあつた。その日は、此の家の主人が四日間の旅から歸つて來ると言ふので、幾らかましの食事が用意してあつた。丁度その頃、西部の成金共が競爭的な値下をし始めたので、その前後策の爲めに、東部のシャツ、カラーの製造業者大會がシカゴに開かれて居たので、

彼はそれに出席したのだつた。彼が此の町に歸りついたのは、その日の午頃だつたが、夕方まで工場に居る事にして、それを電話で知らせて來て居たのだつた。

自信に充ちた實業家としての、夫のかうしたやり口に馴れきつて居るグリフィス夫人は、勿論何とも思つて居なかつた。その中に、夫は歸つて來て、彼女に挨拶をするだらうと思つて居た。

その日は、夫が大好物だと言ふので、羊の脚を注文して、野菜だのデザートだのを決めて了ふと、彼女は一人で長女のミラの事を考へ續けてゐた。ミラは、數年前に既にスミス大學を卒業して居たが、未だに結婚をしないで居た。グリフィス夫人にとつては餘り有難くない事だつたが、彼女の緣遠い理由は、ミラが餘り別嬪でないと言ふ事にあるらしかつた。成程、隨分高すぎる鼻で、眼と眼の間もつき過ぎて居たし、顎も變に尖つて居て、娘らしい樣子が何處にもなかつた。大體として、どちらかと言へば學者肌の娘で、此の町の社交界には不向きに出來て居た。そんなに美しくなくても、何處か男を引付ける、あの女らしい情愛が、彼女には缺けて居るのだが、母親に言はせると、彼女は餘りに批評的であり理智的である爲めに、こんな町には向かないのだと言ふのであつた。

相當な贅澤の中に育つて、生活の心配なぞはしないでいゝ彼女であつたが、戀愛や社交の問題では、絕えず困難にぶつからねばならなかつた。實際、美貌もなく愛嬌もない女が戀を得やうとする事は、

乞食が百萬長者になる事程に難かしい事だつたからである。彼女が十四になつて以來、此の十二年間、他の若者や娘達は樂しさうに飛び廻つて居るのに、彼女だけは、讀書と音樂と、出來るだけの身窘みとで日を過さねばならなかつた。彼女は時々友達の家を訪ねて、何所かに彼女に興味を持つ男が居ないかと探し求めたのであつたが、さうした男も居ない今、彼女の氣持は悲しかつた。

今も、母親の部屋から自分の部屋に歸つて來た彼女は、ひどく張合ひのない顏をして居た。それまで、母親は何とかして、彼女の氣をまぎらせようと努めて居たのであつたが、丁度そこへ、近所のフインチユレーの家に行つてゐた妹のベラが、酷く元氣のいゝ顏をして飛込んで來た。

身の丈は高いが、何處となく黃色ッぽい姉とちがつて、ベラはいくらか脊は低くはあるが、遙かに愛嬌深い上に、身體も確かりして居た。その黑い程な鳶色の髮の毛や、赤味のさしたオリーブ色の顏色や、澄渡つた鳶色の眼には、或る渴望の光が動いて居た。その嫋やかな身體の中には、烈しい生活力が貯へられて居た。無論彼女は、ありのまゝの人生を樂しむ事の出來る娘である。從つて、その姉とは違つて、あらゆる男が彼女に引付けられる事を、彼女の兩親は知つて居た。年頃になつた時、彼女が婚期を失ふ怖れは絕對になかつた。事實、今でさへ、色々の青年が彼女をとり卷いて居る事を知つて居る母は、密かにその婿擇びに心を使つて居るのだつた。事實、彼女自身も、誰とでも仲よしになる

傾向を多分に持つて居て、唯に此の町の貴族社會である保守的な舊家の人達ばかりでなく、此の頃やつと浮び上つて來た計りの成上り者の息子達とも、平氣で交際をした。ベーコン、罐詰、吸塵機、木工品、タイプライター、――かうしたあらゆる新製品の製造業者が、事實、此の町の經濟界の主要な役割を勤めて居るのであつた。

グリフイス夫人の意見に依ると、かうした町に、こんなに澤山のダンス會だの料理屋だの自動車だのがあるのは、困つた事だと言ふのだつた。尤も、姉のミラの事を考へれば、多過ぎるのが寧ろ安心なのであつたが、唯、妹を安全に結婚させる迄の監督を考へて、彼女の此の遊び好きや交際好きに少からず心を惱まして居るのであつた。

「何處に行つてたのだい？」いきなり部屋に飛込んで來て、書物を投出したまゝ、暖炉によつて行く娘を見て、彼女はさう聞いた。

「ねえ、お母樣」ベラは殆んど無禮な程ぶつきら棒に言つた。「フインチユレーさんではねえ、今年の夏はグリーンウッド湖をよして、十二番湖に新しい別莊を建てるんだつて話よ。ソンドラの話だと、今度の家は湖水の直ぐ傍で、それはいゝ所だつて。水の上に突出して、大きなベランダを作つたり、三十尺もあるモーターボートを入れるボートハウスなんかも作るらしいのよ。まア、素的ぢやないの。

私にもギルにも、若しよかつたら、夏ぢう來てもいゝつて言ふんだけど。そこはエメリイ・ロッジの向ふ岸で、あのユチカのファントさんね。あの家の別莊も直ぐ近くにあるんだつて。いゝわねえ。うちでもその中、あそこに建てない？　だつて、此の町で少しどうにかした人は、皆なあそこへ移つて行くぢやないの」

彼女はストーブの火にあたつたり、窓に行つて外の電燈を眺めたりし乍ら、早口に喋り續けたので、母親は唯聞いて居るより外になかつたが、彼女の言葉が切れると、

「さうかい。でも、アントニイさんやニコルスンさんやテーラアさんはどうだい。グリーンウッドにいらつしやると言ふ話は未だ聞かないけれど」と言つた。

「まあ、アントニイやテーラアの家があんな所に行くものですか。まるで舊式なんですもの。何處にだつて行きはしないわよ。あの人達が行くやうになれば、それこそ此の町がひつくり返つて了ふわ。でも、此の邊の相當な家では皆、向ふに行つて了ふつてことよ。ソンドラが言つてたんだけれど、クランストンさんでも、來年は向ふにいらつしやるのですつて。ハリエットの家だつて屹度行つてよ」

「おや〳〵、またクランストンに、ハリエットに、フインチユレーに、ソンドラかい。お前はしようちうあの人達の事ばかり言つてるぢやないか」

母親は半ば揶揄ふやうに、半ばいら〳〵したやうに言つた。クランストンやフインチユレーの一家は、此の町で相當な成功を納めては居たが、兎角評判の悪い家であつた。クランストン鋼線會社も、フインチユレー電氣掃除機會社も、何れも近頃、アルバニイやバッファロウから移轉して來たのであつたが、その大きな工場や大邸宅などは別問題としても、彼等の生活の甚しいけばけばしさが、此の地方の富豪達に、よい感じを與へて居ないのであつた。彼等の最新流行の衣裳や、自動車や、宴會は何時でも此の町の問題になつて、いくらか地位の低い人達からは羨望の的にされたが、土着の富豪達からは、餘りに輕薄だと見られて居るのだつた。

「何度か言ふ事だけれどねえ、お前あの、ベルテインやレタ・ハリエットや、あの子の兄弟達と餘り親しくするんぢやないよ。何しろ喋々しい人達だからねえ。それは、お父樣もさう言つていらつしやるんだよ。ソンドラ・フインチユレーにしても、ベルテインとお前とを一緒に遊ばせるつもりならば、い〻加減につき合つて居た方がい〻よ。それにお前も未だ年が行かないのだから、いろんな所へ一人で行くことは、お父樣もまだ許していらつしやらないのだからね。先刻の十二番湖のフインチユレーさんの別莊に行く話は、家中、皆なで行くのでもない限り、それはとても駄目な話だよ」

グリフイス夫人は、老貴婦人らしい落着きを見せてかう言つた。

しかしベラは、かう言はれても一向ひるまなかつた。彼女は母親をよく知つて居たし、母親が自分を好いて居る事も知つて居た。かうは言つても、矢張り自分の交際上手を喜んで居るのだ、と思つてゐるベラは、こんな親達はわけなく操縦出來ると考へて居るのだつた。

「年が行かない、年が行かないと言つたつて、私ももう七月になれば十八よ。一體、何時になつたら私一人で何處へでも行かさうと思つていらつしやるのよ。ママやパパが行く處へは何處へでも行かなくちやならないし、私が行きたいと思ふ處へは、ママやパパも一緒に行かなくちやならないなんて、隨分不自由ぢやないの」

「まア、ベラ。それだけの事ぢやないか。それはね、お前が二十一二になつて、その時も未だ結婚して居なかつたら、それこそお前の行きたい處へ行くのもい〻さ。しかし、今のお前の年では、そんな事を考へるのからして、もう間違つてゐると言ふものだよ」

丁度その時、此の家の一人息子のギルバート・グリフイスが、表の扉を開けて二階に上つて行つた樣子なので、ベラはその美しい顏を擧げた。彼はその顏立ちと言ひ身體つきと言ひ、その從兄弟のクライドにそつくりであつた。

その頃彼は二十三歳で、元氣のい〻、自惚れの強い青年であつたが、二人の姉妹とは反對に、非常

な確かりした實務家であつた。實際彼は、實務に掛けては常に積極的で合理的である上に、總てがてきぱきして、思ひ切りがよかつた。彼は、自分の社會的地位を信じきつて、一點の非の打ち所のない人間だと思つて居たが、それでも、かうした地方的な社交界の色々な情勢には、深い興味を持つて居て、何時でも自分の一族の持つ、社會的尊嚴を意識して、萬事を振舞つて居た。一寸見にはひどく鋭く尊大な男に見えたが、必ずしも全然面白くない男と言ふのでもなかつた。多辯ではないが、しかし鋭い舌鋒を持つて居る彼は、時に骨を刺すやうな皮肉を浴せ掛けた。無論、此のライカーガスでは、最も理想的な獨身者として尊敬されて居たが、同時に餘りに自分の事計り考へて居る爲に、本當に理解し合つた友達なぞは一人も持つて居なかつた。

兄が自分の部屋に上つて行つた物音を聞くと、ベラは直ぐ母親の部屋を出て、兄の部屋の前に行つた

「ギル、這入つてもいゝ？」

「ひゝ」

彼は何處かの宴會にでも行くらしく、口笛を吹き乍ら、もう着物を着更へて居た。

「何處へ行くのよ」

「何處でもないさ。唯、御飯が濟んだらウィナントの家に行かうと思つてるんだ」

「では屹度、コンスタンスも居るわね」

「コンスタンスなんぞ、居るもんか。何だつてそんな事を言ふのだい？」

「まア、私が知らないと思つてるのよ」

「何だ。それを言はうと思つて、此處に來やがつたんだな」

「ううん、さうぢやないわよ。ねえ、どう思ふ？　フィンチュレーの家ではねえ、今度の夏に十二番湖のファンツの別莊の隣に、自分の別莊を建てるんだつて。そして三十呎もある大きなモーターボートを買つたり、水の上に露臺を作つたりするんだつて。とても素的ぢやないの」

「よせよ。『とても』だの、『素的』だのと言ふのは。まるで女工見たいぢやないか。そんな事を學校で教へるのかい？」

「だつて御自分はどうなの？　自分がちやんと御手本を示してるぢやないの」

「俺は男だし、お前より五つも年上ぢやないか。ミラ姉さんを見ろ、そんな言葉は決して使はないかち」

「あゝ、ミラ姉さん？　でも、そんな話はもう止して、あの別莊の事を考へて頂戴よ。兄さんもあそ

こへ行きたくない？　私達が皆な行きたいと言ふ事になつて、パパやママさへ賛成させれば、直ぐに行けるんぢやないの」

「さあ、しかし、そんなに面白い所かしら」

兄はさう答へたが、事實は少からず心を引かれて居た。「十二番湖でなくたつて、他に幾らもあるぢやないか？」

「他にないと誰が言つて？　でも、そんな處へは誰も行かないわよ。アルバニィやユチカの他に、何處に行く所があつて？　ソンドラの話だと、今にあすこが、此の邊の夏の中心になるつて事よ。だつて、コンスタンスの家だつて、ランバートの家だつて、ハリエットの家だつて、皆な向ふに行く事になつてるんですもの。さうなつたらグリーンウッド湖に殘つてる人なんて、誰も居なくなつて仕舞ふわよ」

「クランストンの家がそつちへ行くと言ふ事を、誰が言つてたい？」すつかり面白くなつて來たギルバートは尋ねた。

「ソンドラが言つたわよ」

「誰がソンドラに話したんだい」

「ベルティンよ」

「ふむ、奴等はいよ〳〵發展しやがるな」彼はいくらか羨ましい氣に言つた。「此の調子だと、あいつらには、こんな小ぼけなライカーガスではおつつかないつて事になりさうだな」さう言つて彼は蝶形ネクタイをぐいッと引張つたが、餘り咽喉を締め過ぎて顏をしかめた。

事實、ギルバートは、最近父親の會社に這入つて、事業の總取締りをする身分になつたのであつたが、それでも彼と同年輩のグラント・クランストンが、その美貌によつて、若い娘達を勝手に引廻して居る事を見て、或る嫉妬を感じて居るのだつた。クランストンは、自分の父親の會社で働くと言ふ事を巧みに自分の享樂に利用して居たが、ギルバートにはそれが不賛成であつた。自分の仕事は何處までも眞面目にやらうと考へて居る彼は、クランストンのやり口をだらしなく思ふのであつたが、それにも拘らず、クランストン鋼線會社の事業は、ライカーガスの他の産業を壓して發展しつゝあつた。

「兎に角、あいつらは僕達よりも手を擴げてゐるよ。尤も、あいつらだつて、世界一の金持つて譯でもないがね」

彼はさう言つて、彼等の勇敢なやり口を考へ乍ら、羨んで居た。

「それにね、フィンチュレーの家では、そのボートハウスの上にダンス場まで造るんだつて。それで、

若しよかつたら、兄さんも此の夏に來ないかとステュアートが言つて居るつて話よ」
「へえ、さうかい」とギルバートは多少の羨望と多少の皮肉とで答へた。「つまり、お前に此の夏來て呉れろと言ふ事なんだらう？　僕は此の夏は此の町で働くよ」
「ううん、そんな事はないわよ。それに、私達が行つたつて、別に不面目な譯ではないぢやないの。だつて、グリーンウッドなんか、もう何も見るものなんぞ無いし、變な田舍者ばかり集つて來るんですもの」
「へえ、さうかい？　そいつを一つ、お母さんに聞かしてやりたいものだな」
「無論、あんたお母樣に言ひつけるつもりなんでせう」
「いや、言ふつもりはないさ。しかし、僕にはフィンチュレーやクランストンに喰付いて、十二番湖に行く氣なんか無いからね。まア、お前が行きたければ行くさ。ババが許せばね」
丁度その時、下の扉の開く音がしたので、ベラは兄との言ひ爭ひも忘れて、下に飛んで行つた。

二

カンサス市のグリフィス家の父親とは打つて變つて、此のライカーガスのグリフィス家の主人は立

派な人物であつた。例の「希望の門」の主人の不得要領な小男なのとは反對に、此處の主人は普通よりも身の丈が高い程で、多少瘠せては居るが、がつちりした身體つきで、その動作にも言葉にも、明敏な所が見えて居た。自分の經て來た經歷とその結果から、自分の商業的才能を普通人以上だと感じて居る彼は、さうした才能を持たない人間に對して、多少短氣な傾向があつた。無論、他人に苛酷であつたり、無愛想であつたりする人ではなかつたが、しかし何時でも、裁判官の樣な冷靜を保つ事は忘れなかつた。彼は、自分の常識主義者である事を辯解し乍らも、何時でも、他人が自分を評價して呉れる通りに、自分も自分を評價して居るのだと公言してゐた。

二十五年前、相當な資本と、相當な決心とを持つて、此の町に來て、或る新しいカラー製造業に投資した彼は、その後、まるで豫期しない程の成功をしたのであつた。無論、彼はそれを誇つてゐた。そして、二十五年後の今日では、此の家族は、もう此の町で押しも押されもしない富豪として、その趣味の深さをさへ謳はれるやうになつてゐた。彼等は、此の土地の金持であつた計りでなく、最も嚴格な尊敬さる可き成功者として認められてゐた。長女は別としても、その二人の子供達が、此の町の若者達にちやほやされて居る事も、彼等の聲望を高める理由になつてゐた。

その日、シカゴに行つて、色々な申合せをして、過去一年間の事業成績をはつきり認めて來た彼は、

今ライカーガスに歸つて來ても、ひどくいゝ機嫌であつた。旅行も無事であつたし、不在中の會社にも何の變つた事もなかつた。注文は山のやうに來つゝあつた。

自分の家に歸つて來た彼は、重いカバンを投出し、流行の外套を脱ぎ棄てゝ、さて、と言ふ顔で、走り寄つて來るベラを迎へた。事實、彼女は、父親の此の上もなく可愛い娘であつた。彼は、此の娘を見る度に、自分の若さと健康さと快活さと利口さと愛くるしさとが、美しい娘の形をとつて、歸つて來る氣がするのであつた。

「まア、お父樣。あなたゞつたの」彼女はひどく優しい甘えた聲で言つて、近づいて來た。

「あゝ、さうらしいね。少く共、やつと今、お父さんらしい氣がして來たよ。で、どうだね、此の赤ちやんは」言ひ乍ら、兩手を擴げて飛込んで來る末娘を受取つた。「成程、立派な丈夫さうな娘さんだね」と唇を離し乍ら言つた。「で、どうだつたね、留守中、さぞおいたをした事だらうね。今度は嘘をつかないでいゝのかい」

「大丈夫よ。今度はおとなしかつたわ。誰に聞かれたつてかまはなくつてよ。だつて、あれ以上おとなしくしてはゐられないのですもの」

「で、お母さんは？」

「お歸りになつてよ、お父樣。お部屋にいらつしやるわ。屹度、お父樣が歸つていらつしやつたのが解らなかつたのよ」

「そしてミラは？　アルバニーから歸つて來たかい？」

「えゝ、お部屋にいらつしやるわ。先刻までピアノを彈いてらしッたんだけども、私も一寸前に歸つて來た計りよ」

「それ〳〵、又ほつつき歩いてたんだらう。お父さんはちやんと知つてるんだから」

父親が嚇すやうに指を突出して言つたが、ベラはその腕にぶら下るやうにして、一緒に梯子段を上り始めた。

「ううん、ほつつき歩いてなんぞ居なかつたわよ。唯ね、一寸ソンドラの處へ行つて來たの。そしてねえ、お父樣。あの人達はもうグリーンウッドを引拂つて、十二番湖に大きな別莊をお建てになるのですつて。そして、ステュワートの爲めに、大きなモーターボートを買つて、來年の夏は五月から十月まで、其處でお住みになるんですつて。クランストンの家でも矢張りさうするらしいのよ」

此の娘のかうした手管に馴れてゐるグリフイス氏には、彼女が十二番湖に行きたがつて居る事が解つて居たが、それよりも、あのフインチュレー一家が、唯單に社交的の理由で、こんなにも大金を使

はうとして居る事に、寧ろ興味を感じた。

しかし、ベラに答へる代りに、彼は二階の妻君の部屋に這入つて行つた。彼は先づグリフイス夫人に接吻をしてから、扉の處へ來たミラの顏を眺めて、色々と旅の事なぞを話し出した。その樣子で、彼と妻君との間に、或る完全な了解が出來てる事が解つたし、娘のミラに對しても、彼女の氣質や、意見に全然同感はしてないまでも、深い愛情を以て對してゐる事が解るのであつた。

彼等が話して居る處へ、家政婦のツルースデールが、晩餐の用意が出來た事を知らせて來た。と、ギルバートも、身じまひを濟まして此の部屋に這入つて來た。

「お父さん。明日の朝でよござんすから、一寸會つて、お話したい事があるんですが、よござんすか」

とギルバートが言ひかけた。

「あゝ、いゝとも。ではお晝頃に來給へ」

「さあ、では行きませう。早く行かないと、皆な冷めちまうからねえ」

グリフイス夫人がせき立てると、ギルバートが直ぐ降りて行つた。續いて未だベラの手を取つて居るグリフイス氏が歩き出し、最後にグリフイス夫人とミラとが降りて行つた。

テーブルに就くと、忽ち此の地方の色々な噂話が交され始めた。其噂は、主としてベラが學校か

ら持つて來るものであつて、其學校を中心として、あらゆる珍聞が瞬く間に町中に擴がるのであつた。

「ねえママ、あのディストン・ニコルスン夫人の姪のロゼツタ・ニコルスン、そら、今年の夏、アルバニーから此處へ來たぢやないの？――そら、あのアラムネーの園遊會のあつた晩に來てゐた、髮の黃色い斜視の娘さんよ。――あの人のうちは、あれで隨分大きな食料品屋さんなのよ。――ねえ、あの人がねえ、去年の夏ラムベルト夫人の處へ遊びに來てたハーバート・テイツクハムと婚約しちやつたのよ。ねえ、覺えてない？　あの丈のひよろ長い眞青い顏の男。だけど、あれで隨分いゝ男ぢやないの？　活動役者みたいだつたわよ」

「そらね、グリフイスの奧さん」とギルバートが、嫌さず皮肉な調子で母親に云つた。「シユネデカー模範學校の優等生が、此頃ちよい〳〵活動に行つて、役者の顏にみとれてるつて話がありますぜ」

だが、父親は其時、突然こんな事を云ひ出した。

「今度はシカゴで妙な事が一つあつたよ。多分、皆にも興味のある事だらうと思ふんだが」

かう云ひ乍ら、彼は二日前にシカゴで、彼の弟アサの長男に會つた事や、それに就いての彼の結論を思ひ出してゐた。

「まあ、お父さん、何よ？　話して頂戴よ」ベラが直ぐせがんだ。

「大した珍聞でもあつた譯ですね」父親の前では何時でも無遠慮なギルバートが直ぐ口を挾んだ。
「うむ、丁度わしが、シカゴのユニオン・リーグ倶樂部に泊つてる時だつたが、思ひがけなくも、お前達の從兄弟に會つてね。つまり、今デムバーにゐるさうだが、わしの弟のアサの長男なんだよ。尤も、三十年この方、會ひもしなければ手紙も出さない樣な弟なんだが」
さう云つて彼は、何か考へる樣に言葉を切つた。
「では、お父さん、どつかで傳道師をしてるつてあの人ぢやない？」とベラが顏を上げて尋ねた。
「うむ、さうだよ。尤も、其息子の話によると、今はもうそれを止して、デムバーの町でホテルか何かに關係してるさうだが、以前は暫く傳道師をしてた事があるのさ」
「だけど其息子つてどんな人？」ベラがまた尋ねた。彼女の現在の境遇から云つて、外見的に保守的な、育ちのいゝ青年をしか知らない彼女は、西部アメリカのホテル業者の息子と聞いて、烈しい興味を感じたのであつた。
「從兄弟ですつて？　幾つ位の男です」ギルバートも、其男の性格や地位や能力への好奇心から、直ぐに聞いた。
「うむ、仲々面白い青年らしいよ」今の今迄、クライドをどう思つていゝか、考へてもゐなかつたグ

リフィスは、稍々曖昧な調子で答へた。
「仲々いゝ男でね、風采も立派なんだよ。丁度ギル、お前と同年位で、顏立もお前によく似てるんだ。非常によく似てるんだ。眼も口も顎も、お前にそつくりだし」と、息子をじろ〳〵と見乍ら「多少違ふと云へば、お前より幾らか背が高いかも知れない。まあ、見た處では、痩せてる樣だつたなあ」
併しギルバートは、自分にそつくりの從兄弟がゐて、而も自分と同じ姓を名乘つて居るのだと聞くと、何か心に浸み通るものがあつた。と云ふのは、今日迄、此のライカーガスでは、彼が父親の事業を繼承する只一人の息子である事や、其財產の三分の一を讓り受ける後繼である事を、知らないものはなかつたからである。然も今、思ひがけない親類、彼と同年配で、然も彼にそつくりの從兄弟が現れて來るとしたら――彼は考へに耽らざるを得なかつた。瞬間に（それは彼自身どうにも出來ない無意識的な反動だつたが）彼は其男に反感を覺えた。――その男を好く譯にはゆかないと思へた。
「其男は今何をしてゐるんです？」彼は穩やかに云はうと努め乍ら、それでもそつけない苦々しげな調子で尋ねた。
「うむ、餘りいゝ商賣はしてないのだがね」
サムユエル・グリフィスは微笑を浮べて、考へ深さうに云つた。「今の處は、シカゴのユニオン・リー

グ倶樂部のボーイをやつてるんだが、併し、それにしては、仲々快活で、紳士らしい處があるんだよ。そこが鳥渡わしに氣に入つてね。色々話して見たのだが、其話によると、どうも今の仕事では大して出世も出來ないらしいんだ。何とかして、もつと出世の道がある處へ行つて働き度いと云ふものだから、わしも若しお前が此處へ來て運試しをする積りがあるなら、多少の手助けをしてやつてもいい、――少くとも、其男の力を見せる樣な機會を與へてやらうと、まあ、約束をして來たのだがね」

實を云ふと、彼はこんなに直ぐ話をぶちまけて、こんなにまで此の蠅に興味を持つた事を話す積りはなかつたのである。寧ろ、時を見て、妻君や息子に別々に話さうと思つて居たのだつたが、話の序にすつかり話して了つたのであつた。然も、これほどギルバートに似て居るクライドの爲に、多少の事をしてやり度いと思つてゐる彼は、かう云つて了つた事を寧ろ嬉しく感じた。

しかし、ギルバートが膨れ面をして居るのに反して、ベラやミラは、樂しげに其の事を考へて居た。グリフィス夫人はと言ふと、何かにつけて息子の肩を持ちたがるので、此の場合にも、クライドが親類でも何でもなく、ギルバートに似て居るなんて事もない男であつて欲しいと考へて居つた。自分達の從兄弟で、いゝ男で、ギルバートと同年輩で、而かも愉快な男だと聞いて、ベラやミラは嬉しがつて居たが、ギルバートの暗い顔に氣付いて居るグリフィス夫人は、彼等ほどには心を動かさなかつた。

しかし、夫の權威と能力とを尊敬してゐる彼女は、唯、默つて居た。だが、ベラはさうではなかつた。

「まア、その人を使つてお上げになるつもりなの？　お父樣。いゝわね。他の從兄弟達よりもいゝ男だつたら、もつといゝんだけど」

「ベラ」とグリフィス夫人が叱つた。しかしミラは、數年前にベルメントから尋ねて來て二三日泊つて行つた或る田舍者の伯父や從兄弟の事を思ひ出して、密かな微笑を浮べて居た。だが、ギルバートはすつかりいらいらし乍らも、自分で自分の考へと鬪つて居た。それがどういふ氣持なのか、彼自身にも解らなかつた。

「家の仕事を習ひたいと言ふのですから、無論斷るわけには行きませんね」と彼はきつぱりと言つた。

「うむ、さうだよ。たとひ從兄弟や甥でなくても、雇ふ時には雇ふのだからね。それに、其の男は、仲々利口で野心家らしいんだ。まア、親類の一人や二人、うちの店に入れたつて、大した害にもならないだらうさ」

「でも、ギル兄さんは屹度厭なのよ。名前から顏までそつくりの人が、此のライカーガスへ來るんですもの」

平常、自分の事をつけ〳〵と言はれるベラは、幾らかの惡意をもこめて、狡るさうに言つた。

「何を！　馬鹿も休み休み言ふがいゝや。僕と名前が同じだらうがあるまいが、僕に似てるようがあるまいが、それが僕にどうしたと言ふんだい」

その時、彼の顔は、特に苦々しげであつた。

「ギルバート」母が非難するやうに言つた。

「何だね？　その言ひやうは。お前の妹ぢやないか」

「いや、お前達がそんなに言ひ合ひをするやうなら、儂も此の青年の事からは手を引かうよ。只、儂としては、その父親が全く、實際家でないから、クライドも多分、世に出る機會がなかつたゞらうと思ふだけの事さ」(父親が始めて親し氣にクライドと言つたのを聞いて、息子は顔をしかめた)「だから、その子を此處に連れて來ると言ふのも、要するに唯、最初のスタートを切らせてやりたい爲め計りだよ。その男が旨くやり居るかどうか、それは儂にも解らない。駄目な男ならば、只、追出して了ふだけの話だよ」

「ほんとに御親切なお考へですわ」とグリフイス夫人がお上手を言つた。「役に立つ男だとよう御座いますがねえ」

「それから、もう一つ言つて置きたいのだが」とグリフイスは重々しい調子で言ひ添へた。

「此の若者が、家の工場に居る間は、殊に、儂の甥であるからには尚の事、普通の雇人と違つた待遇をしてはならないと言ふ事だ。その男は、此處へ遊びに來るのではない、働きに來るのだからね。だから、その男が此の土地に居る間は、特別なつき合ひなぞはしない方がよからうと思ふんだ。無論、儂の見た處ではさういふ風な男とも見えないし、またその筈もないのだが、兎に角、此處へ來るにしても、吾々と同等な人間だと思つて來る譯ではないのだからね。さう言ふ事があると、實は困るのだ。今後になつて、その男の本當の價値が解つて、一人立ちで自分の地位を守つて行くやうになつた時、お前達の中の誰かゞ、多少でもその男を認めるやうな事にでもなれば、その時はまた別問題だが、それ迄は困ると思ふんだ」

その時、女中のアマンダが、皿を片付けてデザートの用意をし始めたが、たまにしかデザートを取らないで、その間に株式や銀行の用事を片付ける事にして居るグリフイス氏は、そのまゝ椅子から立上つて、隣の書齋に這入つて行つた。他の家族達が後に殘つた。

「どんな人だか見たう御座んすわねえ」ミラが母に言つた。

「あゝ、そして、お父樣の思惑通りの人だといゝがねえ。若しさうでないと、隨分嫌な思ひをなさるだらうと思ふのさ」

「しかし、今居る雇人にさへ充分な事が出來ないのに、其の上に未だ人を連れて來るなんて、僕には解らないなァ。それに、僕達の從兄弟が、これ迄ホテルボーイをしてたなんて事が解つたら、此の邊の奴は何て言ふだらう」とギルバートが口を添へた。

「でも、知れるわけがないぢやないの」とミラが言つた。

「どうしてさ。だつて、その男が自分で言ふかも知れないし、それを知つてる人が、此の土地へ來ないとも限らないぢやないか。まァ、何れにしても、言つて呉れないで欲しいものだなァ。屹度、おれ達の迷惑になるんだからな」

するとベラが口を出した。

「兎に角、アレン伯父さん處の二人の子供のやうな鈍間ではない事よ。あんな面白くない子供つて、見た事がないわ」

「ベラ」と母がもう一度注意した。

三

サミユエル・グリフイスがシカゴのユニオン・リーグ倶樂部で遭つたと言ふクライドは、言ふ迄も

なく、三年前カンサス市から逃れ出たあのクライドの、多少修正された姿であつた。その時、二十歳になつてゐた彼は、身體も確かりしてゐたし、經驗にも富んで來て居た。カンサス市を去つて以來、樣々な浮世の波にもまれて、下等な職業や、見すぼらしい部屋や、友のない孤獨や、烈しい勤勞やに剛れて來た彼は、いくらか自信も出來て來て居たし、三年前の彼には信じられなかつた程、言葉つきも流暢になつて來てゐた。それに、カンサス市に居た頃のやうな氣のきいた着物は着て居なかつたにしても、彼の全體の樣子に、大人しやかな處が出來て、大して眼立たなくはなつたが、人々に好感を與へるやうになつて居た。が、貨物列車に乘つて逃れ出た當時のクライドに比べて、今の彼に最も遠つて居る事は、其の頃よりも遙かに注意深く、引込み思案になつて居る事だつた。

實際、彼は今になつて、自分の將來は只自分の力だけで開拓されるのだと言ふことを知る樣になつたのだつた。彼の家族は、彼の爲めに何の役にも立たない。母も父も、エスタも誰も、世間的に無力で貧乏だ。

しかし、樣々な困難の中にあり乍ら、彼の氣持は、彼の家族や、殊にその母や、以前の家庭生活に引かれないで居られなかつた。彼はよく弟や妹の事を思ひ出したし、エスタの事も忘れなかつた。エスタとても、自分の境遇を支配する事が出來なかつたとは言へ、決して下等な人間ではなかつたこ

とが、今、思ひ出せるのであつた。彼はまた、屢々、苦い苦しい思ひで、自分の母に對した仕打や、カンサス市でのあの出來事を思ひ起した。ホルテンス・ブリッグスを失つた事は、彼にとつて烈しい打撃であつた。彼はまた、それ以後の樣々な困苦や、彼の爲めに母やエスタが受けたであらう樣々な困苦を思ひ浮べた。

雪の中の百哩を、苦しい思ひで追はれた彼が、セントルイスに着いたのは、あれから二月後の或る陰鬱な冬の朝であつた。彼は其處で二人のブレーキ掛りに、貨車の中の隱れ場所で見付けられて、時計と外套とを奪はれて了つたが、何げなく取上げたカンサス市の新聞――スター――を見て、彼が最も怖れて居た事が事實になつて居るのを知つた。見ると、大きな二段抜きの見出しの下に、一段半計りの紙面を埋めて、あの日の出來事がすつかり書立てゝあつた。カンサス市の或る相當な家の十一になる娘が、自動車に轢かれて殆んど卽死した事――彼女は一時間後に死んだのであつた。スパーサーとサイプ孃が拘引のまゝ病院に運ばれて、一人の巡査が恢復を待ち乍ら見張つてゐる事、素晴らしい自動車が目茶々々に壞れた事、スパーサーの父親が激怒して、その息子を罵つて居る事、しかしそれよりも困つた事には、旣に窃盜殺人の罪を問はれて居る不幸なスパーサーが、此の大破局に於ける自分の責任を少なくしようとして、只にその時自動車に居た連中、殊に男の連中の名前を言つて了つた

計りでなく、あんな速力を強ひて出させたのは彼等であるから、彼等も彼と同罪だと言つて居る事であつた。しかも、ホテルでのスクワイヤ氏との會見記に依ると、彼はそのボーイ達の兩親の名前や住所まで、發表して居るのであつた。此の最後の件は、皆なに對しての烈しい打擊であつた。其處には、彼等の兩親や親戚達の、あわてふためいた狀況が描き出されてあつた。ラッタラアの母親は泣き乍ら、あの子はいゝ子供で、決して惡い事をする氣はなかつたのだと言つてゐたし、ヘッグランドの母親は、あの子程正直で親切な子供は居ないのだから、屹度その時醉拂らつて居たに違ひないと言つてゐた。クライド自身の家庭はと言ふと、「スター」に書いてある處に依ると、彼の母は驚愕の餘り眞青になつて、容易に事の眞相が攝めないらしく、自分の息子がその仲間に這入つてゐる事も信じようとしないらしかつたが、やがて息子が直ぐ歸つて來て、萬事を說明するだらうと言つたと言ふ事であつた。

しかし、彼は歸らなかつたのだ。彼は警官の怖ろしさと、母親の悲しみに充ちた絕望的な眼を見る事の怖ろしさから、手紙さへ出さなかつたが、數ケ月の後になつて、漸く無名の手紙を出して、彼が丈夫で居る事や、心配しないでゐて吳れと言ふ事を知らせてやつたのであつた。その後の彼は、セントルイス、ペオリヤ、シカゴ、ミルオーキイと、あらゆる町を渡り歩いて、あらゆる職業に身を投じ

た。料理屋の皿洗ひもしたし、小さい藥屋のソーダ水番頭にもなつたし、靴屋の番頭や、食料品屋の番頭にならうとしたこともあつたが、何時も追出されたり、自分で出て行つたりした。だが、その間にも、彼は、一度は十弗、一度は五弗を、母の處へ送つた。かうして殆んど一年半計り過ぎて、彼の捜索もゆるんだらしいし、彼の罪狀も大して重くない事が考へられて來たし、それにシカゴの町で配達馬車の馭者になつて、週給十五弗を貰ふやうになつたので、彼はとう〳〵母親に手紙を出す事を決心した。かうなればもう相當な暮しをして居るのだし、身持ちもよくなつて居ると言ふ事が出來るからだつた。無論、此の時も彼の名前は出さなかつた。

その頃彼は、シカゴの西端の或る下宿に居たが、その合同寢室で次のやうな手紙を書いた。

親愛なる母上——

お母さんは未だカンサス市にいらつしやいますか。御手紙を戴きたう御座います。若し母上がおよろしかつたら、もう一度御手紙が戴きたう御座いますし、僕からも出したいと思ひます。本當にお母さん、僕はさう思つて居るのです。僕は非常に淋しいのです。只、僕が此處に居る事だけは誰にも知らさないやうにして下さい。これからもう一度出直さうとして居る僕にとつて、それは非常な邪魔に

なりますから。しかし、あの時の僕は、決して悪い事をしたのではありません。新聞には色々書いてありましたが、實際、僕は何もしなかつたのです。只、僕がして居ない事に對して罰を受けるかも知れないと言ふ事が、僕には怖かつたのです。僕が家に歸れなかつたのはその爲です。僕には非難される點はない積りですが、併し、お母さんやお父さんがどう考へられるかを怖れたのです。成程、あの時僕は、皆から招待されては居ましたが、あんなに早く走れとも、自動車を盗んで來いとも言つたのではありません。彼が勝手に持出して、僕を呼んで、他の者にも行かせたのです。あの子供を轢き倒した事については、或は皆なに責任があるかも知れませんが、しかし、その積りで轢き倒したのではありません。誰もそんな氣ではなかつたのです。しかし、あれ以來、僕は非常に悲しんでゐます。殊に、あなた方に與へた不幸を考へて、悲しんで居ます。而も、あの時には、お母さんにとつて僕が最も必要な時であつたのですもの。本當に、母上、どうぞ僕を許して下さい。お許しになれますか？

僕は、お母さんがどうしていらつしやるか、それ計り考へてゐます。それから、エスタや、ジュリアやフランクや、父上の事も。あなた方が何處で何をしていらつしやるか、それも知りたう御座います。僕が、お母さんの事をどんなに考へてゐるか、あなたにもお解りでせう。兎に角、僕も、段々物が解つて來ました。以前の僕とは違つて來た積りです。僕は此の世で、何かをしたいと思つてゐます。僕は

成功したいのです。僕は今多少、ましな仕事をしてゐます。カンサス市に居た頃のやうに、いゝ事はありませんが、あんな仕事でなく、併し相當な仕事です。僕は出來るなら、もうホテルの仕事なぞはしたくありませんが、もつといゝ仕事にはありつきたいと思つて居ます。ホテルの仕事なぞは、僕達若い者には餘りいゝ仕事でないと思つて居ます。これだけでも、僕が少しましになつた事がお解りでせう。何處へ行つても、皆な僕を可愛がつて呉れますが、僕はもつとどうにかした人間になりたいんです。今の處、僕は只、部屋代と貯代と着物代とが拂へるだけですけれど、何とかして、多少の貯金を作つて、相當な仕事を覺えたいと思つてゐます。今の世では、何かの專門を持つて居なければ駄目だと思ひます。僕にはそれが解つて來ました。

どうぞ、あなた方皆さんがどうして居られるか、話して戴けませんか。僕はそれが知りたいのです。皆さんが未だそちらに居るならば、僕の愛を、フランクとジュリアとお父さんとエスタに御傳へ下さい。僕は昔通り、母上を愛して居ます。お母さんも時々は、僕の事を思ひ出して下さるだらうと思ひます。さうではありませんか？　危險ですから、僕の本當の名前は書きません。(K・Cを出て以來、僕は一度もそれを使つた事がないのです)これは別名ですが、その中に昔の名前に歸りたいと思つて居ます。今にもよして了ひたいのですが、僕には未だ怖いのです。お手紙が戴けるのでしたら、次の樣に

書いて下さい。

ハリイ・テネット
一般配達會社　シカゴ

二三日中に、此の會社に行く積りですが、かう書いて置けば、母上にも僕にも心配がないのです。しかし、こんな必要がなくなり次第、昔の本當の名前を使ひます。

親愛なるあなたの息子より

彼は、自分の本當の名前を書く可き所に、棒を引いて、その下に「お解りですか」と書き入れて、郵便に託した。

此の手紙に折り返して、ヂンバーの消印のついて居る手紙が、直ぐに歸つて來た。今でもカンサス市に居ると思つてゐた彼は、此の消印を見て非常に驚いた。

親愛なる息子よ

お前の手紙を見て、お前が生きて無事で居る事を知つて、私は驚きもし、喜びもしました。私の望みと祈りは、只々、お前が眞直ぐな狹い道に歸つて呉れる事だけでした。その狹い道だけが、お前を成功と幸福に導く道であります。お前が丈夫で安全で、よい事の爲めに働いて居て呉れるのを、どんなに神樣にお願ひしたでせう。而かも今、そのお祈りの酬いがあつたのです。祈りに答へ給ふ神は讃むべき哉。

お前の陷つたあの怖ろしい間違ひや、それから引起つたお互ひの苦しみや不名譽に就いては、私は決してお前を非難しようとは思ひません。私には、惡魔がどうして吾々を誘惑するか、殊にお前のやうな子供がどうしてその手に陷るかゞ、よく解つて居るからです。只、お前がどうしてかうした陷穽を避けたらいゝか、それをさへ知つてて呉れたらと思ふだけです。而もお前の前途には、長い旅が横はつてゐます。私達が長い間、お前の心の中に植ゑ込まうと努めて來た、あの救主の教へにすがつて、お前は今後、注意深く身を處する積りですか？　苦難に充ちた吾々の道を導いて、美はしい天國に連れて行つて下さる吾等の主の聲に、今後もお前は耳を傾ける積りですか？　吾が子よ、どうぞ約束して下さい。お前の子供の時からの教へを確かりと攫んで、絶えず『正義は力なり』と言ふ事を忘れないで、決して、誰に奬められても、お酒を飲まないと言ふ事を誓つて下さい。惡魔は何時でも弱い者を虜にしようと思つて待つて居ます。幾度も話してあるやうに、『强き飲物は狂氣を呼び、酒は悔を招かん』と言ふ言葉を覺えてゐて下さい。此の言葉がお前の耳に何時でも響いて居る事は、私の熱心な祈りなのです。あの怖ろしい出來事の本當の原因は、其處にあると今でも思つてゐるからです。

あの事件で苦しんで居る時、私はまたエスタの爲に、怖ろしい試みを受けねばなりませんでした。私はもうエスタを失ふだらうと思ひました。そんな怖ろしい時があつたのです。自分の犯した罪の爲めとは言へ、隨分可愛さうでした。その爲めに、私達は隨分ひどい借金をして、長い間苦しみましたが、今は昔よりもいゝ位になりました。私達は今、デンバーに居ます。此處には、私達の傳道館の他に、住所もあるし、少し計りの貸間もあるので、エスタがそれの世話をしてゐます。エスタは今ニクソン夫人と言ふ事になつて居ますが、その可愛いゝ男の子は、お前の子供の時にそつくりで、何時でもお前の事を思ひ出させます。その子も、お前がその頃にやつたと同じやうな色々の事をするので、私達はまた、お前と一緒に住んでゐるやうな氣がするのが度々です。それも、時にとつての慰みになります。

フランクやジユリアも大へん大きくなつて、私の手助けになります。フランクは新聞配達をして、僅かな金ですが、私達を助けて呉れます。エスタは、あの子達を、出來るだけ長く學校にやつて置き

たいと言つて居ます。

お父さまは、餘り丈夫ではありませんが、何分老年の事ですから仕方がありません。勿論、出來るだけの事をして居られます。

お前が、そんなに一生懸命に、自分の身を立てようとして居ることを聞いて、私はどんなに嬉しいか知れません。昨夜もお父樣とその話をしましたが、ライカーガスのお前の伯父さん、サミユエル・グリフイスは大へん成功して、金持になつて居られるさうですから、若しお前が手紙を出せば、屹度、お前が何かの仕事を數なるやうな手助けをして下さる事と思ひます。無論、して下さらないかも知れませんが、兎に角、お前はその人の甥なのです。御承知の通りに、ライカーガスでは有名な金持ちで、大きなカラー業を營んで居られるとの事です。お前は何故その人に手紙を出して見ないのですか？

お前が手紙を出せば、多分何かの仕事を見つけて、お前が働けるやうにして下さるだらうと思ひます。

お前が手紙を出して、先方から何か言つて來たら知らせて下さい。

私はお前の手紙を待つてゐます。どうぞ、お前がどうして暮らして居るか知らして下さい。勿論、私達は何時も、お前を愛して居ます。今後も、出來るだけの事をして、お前を正しきに導きたいと思ひます。私達はお前が大成功する事を願つて居ますが、それと共に、お前がよい青年になつて、清い

正しい生活をする事を望んで居ます。たとへ全世界を得るとも、お前の魂を失つたら何にもならないと思ふからです。クライド、お母さまに手紙をお書きなさい。そして、母の愛が何時でもお前と一緒に居て、お前を導き、お前が正しきに就く事を、主の名に於て祈つて居る事を忘れないで下さい。

慈愛深き母より

此の手紙で、彼の兩親が、以前程經濟的に困つて居ない事を知り、更に、ホテルか、少くとも下宿屋か何かを始めて居る事を知つて、彼は非常に心が休まるのを感じた。彼がサミユエル伯父の大きな事業の事を考へる樣になつたのも、此の時からである。

クライドが、母親の最初の手紙を受取つてから二ヶ月後の事であつた。相變らず毎日、何とかしなければならないと思ひ續けてゐた彼は、或る日、彼の勤めて居た店で賣つたネクタイとハンカチーフとの包みをとゞける爲めに、ユニオン・リーグ倶樂部に行つた事がある。行つて見ると、驚いた事には、その倶樂部の制服を着てゐるラツタラアと、彼はぶつかつたのだ。その時彼は、入口で受付けをやつて居たが、最初は二人共、再び遭つた事を信じ得ない程だつた。

「クライド」ラツタラアが先づ叫んで彼の腕を摑んだが、直ぐ注意深く聲をひそめて、だが熱心にか

う言つた。「やア、どうしたんだ。驚いたね。一體何處から來たんだい？」

クライドも同じやうに興奮して叫んだ。

「何んだ。トムぢやないか。どうしたんだい？　此處で働いてるのかい？」

此の瞬間、自分達の祕密を忘れて居たラッタラアは、「正にさうだよ。もう殆んど一年近く居るんだからね」と言つたが、突然クライドの腕を取つて、靜かにッと言はない計りに、隅の方に連れて行つた。

「シッ、僕は今本名で働いてるんだが、しかしKCから來てる事だけは知らせないんだ。皆なは僕をクリーブランドから來てるのだと思つてるんだからね」

彼はかう言つて、もう一度クライドの手を握つて、その顏に覗き込んだ。クライドも、その顏に動かされた。「それがいゝよ。僕の名前はテネットさ。ハリイ・テネット。忘れちやいけないよ」

しかしラッタラアは、クライドの配達夫の制服を見て言つた。

「で、君は今配達夫をしてるのかい？　ほゝ、そいつは愉快だ。君が馬車を牽いてるなんて、笑はせやがら。何だつて又そんな事をしてるんだい？」

「いや、僕もこんな仕事を有難がつてるわけぢやないんだよ。しかし、僕は君に會ひたいんだが、一體何處に住んでるんだい？」

「うむ、では、かうしよう。六時に此處が退けるんだから、それからなら何時でも會へるんだよ。何處で會はうね？ランドルフ街のヘンリシーではどうだい。それでいゝかい。では七時にね。兎に角、僕はそれまでに行つてるから」

ラッタラアに廻り合つて、有頂天になつてるクライドは、嬉しさうに肯いた。

彼は荷馬車に乘つて、再び荷物を配り始めたが、彼の氣持は、只今夜のラッタラアとの會見に計り向けられてゐた。五時半になると急いで厩舎に行き、下宿に歸つて着物を着更へると、すぐにヘンリシーの方へ急いだ。待つ間もなく直ぐに、これまでに劣らないりゆうとしたラッタラアが、なつかしけな樣子で現はれて來た。

「いや、まア、お前に會へて愉快だよ。KCを出て以來、あの仲間に遭ふのはお前一人だからねえ。家の妹の手紙に依ると、あれ以來、ヒッグビイもヘッギイもお前も、皆目行方が解らないらしいと言ふんだ。あのスパーサーの野郎は、とう〳〵一年喰ひ込んださうだよ。何でも、あの子供を轢殺したのは大した問題ではないさうだが、他人の車を引き出して、無免許で引張り廻し、合圖をされても止めなかつたのがいけねえんださうだ。だが、おいおい」と彼は此の時聲をひそめて「あの時、僕達が捕まつてたらどうなつてたゞらうね。いや、實際危なかつたよ」と、再び大きな聲で笑ひ立てゝ、「兎に角、

大した騒ぎさ。何しろ、あいつとあの娘とをうつちやつた儘、逃げたんだからね。だが、誰だつてあゝするより他にはなかつたさ。僕らがぞろ〳〵とかたまつて行つたつて、仕様がねえからな。何と言ふ娘だつけ？　ローラ・サイブか。僕が見た時には、君はもう居なかつた様だが、さう〳〵、その時、ブリッグスと言ふ娘が居たね。あいつを送つてやつたのかい？」

クライドは頭を横に振つて、「いや、送つて行きやしないさ」と聲高に云つた。

「へえ、では君は何處へ行つたのだい？」

クライドは自分の逃出した時の事を、すつかり話した。

「では、君は未だあのホルテンスの女つちよが、あの後間もなく、ある男とニューヨークへ行つた事を知らないんだね。何でも、何處かの煙草屋に勤めてる男ださうだが、家の妹が會つた時には、新しい毛皮のコートなんぞを着込んで、洒々してたさうだぜ」(クライドは悲しさうに顔をしかめた)「しかし、あの女のおもちやになるなんて、君も隨分青ッぽかつたものさ。あの女なんぞ、君計りぢやない、誰にだつて、惚れるなんて事のない女だからね。だが、君はあれで、相當に營んでたんだらう？」ラッタラアは例の調子で、クライドの腕を輕く叩き乍ら、面白さうに笑つて居た。

やがて今度はラッタラアが、彼自身の物語りを始めたが、それはクライドの話と違つて、極く穏や

かな平凡な物語りだつた。此處でも彼は、自分の幸運や能力に對して、はつきりした信念と勇氣とを見せてゐた。で、最後に彼は、今の仕事にありついた事を話して、「何しろ、シカゴだもの。何だつて出來るさ」と言ふのであつた。

それ以來、彼は、此の土地に居るのであつたが、「勿論、無事平穏で」誰一人、彼に何とも言ふものはなかつた。

間もなく彼は、彼の倶樂部の事を説明し始めた。今のところ、此のユニオン・リーグには缺員はなさゝうに見えるが、とに角、此のクラブの支配人のハーレー氏に話して置かう。クライドにその氣があれば、その中に缺員が出來た時、入れるだらうと言ふ事だつた。

「しかし、例の事件はもう別に心配する事はないよ」その晩も終り頃になつて、彼はクライドにさう言つた。

だが、それからやつと二日過ぎた日だつた。クライドは、今の仕事をよして、元の本名に立歸つて、ホテルの勤め口でも探して歩かうかと思案し續けて居たが、その時、ユニオン・リーグのボーイの一人が、彼の處へ一通の手紙を持つて來た。

「明日、正午前、グレート・ノーザン・ホテルに於て、ライトール氏と面會せよ。就職口あり。絶好

の口ではないが、將來の何かになる可し」

そこでクライドは、店の主任に電話を掛けて、その日は病氣で働けない旨を告げて、取つて置きの着物を着て、ホテルに出かけた。試問の結果は、就職を許される事になつた。何よりも安心したのは、彼の本名を使へる事であつたが、今一つ嬉しい事は、食事をこめて一ケ月二十弗に定められた事であつた。尤もチップは、一週間十弗を出ないと言ふ事であつたが、食事費を計算に入れゝば、現在よりも遙かにいゝ收入になるので、彼も自ら慰める事が出來たっ無論、仕事は彼の馴れてゐる事であつたから、非常に容易しいに違ひなかつたが、昔の職業に歸ると言ふ事は、また舊惡が露顯すると言ふ怖れがなくもなかつた。

だが、それから幾ばくも經たない頃、――三ケ月にもならない頃――に、ユニオン・リーグにも或る缺員が出來た。その頃ラッタラアは、その倶樂部の使用人監督畫間助手を勤めるやうになつて、その監督の覺えも目出たかつたので、直ぐにクライドをその適任者として推薦する事が出來た。彼は、あらかじめクライドに注意を與へて、返答等も敎へて置いたので、クライドは直ぐに採用される事になつた。

グレート・ノーザン・ホテルは勿論、グリーン・デビッドソン・ホテルでさへも、その社會的物質

的地位に於ては、此の倶樂部に遙かに及ばなかつた。クライドは此處で、再び、彼の及び難い生活に接觸する事になつた。實際、此のクラブには、彼がこれまで見た事もないやうな樣々な偉い人が出入りして居たし、その國籍も、只にアメリカ國内の人達ばかりでなく、ヨーロッパを始め、あらゆる國の尊大ぶつた人達が集つて來てゐた。樣々な政治家や運動員や、各地の自稱政治家達は勿論、外科醫、科學者、地方醫者、將軍、文學者、社交家――あらゆる人々が、只にアメリカ計りでなく、世界の各地から集つて來てゐた。

だが、此處で彼を最も不思議がらせて、多少の怖さをさへ感じさせたのは、これ迄のグリーン・デビッドソンやグレート・ノーザンなどで見聞きしてた事と正反對に、此處では、性的の事柄が全然見られないと言ふ事であつた。實際、彼の記憶する限りでは、さうした場所の全部ではない迄も、大部分が性的の事に支配されてゐたのに、此處ではその跡方さへも見えなかつた。如何なる女も此のクラブには入る事を許されない。樣々な偉い人達が、物音も立てない程靜かに出入りして居る計りでなく、特別な遠慮深さが全體を支配してゐた。彼等は屢々、たつた一人きりで飯を食つてゐる。中には二人きりで話し合つたり、數人で話合つたりして居る事もあるし、新聞や本を讀む者や、自動車であちこちと走り歩く者もあるが、その大部分は、クライドが多年馴れて來た、かうした場所での情欲的な要

素に全然無關心であるらしく、少くともそれらに亂されない樣子であつた。

かうした驚くべき世界に身を處し得る人は、恐らくはあの卑しむべき慾望である性慾に、無關心な人であるに違ひ無い。だから、かうした人達の前で立ち働く者は、さうしたものをまるで念頭に置かない樣な顏をしてゐなければならない。

暫くこゝで働いてゐる中に、かうした場處や人物の影響を受けた彼は、次第におとなしやかな謹嚴な態度をとる樣になつた。事實、彼は少くともこの倶樂部に居る間だけは、自分がまるで變つた人間になつて居る樣な氣がした。自分で努めさへすれば、どんなに眞面目くさつた顏でもして居られた。

そして、かうして居れば、何時か、何かの成功の役に立ちさうに思へて居た。實際、かうして注意深く身を處して居れば、いつか誰かの眼に止つて、彼が夢想だもしなかつた樣な、重要な位置に就く手掛りを與へてくれるかも知れない。——そんな事が無いと誰に云へるだらう。

だが、眞實の事を云へば、クライドと云ふ人間は、さうした成長を見込まれ得る人間では無かつた。彼は、根本的に、頭腦が明晰で無かつたし、色々なものを攝取して自分の進歩に役立てる樣な、內部的な力も持つて居なかつた。

四

併し、クライド自身は、之等凡ての原因を、只自分の敎育が足りない爲だと許り思つて居た。子供の時から、街から街へと渡り歩いて、これと云ふ特殊な技能を習ひ覺えて居ない事が、自分の出世の邪魔になるのだと思つて居た。然も、彼の心は、烈しくさう云ふものを求めて居た。世の中の人は皆立派な家に住んだり、大きなホテルに泊つたりして、あのスクワイヤ氏や、この倶樂部のボーイ長等を、顎で使つて居るではないか。然も、自分は未だに使ひ走りの一ボーイに過ぎない。自分も既に二十一歲にならうとして居るではないか？　考へると、彼は非常に悲しかつた。何とかして立身の出來る樣な仕事にあり附き度い。——ホテルボーイで身を終る樣な事であつてはならない。——彼は絕えずそれ許りを念じてゐた。

かうして彼が色々と將來の事を考へて居た時に、偶然にも、彼の伯父サミユエル・グリフイスが、シカゴにやつて來た。無論、彼は、此の倶樂部に關係があつたので、眞直此處へ來て、數日の間を忙しく驅け歩いたり、訪問者を受けたりしたのであつたが、其の時、部屋々々の名刺を取り替へる係りになつてゐたラツタラアは、直ぐに其の名前を見附けて、クライドに知らせて呉れた。

「君はニューヨークのどこかに、カラーの商賣をして居る伯父さんだつたか何だつたか、兎に角、グリフィスつて名前の人があるつて云つてたつけね」

「あゝ、あるとも。サミュエル・グリフィスと云つて、ライカーガスで大きなカラー工場を持つてる人だよ。しよつちう新聞に廣告が出てるし、ミシガン通りには、大きな電飾廣告が出てるぢやないか」

「君が見れば、その人だと云ふ事が解るかい？」

「いや、僕はまだ會つた事は無いんだ」

「多分その人だらうと思ふが」とラッタラアは小さな芳名表を見せて、「ね、ニューヨーク、ライカーガス、サミュエル・グリフィス。きつと同じ人だらうと思ふんだが」

「うむ、きつとさうだよ」とクライドは多少昂奮して云つた。これこそ、彼が永い間考へて居た伯父さん其人だつたからである。

「つひ二三分前に、こゝを通つて行つたのだぜ」

と、ラッタラアが續けた。「デボイが鞄を持つて行つたよ。非常に立派な人だからね、よく氣を附けて居給へ。きつと君の伯父さんだよ。中脊で鳥渡瘠せてゝね、白髪交りの口髯を生して、琥珀色の帽子を被つてゝ、仲々立派だよ。僕が後で知らせてやるからね。若し君の伯父さんだつたら、うまく見

せ掛けた方がいゝよ。何かの役に立つからね。きつと、カラーの一枚や二枚は呉れるよ」

さう云つて、彼は笑つた。

此の冗談に、クライドは、我が意を得たと云ふ樣に笑ひ出したが、內心彼はまごゝしてゐた。伯父のサミュエルが此の倶樂部に來てゐるなんて！　それならば自分を伯父に紹介するに誂へ向きの機會では無いか。彼は現在の地位に就いてから、此の伯父に手紙を書かうと何度も思つたのであつたが、然も今、此の倶樂部に居ると聞いて、その機會が來たと思つた。

だが待て！　彼が伯父の前に出るとして、伯父は彼を何と思ふだらう？　彼は只一介の倶樂部ボーイでは無いか。一體、伯父は、クライドの樣な年頃のボーイに對して、どう云ふ態度をとるだらう？既に二十歳を越えて居る彼は、ボーイにしては年をとり過ぎてゐた。さう云ふボーイを自分の親類として見た時、富と地位との高い彼は厭な思ひをしないだらうか？　彼の爲に何にもしてくれない許りでは無い。口を利くのも厭がりはしないだらうか？——かうした思ひの爲に、彼はそれからまる一日の間、其のまゝにして居た。

併し、翌日の午後までには、彼もすでに數回伯父を見て、相當にいゝ印象を與へる事が出來たと思つてゐた。だが、自分の父とは違つて、非常に拔け目の無い鋭い伯父である樣に思へたし、此處の誰

からも尊敬されて居る樣に見えたので、折角の機會ではあるが、伯父に會ふのを止さうかとさへ彼は思つたが、と云つて、伯父が全然不親切な人の樣にも見えなかつたので、ラッタラアがすゝめて呉れるのを幸に、とう〳〵伯父の室に手紙を取りに出掛けた。それは、伯父が特別に配達をして貰ひ度いと云ふ手紙であつたが、伯父はろく〳〵彼の顏も見ないで、手紙と一緒に半弗の金を渡した。

「どのボーイでもいゝから、直ぐ此の手紙を持つて行かしてお呉れ。此の金はお前がとつとくんだ」

其の瞬間、クライドは、自分が甥である事を知つてるのでは無いかと思つた程に吃驚したが、無論、知つてゐる譯では無かつた。クライドは、多少がつかりして、その室を出て行つた。

それから間も無く、伯父へ宛てた五六通の手紙が來た時、またラッタラアが注意して呉れた。

「もう一ぺんぶつかつて見る氣があるんなら、此の手紙を持つてゝ見給へ。多分まだ室に居られるだらうと思ふから」

クライドは多少躊躇した後に、とう〳〵また其の手紙を持つて伯父の室に行つた。

その時、手紙を書いて居た伯父は、只「お這入り」と云つたゞけだつたが、多少意味有りげな笑ひを浮べたクライドは、直ぐに這入つて、「グリフイスさん、貴方へのお手紙でございます」と云つた。

「や、有難う」

答へて伯父は、ポケットをさぐり出したので、クライドは此の機會だと思つて叫んだ。

「いゝえ、どうぞ、その御心配は御無用になすつて下さいまし」伯父は銀貨を攫み出したが、クライドは一言も云はない中にまた云ひ添へた。

「グリフイスさん、私はあなたと親類ではないかと思ふのでございますが。あなたは、ライカーガスのグリフイス・カラー會社のサミユエル・グリフイスさんではございませんでせうか？」

「あゝ、多少さう云ふ仕事もやつてるんだが、君は誰だね？」

伯父はぢつと彼を見詰めて、聞き返した。

「僕の名はクライド・グリフイスと云ふのですが、僕の父のアサ・グリフイスは、あなたの兄弟ではないかと思ふのでございますが」

彼の一族で、最も物質的に惠まれて居ない此の兄弟の名を聞くと、サミユエル・グリフイスの顏は少し許り曇つて來た。アサの名を聞くと共に、弟のづんぐりした貧弱な姿が、不快にも彼の眼前に浮んで來たからである。彼は、弟がまだクライドの年頃であつた頃、ベルモントの父親の家に居た頃から會はないのであるが、其の頃のクライドの父親は、づんぐりと肥つた、肉體的にも精神的にも惠まれない男で、どこか脂ぎつた樣な處があり、ひどく氣の弱い青年であつた。其のぶよ〳〵した頰や、

青白い水ッぽい眼や、ちゞれた髪の毛を思ひ出して、今、其の息子と名乗る青年の、小綺麗な、抜け目なささうな悧巧さうな姿を見て、彼は此の青年を好きになつたのであつた。

併し、長兄のアレンと二人で、父親の可成りな財産を殆ど全部相續してしまつたサミュエル・グリフィスは、彼等の父親のアサに對する誤解からとは云へ、其の末弟アサに對して、絶えず何か悪い事をして居る樣な氣がしてゐたのだつた。實際、アサの薄馬鹿で役に立たない事を見てとつた父親は、最初は只追ひ使つて、彼を無視してしまはふと思つてゐたが、とう〳〵クライドと同じ年頃になつた頃に、家から追ひ出して了つて、アサには只千弗だけをやつて、殘りの約三萬弗の財産を、殆ど全部二人の兄達に分けたのであつた。

サミュエル・グリフィスが、今、不思議さうにクライドの顔を見つめたのは、實にこれらの事を思ひ出したからだつた。實際、クライドは、長い以前に家から追ひ出された彼の弟とは、どの點から見ても似て居ない樣に思へた。のみならず、彼は自分の息子のギルバートにそつくりではないか。然も、彼が此の面白い倶樂部に何かの地位を持つて居ると云ふ事が、クライドの懸念に反して、此の伯父に或る印象を與へた。何と云つてもライカーガス地方の限られた土地で、限られた活動をしてゐるサミュエル・グリフィスにとつては、此の倶樂部の存在や性質は、尊敬される可きものであつたから

である。然も、かうした場所で、かうした客に接してゐる若者達は、皆賴母しさうな溫しやかな樣子をしてゐた。從つて今、自分の眼の前に、すつきりとした制服を着て、素晴しく物狎れた樣子で立つて居るクライドを見た時、伯父が非常な好感をクライドに持つたのも、無理のない事であつた。

「ほう？　何と云つたい？　アサの息子だつて？　こいつァ驚いた。何しろもう二十五年も六年もお前のお父さんの事を聞かなかつたのだからね。最近噂を聞いたのは、何でもミシガン州のグランドラピッヅに居た頃か、それとも此のシカゴだつたかしら。併し今は此處に居るんぢやないんだらう？」

「はァ」と、クライドはさう云へるのが嬉しかつた。「今はデムバーに住んでゐます。僕は只一人で此處に居るんですから」

「で、お父さんもお母さんも生きて居るんだらうね」

「はあ、二人とも生きて居ります」

「未だに宗教の方の仕事に關係してゐるのかい？　――お前のお父さんは」

「はァ」と、クライドは稍々曖昧に答へた。自分の父がやつてゐる樣な宗教上の仕事は、社會的には最も貧弱なやくざなものに思へたからである。「今では、教會と一緒に宿屋みたいな事もやつてゐる樣でございます。室が四十許りもあるさうでございますから、母と二人で、兩方をやつてゐらしうござ

います」

「あゝ、さうか」

クライドは、自分の地位を伯父によく見て貰はうと思つて、多少誇張して色んな事を話した。

「だが、まあ、皆よくやつてゝくれて結構だ」サミユエル・グリフイスは、クライドのしつかり者らしい樣子に、寧ろ滿足して云ひ續けた。「で、お前は、かう云ふ種類の仕事を好いてるんだらうね」

「いや、決してさうぢやないのでございます」クライドは、此の問ひに生き返つた思ひがして、早口に答へた。「成程、收入は相當に多うございますが、私はかう云ふ風にして金を儲ける事は、實は好かないのでございます。只、何と云つて特別に勉強をする機會が私には有りませんでしたし、自分で何かをやつて見る樣な機會もなかつたものですから、つひかう云ふ仕事に這入つたのでございますが、眞實は、私は、金なんぞの事はどうでもいゝのでございます。實は、母も、あなたに一度お手紙を出して、何とか身を立てる機會を與へて貰へる樣にお願して見ろ、と云つて寄來すのでございますが、さう云ふ事が、あなたの御氣に入るかどうか解らないものですから、今日までお手紙も上げなかつたのでございます」

言葉を切ると、クライドは微笑を浮べて、窺ふ樣に伯父の眼を見た。

伯父も暫く彼の顏を見て居たが、言葉の樣子や、其の態度にすつかり喜ばされて、

「うむ、そいつァ面白い。早く手紙を寄來せば好かつたのに」

「併し、あなたの會社等で、私の樣な者に出來る仕事が何かあるのでございませうか？」

稍々暫くして、クライドは大膽にさう云つて見た。

サミユエル・グリフイスは、考へ深さうに只彼の顏を見てゐるだけだつた。彼は、かうした露骨な質問を好みもしたし、また好まなくもあつたが、見た處クライドが、何か出來さうな人間ではある樣に思へた。彼自身の息子によく似て居るクライドは、きつと快活で野心家であるだらう。工場の事が多少解つて來たら、何かの課の課長として、或ひは其の助手として、息子の下に働かせるのもいゝだらう。何れにしても、息子に此の青年を使はせて見る事だ。さうした處で、別に支障はないだらう。

この子の父には、自分も兄のアレンも、共に或る責任を持つて居るのだから。

「よろしい」と、暫くして彼は云つた。「兎に角、少し考へて見よう。そんな事が出來るかどうか、今直ぐには云へないからね。併し、どつちにしても、始めからこゝで取れる樣な金は取れないだらうから、それだけは知つて置いて貰はなきァならないよ」

「いや、それで結構でございます」何よりも此の伯父と交渉が持てる事に、喜びを感じたクライドは

叫んだ。「無論、自分でそれだけ頂ける人間になる迄は、高い給料を頂かう等とは決して思つてゐませんから」

「それに、工場に這入つて見て、お前が其の仕事が厭になる事もあるかも知れないし、我々の方でお前が厭になる事があるかも知れないが、それも心得ておいて貰はなきァならないよ。誰でもが、あの仕事に適すると云ふ譯ではないからね」

「いや、其の時には、只追出して頂くだけの事でございますが、私は、あなたやあなたの大きな工場の事を聞いて以來、何時でもさうして頂き度いと思つて居たのでございます」

此の最後の言葉を聞いて、サミユエル・グリフイスは喜んだ。彼や彼の成功が、此の青年にとつて、一個の理想になつてゐる事が解つたからである。

「いや、よろしい。併し今は其の暇がないし、まだもう一日や二日は此處に居る積りだから、其の間に兎に角考へて見よう。多分何とかなると思ふが、今ははつきりした事が云へないからね」

かう云つて、伯父はぶつきら棒に手紙の方に身體を向けた。

クライドは、此の際としては最上の印象を與へた事を感じて、きつと善い事があるだらうと思つたので、厚く禮を云つて急いで室を出て來た。

翌日、其の事を更に考へて見たサミユエル・グリフイスは、クライドが充分役に立つ人間であらうとは思つたが、家に歸つてからの自分の立場も考へたので、クライドには工場に何かの缺員が出來る迄待つて居れと告げた。缺員が出來れば、直ぐにも知らせてやるからと云ふのであつた。

そこで、クライドもそのまゝ此處に殘つて、伯父の工場に勤め口の出來るのを、千秋の思ひで待つ事にした。

ライカーガスに歸つて行つたサミユエル・グリフイスは、其の後も息子と相談をした結果、クライドを先づ此の工場のどん底に入れる事に決心をした。それは、此の工場のカラー製造に使ふ凡ての織物の皺伸しをする地下室であつて、眞實に此の商賣の技術を覺えようとする者は、誰でも先づやらせられる仕事であつた。其の給金も、グリフイス一族である事を全然無視する事も出來ないと云ふので、最初から十五弗といふ過分の給金が拂はれる事になつた。

無論、これだけの給金では、普通の徒弟ならば兎も角も、社長の親類としてのクライドには少な過ぎる事を知つて居たが、傭人に對して慈善家であるよりも、寧ろ實際家であるグリフイス父子は、初心者であればあるほど、缺乏と困苦に堪へさせるのがいゝと言ふ、彼等一流の理論に從ふことにした。

その資本主義的利用法は、到底、社會主義的理論とは相容れないものであつた。彼等の考へによれば、

社會は幾階もの階級に分れる可きものであつて、低い社會階級は高い階級を渇望す可きであつた。人は誰でもそれ〴〵の階級を持つ可きである。誰かに――たとひ親類であつても――誰かに不當な好意を示さうとする時に、人は愚かにも此の必要にして避け難い社會的標準をぶち毀しつゝあるのである。社會的にも智的にも自分より眼下の者を扱ふ場合には、それを扱ふべき或る標準が必要である。その一番いゝ標準は、――かうした目下の連中に、金を得る事が如何に困難であるかを、はつきり自覺させる事――然も、世界を建設する唯一の道である物質的生産を起すには、金が如何に必要であるかを理解させる事――更に、此の建設的事業を、あらゆる細部に亘つて訓練させる事が、如何に必要であるかを理解させる事――それだつた。無論、それには、困難と質素との生活に馴れる必要があつた。それは彼等の性格の爲めに善い事であつた。それは、これから立身しようとする人間の、精神を造り上げる事であつた。それの出來ない人間には立身の道はない筈だつた。

そこで、一週間計りの後、クライドの仕事が大體決まると、サミュエル・グリフィス自身でシカゴのクライドに、手紙を出した。その手紙で、彼は、二三週間以内ならば何時でもいゝから、此方へ來るようにと言つてやつた。しかし、此方に來る少くとも十日前に、その事を知らせて欲しい事や、此方に來たら、工場の事務所にギルバート・グリフィスを尋ねて行く事を書いてやつた。

此の手紙を受取ると、クライドは有頂天になつて、その事を直ぐに母親に知らせてやつた。ライカーガスの伯父の工場で、或る地位を與へられたから、これからいよ〳〵成功するのだと書いてやつた。折返して母から手紙が來て、くれ〴〵も行狀と友達とに注意しろと言つて寄越した。クライドのやうな野心のある青年にとつては、惡い仲間が總ての惡と禍との根源である。若し彼が、惡い、馬鹿な、我儘な若い男女を避けさへすれば、總ては無事であるに違ひない。彼のやうな容貌や性格の青年は、惡い女に引掛り易い。それは既にカンサス市での出來事で、クライドにも解つてゐる筈だ。しかも今、彼は未だ若くして、彼の爲めに何でもして呉れる金持の處へ働きに行くのではないか。無論、今後もしげしげと手紙を寄越して欲しい――母の手紙にはこんな事が書いてあつた。

かうして、言ひ附けられた通り、豫め手紙を出してから、クライドはとう〳〵ライカーガスへ出て行つた。しかし工場を尋ねる時間なども解らないので、彼は直ぐに工場には行かないで、取敢へず此の町でも相當なホテルである、ライカーガスハウスに泊る事にした。

しかし、ホテルに着くと、未だ時間も充分にあつたし、此の町の樣子や、伯父の地位なぞを知りたかつたので、彼は町の樣子を見に出掛けた。仕事を始めれば、もうそんな時間はないやうに思へたからだつた。彼は先づ此の町の中心である中央通りに出て行つたが、成程、此の町の商業的中心である

らしく、到る處、無數の事務街に貫かれてゐて、活氣と雜沓とに滿ちてゐた。

五

しかし、歩き廻つて居る中に、クライドは此の町が、これ迄の町とはすつかり變つて居る事を知つた。何よりも萬事が非常に小規模であつた。半時間前に彼が降りた停車場にしても、ひどく小さく退屈で靜かであつたし、町の反對側の――マホーク川の川向ふの――工場地帶にしても、あちらこちらに赤や灰色の建物があつて、その中にぽつぽつと煙突が立つて居るに過ぎなかつた。此の工場地帶と市街との間には、二つの橋が懸けてあつたが、その一つは、停車場から眞直ぐ伸びて、その上を走る電車軌道が、中央通りの方に曲り込んで居た。橋の附近にも、小さい住宅や店が、ぱら〳〵と散らばつて居るに過ぎなかつた。

しかし中央通りに行くと、流石に車馬、自動車の往復で活々してゐた。ホテルの向ひ側のスターク呉服店等は、少く共百尺近い間口の白煉瓦四階建てゞあつて、あらゆる窓を飾り立てゝ、澤山のマネキンが動いて居るのが見えた。その附近の二流ホテルだの、色々な自動車の陳列室だの、活動小屋だのも、それ〴〵相當にやつてゐるらしかつた。

歩いて居る中に、彼は突然、ひつそりした住宅地の廣い並木道に出て行つた。その附近の家々は、どれもこれも宏莊で、廣い芝生を取つたりして居る樣子が、ひどく伸び伸びとして、しかも堂々としてゐた。一見したゞけで、此の街の中心地帶が、例外的に富裕で贅澤である事が分つた。其處には立派な鐵の垣根があつたし、花で圍まれた歩道があつたし、到る處に樹木や叢が生え茂つて居て、贅澤さうな立派な自動車が、車寄せに着けてあつたり、道を走つてゐたりした。而かも、その附近の店には、金持の人達の喜びさうな自動車だの、寶石だの、リネン類だの、皮細工だの、家具だのを賣つて居た。

だが、彼の伯父さん達は今何處に住んで居るのだらう？　どの家だらう？　どの通りだらう？　今迄見て來た家より立派なのかしら？

クライドは直ぐに歸つて行つて、伯父に報告しようと思つた。彼は、伯父の工場は多分川の向ふにあるのだらうと思つて、その方に歩いて行つた。道々、彼は伯父に會つたらどう言はうか、どうしようか等と考へ續けた。一體、從兄弟のギルバートはどんな男だらう？　向ふでは自分を何と思ふだらう？　彼は、先日の、伯父の手紙で、彼の息子のギルバートの事を知つたのであつた。中央通りを通つて、停車場の方に行つた彼は、間もなく自分の探して居る大きな壁の前に出た。それは殆んど千尺

に近い間口の、赤煉瓦の六階建であつて、最近建て増したカラ部の他は、殆んど全部が硝子張りになつてゐた。後になつて知つたことだが、此の新館と舊館との間には幾つもの橋が懸けてあつて、二つの建物の南側の壁が、直ぐにマホーク川の川岸に望んでゐた。その川岸の道路の入口には、幾つもの入口があつて、それ〴〵に制服を着た雇人が立番をして居た。第一、第二、第三の入口には『使用人の外入る可からず』と書いてあり、第四の入口には『事務所』と出て居り、第五、第六は、荷上げや積荷にだけ使つて居るらしく見えた。

クライドは事務所に這入つて行つた。誰も咎めないので、二つの扉を開けて這入つて行くと、ある手摺りの後の電話臺に坐つて居る一人の交換手の前に出た。そこには小さい入口があつて、自然に此の交換手が事務所への出入を監守してゐる形になつてゐた。彼女は三十五六の、大して別嬪でない、ずんぐりした女だつた。

「いらつしやい」クライドを見ると、女は直ぐ聲を掛けた。

「ギルバート・グリフイスさんにお目に掛りたいのですが」クライドは、幾らか神經質になつて、口を切つた。

「何の御用で？」

「僕はクライド・グリフイスと言ふ者で、あの人の從兄弟でございます。伯父のサミユエル・グリフイスさんからの御手紙を、此處に持つて居ります。多分御目に掛かれるだらうと思ふんですが」

手紙を出すと、彼女の思ひきつて冷淡な調子が、酷く親切さうに變つて來た。彼の言葉計りでなく、その樣子からも、強い印象を受けたらしい彼女は、狡るさうに、しかし珍しさうに、彼の顏をじろじろと見た。

「さあ、いらつしやいますかしら？」

彼女は酷く丁寧になつて、直ぐにギルバート・グリフイスの事務室に電話を繼いだらしかつた。直ぐに通じて、ギルバート・グリフイスは今忙しくて、鳥渡、手が離せないと言ふ返事が來たらしかつたが、彼女の方から「ギルバートさんの從兄弟のクライド・グリフイスさんと言ふ方で御座います。サミユエル・グリフイスさんの御手紙を持つていらつしやいます」と、言つてやつた。そして、やがて、クライドに「さあ、お掛けになりません？　多分、ギルバート・グリフイスさんが直ぐにお會ひになると思ひます。只今、鳥渡お忙しいさうですけれど」

生れて始めて、かうした異常な尊敬を拂はれた事に氣付いたクライドは、それだけで酷く動かされた。これ程金持で、これ程勢力のある家族の完全な從兄弟であるなんて！　此の途方もない工場！

それは素晴らしく大きな五階建ではないか。彼はたつた今、川向ふを歩き乍ら、明け放された窓を通して、女工達に充ちて居る部屋の中を見たのであつた。彼は、我にもなく身震をした。此の高い赤煉瓦の建物こそ、曇りない成功を示すものゝやうに思へたからだつた。

彼は、此の待合室の灰色の壁を見廻した。向ふの方の扉を見ると、其處に「グリフイス・カラー・シャツ合資會社。社長、サミユエル・グリフイス。祕書、ギルバート・グリフイス」と書いてあつた。

あの向ふには何があるのだらう？　ギルバート・グリフイスとはどんな男だらう？　冷淡な不親切な男だらうか？　それとも、溫かい親切な男だらうか？

そんな事を考へて居る時、突然、その女が彼の方を向いて言つた。

「どうぞ、お入り下さいまし。ギルバート・グリフイスさんの御部屋は、此の廊下の一番端の川に向いた方で御座います。お這入りになれば、誰か御案内いたしますでせうから」

彼女が立上つて、彼の爲めに扉を開けて呉れさうにしたので、クライドはすつかり赤くなつた。「いや、結構でございます。有難う御座います」彼は非常に丁寧に言つて、例の硝子の扉を開けた。見ると、其處には、殆んど百人を越える程の雇人が――主として若い男女であつたが――皆な忙しさうに働いて居た。彼等の大部分は、綠色の光線除けを目深かに被つて居た。男達の殆んど總ては、短かい

アルパカの事務服を着るか、さもなくば、袖カバーを掛けて居たが、若い娘達は皆な可愛らしいギンガムか、さもなくば事務袴を着けて居た。その中央の白い柱で圍まれた邊には、此の會社の課長級の人が居るらしく、スミリイ氏だの、ラッチユ氏だの、ゴットボーイ氏だの、バーチー氏だのと、それぞれ、名札が立てゝあつた。

ギルバート・グリフイスの部屋は一番端にあると交換手に言はれてゐたので、クライドは此の部屋の側を通つて、ずん〳〵と廊下を進んで行つた。見ると、「祕書ギルバート・グリフイス氏」と書いてある扉が、半開きになつてゐた。彼は、這入つて行かうかどうしようかと、鳥渡まごついてゐたが、直ぐに近寄つてコツ〳〵と扉を叩いた。直ぐに、お這入りと言ふ鋭い聲があつた。這入ると、一人の若者が坐つて居た。それは、クライドよりもいくらか小柄で、幾らか老けて見えたが、酷く冷たい鋭い顏をして居た。一口に言つて、クライドが自分でもさうありたいと思つて居たやうな若者で、實行力に富んだらしい、尊大な樣子をして居た。彼は、そろ〳〵春が近づいて來るので、酷く派手な黑つぽい着物を着て居たが、クライドは直ぐに、それを見てとつた。クライドのよりも、幾らか薄い髪の毛は、綺麗に額から撫附けられて、彼を突刺すやうに見てゐるその眼は、明らかな綠色を帶びて光つて居た。彼は、部屋の中でだけ掛ける角緣の眼鏡を掛けて、素早く、クライドの靴から、手にしてゐるフエル

ト帽まで見廻した。

「あゝ、君は僕の從兄弟ですね」クライドが進み出て立止ると、彼は寧ろ冷たい調子で言つた。餘り有難くない微笑がその唇に浮んでゐた。

「はア、左樣でございます」クライドは、此の冷靜な態度に、まご〳〵させられながら答へた。瞬間に、彼は、此の從兄弟を、此の大工場の設立者である伯父と同樣に見てはならない事を感じた。彼は只此の工場の繼承者と言ふに過ぎない。だからこそ、此の父親がなければ何にも出來ないと見られることを怖れて、わざとかうして虛勢を張つてゐるのだ——クライドはすぐ、さう思はないではゐられなかつた。

しかし、同時に、彼に何の要求をすべき根據もない事を知つてゐたし、彼に見せられた好意に關しては、充分感謝もして居たので、彼は出來るだけ有難さうな微笑を浮べる事に努めた。だが、ギルバート・グリフィスは、それを見て直ぐに、單なる從兄弟としては、殊に彼や父祖の庇護を求めて居る人間としては、僭越な男だと見てとつた。

しかし、既に父親から彼の事を話されて居るのであるし、今更どうにも出來ないギルバートは、例のすつきりしない微笑を續け乍ら、相手の心理檢査に移つた。

「僕達も、今日か明日かは、君が見えるだらうと思つて居たのだが、どうです、旅行は愉快だつたですか？」

「はア、非常に」クライドは、此の質問にも多少まごついて答へた。

「それで、君は此處で、カラー業の事を習ひたいと思つて居るんですね」言葉にも、調子にも、酷くわざとらしい卑下の調子が見えた。

「何とかして將來に身を立てる緒口を得る爲めに、何か敎へていたゞきたいと思つて居るのでございます」クライドは出來るだけ、此の從兄弟を理解しようと思つて答へた。

「シカゴで、君と父と會つて話した事は、父からも聞いたのですが、君は未だ實務についての經驗はまるでないらしいですね。帳簿附けも出來ないのぢやないのですか？」

「はア、出來ないのです」クライドは、多少殘念さうに答へた。

「速記術とか何とか、さう言つたものは？」

「いえ、出來ません」

クライドは、自分乍ら怖ろしく何もかも駄目な事を感じて、そつけなく答へた。ギルバート・グリフィスも、何となく絶望した樣な調子で彼の顏を見た。

「それでは先づ、皺伸しの仕事から始めるのが、一番いゝかも知れないな」と、彼は此の件に就いて、未だ父親と何も話して居ないかの樣な樣子をして、言ひ續けた。「その仕事が、此處での先づ手始めの仕事なんだが、最初から仕事を習ふのにはそれが一番いゝでせう。今後、君がどんなに役に立つかゞ解つて來たら、もつといゝ仕事に移つて貰へばそれでいゝのだから。君に多少でも、事務を採つた經驗があると、此處でも直ぐに役に立つんですがね」(これを聞いて、クライドが眼を伏せたのを氣附いて彼は喜んだ)「しかし、何れにしても、實務に就いて勉強する事にはなるんですからね」彼がかう言つたのは、クライドを慰める爲ではなく、只、事實の儘を言つたに過ぎないのだ。そして、クライドが何も言はないのを見てかう續けた。「しかし、何から始めるにしても、兎に角、何處かに落著くのが急務ですね。未だ何處にも間借りをしてないのでせう?」

「はア、晝の汽車で着いた計りですし、それに、少し埃ッぽくもなつて居ましたから、ホテルに行つて埃を拂つて來たのでございます。後で下宿を探して見る積りですけれど」

「いや、それでいゝですが、下宿は君が探さなくてもいゝでせう。支配人にさう言つて、何處かいゝ處を探さして置きますから。君よりもその男の方が此の町の事はよく知つて居る譯ですからね」

彼がかう言つたのは、クライドを彼の勝手な所へ住まはせない爲であつたが、同時に、クライドが

何處に住ふかと言ふことに、彼等が非常な關心を持つてゐると思はせない爲めでもあつた。結局の彼の氣持は、彼の家族の誰も、クライドを重要視してゐない事を示して、クライドを操縱する便に供しようと言ふのにあつた。やがてギルバートは、手を伸して机の上の釦を押した。綠色のギンガムを着た小綺麗な小娘が入つて來た。

「ホイガム君に、鳥渡此處へ來るやうに」娘が出て行くと間もなく、中肉中背の四十男が、ひどく緊張した樣子で入つて來た。彼は、どんな心配事が起つたのだらうと言はない計りに、おつかなびつくりな顏をして居た。

「ホイガム」と、若いグリフイスは、勿體振つた調子で言ひ出した。「これは我々の從兄弟のクライド・グリフイスだが、僕がこれから言ふ事をよく覺えて、呉れ」

「かしこまりました」

「實は、此の人を先づ皺伸部に入れる事になつてるんだから、君がよく色々と敎へてやつて呉れ給へ。それから、後でいゝから、ブラレーの妻君にさう言つて、此の人の下宿に案內して上げるやうに」(これら總ての事は、既に先週の中にギルバートと、ホイガムとの中に相談が出來てゐたのだが、彼は今始めて相談をする樣な顏をして居るのだつた)「それから、君は直ぐ門番に、此の人の名前を知らせ

て、明日の朝から始めるんだと言つて置いて呉れ給へ」

「かしこまりました」とホイガムは鄭重におじぎをした。「それだけで御座いますか？」「あゝ、それだけだ。ではグリフィス君、君はホイガムと一緒に行き給へ、此の人が皆話して呉れるから」

ホイガムはクライドの方へ向いて、「では、グリフィスさん。お宜しかつたら私と御一緒に參りませうか」と、丁重に言つた。クライドは直ぐ、彼の後について出た。若いギルバートは、直ぐに自分の机の方に向いたが、同時に頭を振つてゐた。その時彼は、クライドを先づ先づ普通のホテルのボーイ並みの男だと感じて居るのだつた。何だつてこんな男が、こんな仕事に入つて來たのだらうと、思つてゐたのだつた。「一體、此處で何をする積りで來たのだらう？　何になる積りなんだらう？」と考へ續けてゐた。

ホイガム氏の後について行くクライドは、またギルバート・グリフィスの事を、何と言ふ旨い地位に居る男だらうと考へてゐた。無論彼は、どんなに遲く事務所に來ようと、どんなに早く歸らうと、自分の勝手であるに違ひないし、兩親や姉妹達と立派な家に住んで居るに違ひない。而かも此處では、彼自身の從兄弟であり、金持の伯父の甥である彼が、此の工場で最も低い仕事をする爲めに、案内をされつゝあるのだ。

だが、ギルバートの部屋を出て、此の大工場の色々な光景や物音に接すると、彼ももうそんなことを考へてはゐられなかつた。廊下を通つて大きな事務室の向ふに行くと、其處には更に大きな部屋があつて、その中には無數の大函が並べられてあつた。その中には、樣々な寸法のカラーが、それ〴〵の小さい紙函に入れられて、ぎつしりと詰つて居るらしかつた。此の大函は、それ〴〵の注文に從つて、小車を引いたストツク掛りの少年の手でカラーを詰められたり、注文掛りの番頭に依つて、素早く空ッぽにされたりしてゐた。

「グリフィスさんは、これ迄、カラー工場の經驗はおありにならないのですね」

ギルバートの見ない處へ行くと、ホイガム氏は多少元氣になつて聞いた。クライドにはグリフィスさん等と言はれるのが、鳥渡變な氣がした。

「いゝえ、僕はかうした仕事には未だ何も經驗がないのです」

「しかし、何れ、此の仕事をすつかりお仕上げになるお積りでせう？」

彼は長い廊下を歩き乍らさう言つたが、狡さうに邊りに眼を配つてゐる事にクライドは氣付いた。

「えゝ、さうしたいと思つて居りますが」

「いや、こんな仕事は譯なく覺えられるなんて、よく人が言ひますけれど、仲々これで他人が思つて

るやうな物ではありませんですよ」

彼は別の扉を開けて、或る暗い部屋を通つてから、また別の部屋に這入つて行つた。その部屋にも、無數の大函が積み上げてあつたが、その函の中には白い巻き布が積上げてあつた。

「皺伸しからお始めになるんだとすると、少し此の邊の事をお知りになつとく必要がありますが、此處にある、此の布が皆カラーになるのであります。之を巻布と申しまして、此の一本が一巻きと言ふ事になつて居ります。これを地下室に持つて行つて皺伸しをするのでありますが、さうしないと役に立たないのであります。此の儘だと、作つた後になつてカラーが縮んで參るものですから、その爲めに、これを皆な水につけて、後で乾かすのであります」

その男が、勿體なささうに話す樣子で、クライドは今一度、此の男が彼を普通の雇人と見てゐない事を悟つた。彼がグリフィスさんとさん付けに呼んだり、此の仕事をすつかり覺えようとしてゐるのだと見たり、丁寧に布の事を說明したりする樣子では、少くとも、多少の尊敬をクライドに拂はねばならないと、思つて居るらしい事が、明らかであつた。

やがて彼は、ホイガム氏について、或る梯子段を降りて、がらんとした地下室に入つて行つた。部屋に張り渡した四つの白熱燈で見ると、其處には端と端との通じて居る幾列もの水槽が、部屋一ぱい

に蟠つて居て、中に滿たされた熱湯の底に、二階で見たと同じやうな巻布が漬けてあつた。其の側には、濡れた布を張り付けた、大きな乾枠が、凡そ百五十尺の室の長さ一ぱいに張り渡してあつて、それを圍む熱氣パイプの中を、ぐる〳〵と動くやうになつて居た。此の張り枠は、自動的に東から西へと動いて居るのであつたが、その齒車は素晴らしい音を立てゝ居た。動くにつれて乾いて行く布は、西の端に行つて、再び自動的に木製の心棒に巻きつく樣になつて居たが、すつかり巻上ると、一人の若者がそれを取はずすのであつた。その間に、今一人の同じ年頃の若者が、半乾きの巻布を、自動仕掛の鍵に引掛けると、見る見る中に、布が解けて、乾枠の上に擴がるのだ。かうして巻布が減るに從つて、また新しい巻布が供給された。

一方、部屋の眞中の二本の水槽の間には、大きな廻轉乾燥臺があつた。二十四時間水に漬つてゐた巻布は、先づその上に移されて、遠心力的に乾かされるのだ。布が乾枠に擴げられるのは、それから後の事であつた。

だが、かうした設備と同時に、クライドの心を摑んだものは、此の部屋の物音と熱さと蒸氣と、そこに働いて居る數人の男達の勞働であつた。彼等は只袖なしシャツ一枚に、ぼろ〳〵のゾボンを着けて、ゴム裏の地下足袋をはいて居た。此の水と濕氣と熱とでは、さうした服裝が必要であるらしかつ

た。

「これが皺伸し部屋です」部屋に入ると、ホイガム氏が言ひ聞かせた。「此處は、他の部屋に比べては餘りいゝ所ではありませんが、しかし此の工場の仕事は、此處から始まるんですから。ケメラー！」

と彼は呼んだ。

一人の頑丈さうな、胸の張つた、だが青白い顏の男が近付いて來た。ギルバートの前に出たホイガムの樣に、彼もホイガムの前に出ると、すつかり恐縮してゐるやうに見えた。

「これが、ギルバート・グリフィスさんの從兄弟のクライド・グリフィスさんだが、先週、僕が言つて置いた事を覺えて居るだらうな」

「はァ」

「先づ、此處の仕事から始められる事になつてるんだが、明日から出て來られる筈だから」

「はい」

「お前の傳票簿に名前を書いとくといゝな。此の人も普通の時間から始める事になつてるんだから」

「かしこまりました」

クライドは、今迄になく、はきはきと威張つて物を言ふホイガム氏を見た。彼は今は、主人顏をし

てゐた。

「七時半が、朝の就業時間と言ふ事になつて居ますが、鐘が鳴るのはそれよりも鳥渡早く、七時二十分頃と言ふ事になつて居ります。着物を更へて機械に着くまでに、その位の時間がかゝりますから。で、あなたが若し、今日の中に習つて置きたい御希望ならば、此のケメラー君が明日からの仕事をお教へしますし、若し今日御都合が惡かつたら、明日御習ひになつても結構です。私の方はどちらでも構ひません。只、五時半になつたら、あの入口の交換手の處にいらして下さい。さうすれば、ブラレーの妻君をあすこに待たして置きます。その人が、あなたのお部屋等のお世話をする事になつて居ますから、私が居りませんでも、あの交換手にさうお話しになれば宜しう御座います。萬事あの女が知つて居りますから。ではこれで失禮いたします」

クライドが「いや、どうも、大變有難う御座いました」と、言つた時には、彼はもう丁寧な御辭儀をして、向ふに歩き出して居た。

ホイガム氏が、水槽の向ふの西の扉から出て行くと、ケメラーは、未だ遠慮が拔けない樣子で言ひ始めた。

「いや、グリフィスさん、萬事はそれで結構ですよ。早速、二階の卷布を運んで貰ふ事にしますが、

しかしもつと悪い着物があつたら、それをお召しになる方がよござんすね。そんな着物では、とても堪りませんよ」

彼はさう言つて、クライドの綺麗な着物を見てゐた。彼の樣子にも、ホイガム氏同樣に、一種の不安さと、多少の上長らしさとを見せて居た。それは、極端な尊敬と同時に、多少の疑惑を潜めてゐた。例ひ、それは一介の從兄弟で、餘り有難くない親類であるにしても、此處で、グリフイス一族の人間である事は、一些事ではないやうに見えた。

此の工場に相當な夢想を抱いて來たクライドは、此處の樣子を一眼見たゞけで、或る反抗を感じた。此處には、此の工場に豫期したよりも低い人間が働いてゐた。彼等は、ユニオンリーグやグリーン・デビツドソンで使はれてる人間よりも、遙かに無知で魯鈍であるやうに思へた。而かも、もつと悪い事には、彼等はいやに服從的で、狡猾で、無知で——單に機械に過ぎないと言ふ感じであつた。彼がホイガム氏と一緒に這入つて來た時、彼等は皆、さりげない顏で、此の場の樣子を伺つて居た。實際、彼とホイガム氏とが、彼等の密やかな眼指しの中心になつて居た事を氣付いて居た。しかも、彼等の此の醜い服裝を見た時、此の工場に就いて考へて居た上品さなどは、一たまりもなく打壞されて了つた。同じく見習ひをするにしても、二階の事務所か何かでないとは、何と言ふ不幸な運命だらう。

彼はケメラーと一緒に歩いて、一通りの說明を聞いた。これが水槽で、此の中に布を一晩漬けて置くのだとか、これが廻轉乾燥臺だとか、これが乾枠だとか、いろ〳〵敎へてから、これでもう歸つてもいゝと、言つて呉れた。時計を見ると未だ三時であつた。

彼は手近な扉から出て行つたが、外に出ると直ぐ、こんな大きな會社に關係出來る事を有難いと思つた。同時に、ケメラーやホイガムの役に立つかしらとも考へた。何だか、自分では駄目なやうな氣もしたし、自分の方で堪へられなくなるのではあるまいかとも考へられた。どうも少し荒ッぽすぎる氣がした。だが、旨く行かなければ、またシカゴに歸つてもいゝし、ニューヨークに行つて、別の仕事を始めてもいゝとも考へられた。

しかし、サミユエル・グリフイスは、何だつて、自分を迎へて歡迎して呉れないんだらう？　何だつて、あの若いギルバートは、あんなに皮肉な笑ひ方をしたのだらう？　ブラレーの妻君と言ふのは、一體どんな女だらう？　そも〳〵自分が此處へ來たのは、悧巧な事だつたかしら？　一體、此の家族は自分に何かして呉れる積りなのかしら？

こんな事を考へ乍ら、クライドは、色々の工場の建込んでゐる川緣を、ぶら〳〵と歩いて行き、やがて北の方に曲つて行つた。その邊りも一ぱいに工場が建込んで居て、錫工業の會社だの、製鋼會社

だの、眞空掃除器の會社だの、毛布製造會社だのがあつたが、歩いて居る中に、或る貧民窟に出て來た。それは大して大きい貧民窟ではなかつたが、シカゴやカンサス市の外では見られない悲慘なものであつた。彼は、さうした貧乏や、社會的な多角性や、その亂暴さを見て、變に憂鬱になつた。それらの總ては、只社會的悲慘を物語るだけであつたので、彼は直ぐに引返して、マホーク川を渡つた。だが、橋を渡つて幾らも行かない中に、彼は、それとは全然變つた一角に出て來た。其處には、今日工場に行く前に見たと同じやうな家が建並んで居たが、更に南へと進むと、昨日と同じ並木道が展けて來た。彼は、立派に舗裝された廣い道路を歩き乍ら、此の通りに屹度伯父のサミユエルの家があるに違ひないと思つた。その邊りの家々は、殆んど總てフランスだの、イタリーだの、イギリスだの、型を採つた物であつたが、クライドにはそんな事は解らなかつた。

クライドは、その家並みの美しさと、廣さとに眼を奪はれて、一軒一軒見て歩いたが、こんな家に伯父が住んでゐるのだらうと思ふと、富と言ふ物は大變な物だと思つた。こんな家から毎朝出て來るギルバートは、どんなに偉さうな感じがする事だらうと思つた。

やがて彼は、樣々な木が植ゑ込んで、新しい花壇を見せて居る一軒の家の前に立止つた。見ると其處には、大きな車庫が裏庭に建つて居たし、向つて左手には大きな噴水があつて、その眞中に、一人

の男の子が白鳥を抱いて居るのが見えたし、右手には、五六匹の犬が一匹の牡鹿を追つて居る銅像が建てゝあつた。昔のイギリスにでも見るやうな此の堂々とした邸宅に、すつかり魅せられて了つたクライドは、丁度其處を通りがかつた中年の勞働者風の男に尋ねて見た。

「これはどなたの御邸です？」

「これかね、これはサミユエル・グリフイスの邸ぢやねえかよ。川向ふのカラー工場の旦那だよ」

忽ちクライドは、冷水を浴びせ掛けられたやうな氣がした。これが伯父の家なのだ！　すると、あの車庫の前に置いてある自動車も伯父のに違ひない。しかも、車庫の中には未だ他にも、自動車が見えるではないか。

かう考へるだけで、彼の世馴れない心には、薔薇と芳香と光と音樂とが湧き上つて來る氣がした。此の美しさよ！　此の裕福さよ！　彼の家族のどの一人が、こんなにして暮して居る伯父が居る事を夢想してゐるだらう？　何と言ふ贅澤さだ。しかも、彼自身の兩親は、貧苦にやつれて、カンサス市の通りで說敎をして居たのだ！　無論、デンバーでも、その通りに違ひない。彼等は傳道をして暮らして居るのだ。無論、彼が、此の土地へ來ても、あの人好きのしない從兄弟の他には、誰も會はうとして呉れなかつたし、あんな下等な仕事を押しつける程無頓着でもあつたが、それでも彼は出世した

樣な氣がした。何と言つても、彼はグリフイス一族の人間であるし、此の街の二大重要人物の從兄弟であり、甥であつて、今や兎に角、彼等の爲めに働かうとしてゐるのではないか。而かも其處には、彼が曾つて知らなかつた將來がある。此の街でのグリフイス家は、カンサス市やデンバーでのグリフイス家ではないからである。それは何と言ふ相違だらう？　無論これは、出來るだけ注意して、隱して置かねばならない。だが、同時に、彼は、伯父や從兄弟や、その他の連中が、自分の兩親や、自分の過去の事をほじくり出しはしないかとも思つた。彼は、カンサス市で子供を殺した事件を思ひ出した。その兩親の慘めなやりくり生活を思ひ出した。それからエスター　彼は直ぐに眼を伏せた。自分の夢が黑雲に覆はれる氣がした。彼等が若しそれを察したら！　彼等が若しそれを氣付いたら！

畜生ッ――俺は一體誰なんだ。俺は一體何をして來たんだ。俺が此處に來なければならなかつた理由が解かつて見ろ。俺にどんな望みが持てるのだ！

突然、自分のやくざさを感じた彼は、暗澹とした氣持で、元來た道に引返して行つた。

六

その日クライドが、ブラレー夫人の世話で住む事になつた部屋は、ソーブ町にあつた。それは、

伯父の住む街とそれ程遠く離れては居なかつたが、その街の實質には、雲泥の相違があつた。實際、此の相違を考へては、幾ら親戚が立派でも、彼の氣持を徹底的に翳らすに充分だつた。其處には、鳶色や灰色や澁色の平凡な家並みが建並んで、一體に煙ッぽく、埃にまみれて居たが、それでも、裸の並木の小枝には、既に春の氣配が見えてゐた。クライドがブラレー夫人とその町に入つて行くと、丁度川向ふの工場からでも歸つて來るらしく、粗末な着物を着た無數の男女や、ブラレー夫人の同類らしい年增女達が、ぞろ〳〵と家の方へ歩いて居た。やがて彼等が、或る家の前に行くと、さつぱりしたギンガムのエプロンを掛けた、素面のお内儀さんに迎へられた。彼女は直ぐ、二人を二階に連れて行つて、大して小さくもなく、不愉快でもない部屋を見せて、食事抜きで四弗、食事付きで七弗半だと申出た。ブラレー夫人も、之が先づ上等の部類の部屋だと言つて呉れたので、彼も亦此の部屋を借りる事に決めた。やがてブラーレ夫人が歸つて行つてから、彼は食堂に降りて行つたが、其處には彼が曾つてシカゴのボーリナ街で見なれてゐた樣な、工場街の店員や、職工達の數人が座つて居た。夕食が濟むと、彼はライカーガスの主な通りを歩いて見たが、其處には、無數の職工達が群がり歩いてゐた。晝間歩いて見た時の彼には、とても想像出來ない事であつたが、此處にはアメリカ人、ボーランド人、ハンガリヤ人、フランス人、イギリス人――あらゆる人種の男女老若が螺集してゐた。彼に

は、それらの大部分が、一種特別な無知と、鈍さと、無趣味と、不活潑と、不決斷とを持つて居るやうに思へた。だが、ワイキアジィ通りの近くになると、それが幾らか變つて來た。彼等は、川向ふの色んな會社の事務員でもあるらしい稍々ましな若い男女であつて、服裝もちやんとして居たし、動作も敏活であつた。

かうしてクライドは、八時から十時頃まで、ぶら〳〵と歩き廻つたが、十時近くなると、豫め申合せてあつたかのやうに、突然、群衆が引上げて、町が空ッぽになるのを見た。それはシカゴやカンサス市と不思議な對象をなして居たが、クライドはたゞ、街が小さい爲めだらうと思つた。實際、その後は只ライカーガス・ホテルだけがぎらぎらと輝いて、それが此の町の生活の中心になるらしかつた。その附近には、郵便局と、美しい綺麗な塔のある教會とが、眼と鼻の間にくつ付き合つてゐたし、或る町角には新しい活動寫眞館が出來てゐた。あちこちと歩いてゐる若い男女は、何れ色事でもやつて居るらしく見えたが、それらの總てに、此の建設的努力の底に潜む、希望と熱情と若さとを暗示する樣にも思へた。クライドは結局、此の街はいゝ處だ、此の街に住まうと云ふ氣持になつて、彼のソーブ街の部屋に歸つて行つた。あの美しいワイキアジィ街よ！　あの伯父の大工場よ！　町々を歩き廻つて居る、あの美しい活潑な娘達よ！

さて、ギルバート・グリフイスは、丁度父親がニューヨークに行つた留守だつたので、（ギルバートは此の事を、クライドに話さうともしなかつたので、クライドはそれを知らないのであつた）彼は直ぐ母親や姉妹達に、今日クライドに會つた事や、そのクライドは全然愚鈍な男ではないにしても、大して面白い男ではないことを報告した。彼は五時半に家に歸つてミラに會ふと、直ぐにかう言つた。

「うむ、あのシカゴの從兄弟が、今日やつて來たよ」

「さう、どんな人？」

このライカーガスの町をよく知つて、かうした工場生活や、そこに働く人達の與へられる機會について知つてゐるミラは、何だつてクライドが、こんな處へ來る氣になつたのだらうと疑ふ氣持にもなつて居たが、それでも父親が、クライドを紳士的な悧巧な男だと言ふので、彼女は彼に、多少の興味を持つてゐたのだつた。

「さうだね。僕にはどうも、さう大した男とは思へないね。成程、可成り悧巧な男だし、醜い面の男でもないが、事務上の事は何にも出來ないと自分で言ふんだからね。まア、ホテルに働いてる普通の若者だよ。いゝ着物を着る事が、世の中の全部だと思つてゐる連中だよ。今日なぞも、派手な鳶色の

服を着て、鳶色のネクタイを着けて、帽子もそれに似合つたのを持つてゐたが、どうも場違ひに派手なんだ。あんな赤縞のシャツなんか、三四年前に流行つたものだからね。それに服だつて、旨く身體に合つて居ないんだよ。まア、今は着いた計りだから、何も言ひたくないが、あの儘で通されては、僕達の親類として鳥渡困るね。社長にでもさう言つて、止させるやうにして貰ふんだね。しかしまア、その中には、職工長か何かにはなれるだらうと思ふし、事に依つたら、販賣部にでも廻すんだよ。しかし、何だつてあの男が此處へ來る氣になつたのか、それが僕には分らないんだ。實際、魔術師でもない限り、此處で成功するなんて、とても難かしい事なんだが、そんな事をうちの社長は話して置いたのかしら」

彼は、大きな暖爐に脊中を向けて、立つて居た。

「でも、ギルバート、此の間お母様が、お父様のことで言つてらした事を覺えてない？　お父様は、其の人がこれまで、出世の機會が無かつたのだと思つていらつしやるのよ。此の工場で働かせる働かせないは別問題として、兎に角、その人に何とかしてやりたいと思つていらつしやるのよ。お父様は屹度その人のお父様に對して、餘りよくして上げなかつた事を自分で感じていらつしやるのだと、お母様は言つてらしたわ」

その事は、ギルバートも既に母の言葉から察して居たのだつたが、彼はそれを無視しようと思つて居た。

「それはしかし、僕の知つた事ではないさ。無論、社長が、役に立つ立たないに關らず、あの男を使つて居ようと思ふのならば、それは社長の勝手だけれど、しかし社長だつて、しよつちう、無駄な人間は使はないと、言ひ言ひしてゐる人だからね」

その後、母親やベラに會つた時も、彼は同じ事を傳へて、同じ意見を吐いた。それを聞いて、グリフィス夫人は溜息をついた。彼女の考へでは、かうしたライカーガスのやうな町で、いやしくも彼等の親類と言はれ、彼等と同じ名前を持つて居る人間は、萬事に充分注意深くして、高尚な趣味と判斷とを持つて居て呉れなければ困ると、思つて居たからだつた。

しかしベラは、兄の言ふクライドの話には、一向滿足して居なかつた。彼女は未だクライドを知らなかつたが、しかしギルバートをよく知つてゐた。彼女の知つてゐるギルバートは、彼女にはちつともさう見えない人に對しても、色々と難癖をつけたがる男だつたからである。だから、夕食の時、ギルバートがクライドの事をもつと色々と話した時にも、彼女は最後にかう言つた。

「さう。だけど、お父様がその氣ならば、お父様は屹度、その人を使つてあげるか、さもなければ、

何かの事をしてお上げになるわよ」

かう言はれると、ギルバートは、内心嫌な思ひがした。それは、彼の工場に於ける虚位に對する、露骨な一撃であつたし、彼自身は、あらゆる方面で、その偉力を發揮しようと思つてゐたからであつた。

さて、翌朝工場に出て行つたクライドは、自分の名前や容貌や、或ひはその二つのものが——彼がギルバート・グリフィスと似て居ると言ふ事が——彼の豫期しなかつた特別な利益になつて居る事を發見した。事實、彼が第一入口に這入るや否や、其處に立つて居る門番が、ひどく驚いたやうな顔をして叫んだ。

「あゝ、君がクライド・グリフィス君ですね。ケメラアの處で働くんでせう。いや、皆な解つてますよ。さう、あの男が君の鍵を持つてます」

彼が指さしたのは「ゼフ老人」と呼ばれて居る、ぶよ〳〵肥つたお爺さんで、毎朝七時半から七時四十分の間、總ての人の鍵を預つて居る時計番であつた。

クライドが近付いて行つて、「僕はケメラアさんの處で働く筈の、クライド・グリフィスと言ふ人間ですが」と言ふと、彼も鳥渡驚いた樣子で、「あゝ、左樣で御座いますか。ようこそ、グリフィスさん。いや、あなたの事は昨日ケメラアさんから、すつかり承はりました。七十二番、これは以前デユーブニーさんが使つたものですが、これからあなたの物になります」と言つた。しかし、クライドが皺伸部屋の方へ階段を降りて行くと、彼は直ぐ門番の方に向いて叫んだ。「どうでえ、ギルバート・グリフィスにそつくりぢやねえか。まるで瓜二つだぜ。何だいありや？　兄弟かえ？　從兄弟かえ？　何だえ？」

「俺に聞いたつて解らねえよ。俺も今日始めて見るんだからな。しかし、どの道、親族には違ひねえだらう。俺は始めて見た時にはギルバートさんだと思つて、あやふく帽子に手を掛ける處だつたけどなア」と門番は答へた。

皺伸部屋に行くと、ケメラアは、昨日と同樣に、尊敬したやうなしないやうな恰好で、彼を迎へた。彼はホイガムと同樣に、未だにクライドが、此の會社でどんな地位の人間になるのか、はつきり解らないのであつた。最初にホイガム氏が、クライドの事を話した時、ギルバート氏には、彼を特別に寛大に扱はせる意向は全然ない事を話して置いたからである。實際、ギルバートは、彼に向つて「その男は、他の雇人と同樣に扱つていゝんだよ。出勤時間にしても、仕事にしても、他の連中とちつとも違ひはないのだから」と言つたのであるが、クライドを彼に紹介する時には、「これが僕の從兄弟だ。こ

れから此の仕事を覺える事になつてるんだから」と言つたのである。その言葉から考へると、クライドは色々の課を移り廻つた末に、結局、此の工場の全體を見るやうになるのだとも取れたからである。

そこで、ホイガムはクライドが歸つて行つた後で、ケメラァやその他の連中に囁いた。――あのクライドは、その中に社長の乾分になる人間かも知れないから、あの男の身分がはつきり解るまでは、萬事に氣を付けて居ようと。クライドも此の事に氣付いて、すつかり意を強くして居た。此の調子では、たとひ從兄弟のギルバートがどう思ふとも、やがては伯父の好意で、相當な事がして貰へるだらうと、感じないで居られなかつたからである。だから、ケメラァが彼に色々の事を說明して、此處の仕事は大して難しい物ではない事や、現在ではさう澤山の仕事はない事を言つた時にも、クライドは寧ろ鷹揚にそれを聞いて置いた。それがケケメラァをして、一層彼を尊敬せしめる事にもなつた。

「では、そこらの脫衣箱に、帽子と外套とを掛けて來て下さい」彼は優しさうに、取入る樣に言つた。

「それから、此の手車を持つて、二階に行つて、卷布を持つて來て貰ふんです。二階に行けば、誰か敎へて呉れますから」

その後の數日は、クライドにとつて物珍らしくもあつたが、また苦しくもあつた。生れて始めての勞働生活や、彼の特殊な地位等が、彼の生活を煩はしくしたからだつた。早い話が、彼を直接に圍繞す

る人達は、彼がこれ迄接して來た人達とは全然違つて、ホテルボーイや馭者や番頭等に遙かに劣つて居るのだ。彼等は、どれもこれも、知識的にも肉體的にも、ぶよ〳〵肥りの連中であつた。その着物は、普通の勞働者の着物で、働く事と食べる事の外には、容姿も何も構はない人達が着る樣な服裝であつた。のみならず、クライドが何者であつて、何の爲めに此處に來てゐるのかを知らない彼等は、彼に對して猜疑の眼を向け勝ちであつた。

しかし、一二週間もして、クライドが社長の甥であり、社長祕書の從兄弟である事が解つて來ると、彼等は次第に彼に親しんで來たが、同時に或る尊敬と共に、嫉妬やひがみをも見せて來た。何と言つても、クライドは彼等の仲間ではなかつたし、かうした事情の下では、仲間になる譯にも行かなかつたからだつた。成程、彼は謙遜でもあり、愛嬌深くもあるが、何時でも彼等の眼上の人に接觸して居るのだ。――と彼等は考へるのだ。彼等から言はせれば、彼は彼等より上の階級に屬する人間である。其處にどんな意味があるかを、あらゆる貧乏人は知つて居る。あらゆる處で、貧乏人は結び合はなくてはならない。

しかし、クライド自身は、また數日間此の部屋で働いた結果、何だつて此の連中は、かうした事に興味を持ち得るのだらうと、疑ひ始めて居た。彼等の間の話題と言へば、只此の頃の布地は質がいゝ

とか悪いとか、瑕があるとか無いとか――始めの十五卷はよく延びたが、終ひの二十卷は延びが悪いとか、クランストン鋼線會社では、今月は職工の數が少いとか――アンソニイ木工會社では、去年五月の中頃に始めた土曜日半休を、今年は六月一日からでなければ始めないとか――そんな事許りであつた。彼等の總てが、くだらない日常茶飯事に沒頭して居るやうに見えた。

從つて、彼の心は、過ぎ去つた樂しい日の事に歸つて行き勝だつた。彼は時々、シカゴやカンサス市に居た方がよかつたと思つた。彼はラッタラアや、ヘッグランドや、ヒッグビイや、ルイスや、ハリーや、スクワイヤ氏や、ホルテンスや――以前の無謀な若い仲間の事を思ひ出して、彼等が今どうして居るだらうと考へ出した。それにしても、あのホルテンスはどうなつてるだらう？　あの毛皮の外套を持つて居たと言ふ事だが、無論、それは、例の煙草屋の番頭が買つてやつたに違ひない。自分にあんな事を言つたくせに、彼女はあの男と一緒に逃出したのだ。しかも自分からは、あんなに金を絞り取つたのではないか？　彼女の事を思ひ出し、あんな事件がなかつた時の自分を想像すると、彼は多少氣の鬱ぐ事もあつた。だが、今は誰のものになつてるのだらう？　カンサス市を出てから、彼女はどうしてるだらう？　彼が今、此の町に來て居る事や、此處で金持の親戚の工場に居る事等を聞いたなら、彼女は何と考へるだらう？　ふん！　多少は眼が醒めるかも知れない。が、彼の現在の地位

なんぞを、大して問題にする女でない事も確だ。だが、あの伯父や、從兄弟や、此の工場や、あの大きな家を見せれば、彼女だつて多少彼を尊敬するかも知れない。恐らくは、もつと親切にしようとも考へるだらう。さうだ、彼女に巡り遭つたが最後、すつかり見せつけて、思ひ知らせてやるんだのに！

七

カッピー夫人の家での彼の下宿生活は、必らずしも非常に愉快なものではなかつた。それは極く平凡な下宿屋で、其處にゐる職工や事務員は、仕事や賃金や、この町の中產階級的宗教觀念を、世界の秩序と幸福との根本要素だと考へてゐるやうな保守的な連中に過ぎなかつた。從つて、無論、饗應だの、樂しみ事だのと言ふ點では、酷く退屈な人達だつた。しかし其の中で、近頃フォンダから來たウオルター・デイラードと言ふ男は、クライドにとつて全然面白味のない男でもなかつた。此の男はクライドと同じ年頃の青年で、同じやうに社交的な野心を持つて居つたが、クライドのやうな世渡り上手や、分別は持つて居なかつた。彼は、その頃スターク會社の家具部に勤めて居たが、一寸小綺麗な容貌をして居たし、その動作もしとやかであつた。或る小さい町の反物屋であつた父親が失敗してか

ら、社會的に何の足場も持つて居ない彼は、さうした何かの地位を得やうとして、何時もいら〳〵して居るのであつた。

實際、彼は、クライド以上に、さうした立場を持つて居る人に興味も持ち、羨みもして居たので、此の町の有力者――ニコルソン、スターク、ハリエット、グリフイス、フインチユレー等――の家族の動靜には、絶えず眼をつけて居た。從つてクライドが、かうした社會に多少身分違ひな緣故がある事を知ると、彼は直ぐに非常な興味を持つたのである。何だつて？　グリフイスだつて？　あのサミユエル・グリフイスの甥！　しかも、その男が、此の下宿屋の此のテーブルで、彼と竝んで飯を食つて居るのだ。彼は早速、此の他國者をものにしなければならないと思つた。此處に扉を叩く可き機會があるのだ。有力者の家庭と因緣をつける可き機會があるのだ。のみならず、彼は未だ若く、面白さうな男で、しかも自分と同じやうに野心家らしい男ではないか？　これならば、一緒に遊ぶだけでも面白い。彼は直ぐにクライドに近づいて行く事にした。

そこで、彼は早速クライドを散步に誘つて、マホーク館に素晴らしい活動が掛つてゐるから行かうではないかと言つた。クライドにとつても、それが嫌である筈がない。しかも此の男は悧巧さうで、小ざつぱりしてゐて、あの工場や此の下宿屋の他の連中とは違つて居る。クライドは、直ぐにも此の

男と行きたかつたが、しかし此の町には偉い親戚があるのだから、自分の行動に注意しなければならないとも考へた。輕はずみに交際をして、飛んだ間違ひがないとも限らない。彼に接する人々の態度から察しても、いやしくもグリフイス家の人とあるからには、此の町のやくざな人間達と同格であつてはならない。彼は考へてしたと言ふよりも、寧ろ本能的に、高く止つてゐるやうな樣子を見せたが、それが却つて此の青年を始め、皆なの人達に尊敬を增させたやうに見せた。しかし、此の若者は、彼を頻りに誘つた。賴むやうに言はれるので、彼もとう〳〵此の青年と一緒に行く事にしたが、彼は尙警戒をゆるめはしなかつた。しかし、彼の此のお高く止つたやうな樣子を見て、相手のディラードは直ぐ『階級』と『門閥』との爲めだと解釋した。彼は、クライドとこんなやくざな下宿屋で、しかも彼が此の町に着いて間もなく會つてる事を、或る意味を持つて考へないでゐられなかつた。

その結果、彼は勢ひ、クライドの追從者の形になつた。無論、彼は、クライドよりもいゝ地位であつたし、給金も一週二十二弗を取つてたのであるが。

「あなたは色々親類やお友達が此の町におありになるから、さぞ御愉快な事でせう」最初に散步に出た晩に彼はさう言ひ出してから、色々とクライドの身の上などを聞いた。無論、クライドは、殆んど何も話さなかつたが、やがて、相手は、自分の事を磨き立てゝ話し出した。彼の父親は今でも吳服屋を

やつて居る事や、彼が此の町に來たのは別のやり口の商賣を研究する爲めであることや、彼の伯父が今スターク會社に關係して居ることや、そんな事を話し出した。彼は四ケ月計り前に此の町に來たばかりで、未だ澤山の人に會つては居ないが、でも二三の面白い人物には會つたと話して居た。

しかし、クライドの親類は！

「しかし、あなたの伯父さんの財産は、あれで百萬以上もあるさうですね。さういふ噂ですよ。あのワイキアヂー街のお邸なんぞは、まるで城のやうですからね。あんな家は、アルバニイにだつて、ユチカにだつて、ロークスターにだつてありませんよ。君はサミュエル・グリフイスの本當の甥なんですか？　そりや然し、此の町では大變な事ですよ。僕にもさういふ親類が欲しいですね。僕ならばそのまゝにはして置きませんね」

彼は盛んにクライドをおだて上げた。その樣子で、彼も、此の血族關係が如何に重要なものであるかを、一層はつきりと感じた。

「いや、しかし、僕は只、此の町にカラーの仕事を習ひに來てるんですから、そんなに遊び廻る譯にも行かないんですよ。伯父の意志も矢張りさうなのですから」

クライドは、相手の親しさうな樣子にすつかり嬉しくなつてるたが、でも曖昧な調子で答へた。

「いや、それはさうですよ。僕の伯父だつて矢張り同じ氣持で、僕が遊び廻つたりする事を嫌がるんです。しかし人間と言ふものは、さう始終働いて計り居られませんからね。多少の樂しみがなくては」

「全くです」クライドは、生れて始めて多少威張つた口を利いた氣がした。

暫く彼等は默つて歩いた。

「君はダンスは？」

「えゝ、やりますよ」クライドが答へた。

「あゝ、僕もやりますがね、此の町にも相當下等なダンスホールがあるさうですが、僕は未だ行つた事がないんです。君もあんな處へは立寄らないで、いゝ連中と計り附合つた方がいゝですね。さういふ事は、實にうるさい町だと言ひますからね。仲間が悪いと、上流の人たちはてんで相手にして呉れませんからね。それはフォンダの町でも同じですよ。いゝ連中と仲間にならない事には、何處へ行く譯にも行きませんからね。併し、此の町にも、一緒に歩いていゝやうな娘も相當に居ますよ。立派な家庭の娘達ですが、無論、交際社會に出るやうな娘ではないですが、しかし、悪い噂にもならないし、さう鈍間でもないし、中には仲々愉快な娘が居りますよ。それで、結婚なんてする必要はないのです

からね」クライドは此の町の新しい生活としては、此の男を少し快活すぎると思ひ始めたが、しかし嫌ひにはなれなかつた。「しかし、此の次の日曜日の午後はどうなさるつもりです？」と、ディラードは續けた。

「いや、何も別に。何しろ未だ何も知らないのですから」

「若しよかつたら、僕と何處かへ行きませんか？　此の町に來てから、僕にも二三人娘の知り合ひが出來たのですが、皆な仲々いゝ娘ですよ。あなたがよければ、僕の伯父の家に御連れして、御紹介しませう。皆な好人物ですよ。その後で、二人の娘に會ひに行つてもよござんす。一人は以前店に出てたのですが、今は止して何もしてないのですし、今一人は、その相棒です。蓄音機もありますから、ダンスも出來るわけなんです。此の町では、日曜日にはダンスをしてはいけないのださうですが、しかし、ダンスをしたつて、誰に解る譯でもないですからね。無論、娘の親達は平氣なんです。そして、ダンスが濟んだら、二人を活動に連れて行きませう。此の邊の工場町では駄目ですが、向ふへ行くともつといゝ活動館がありますから」

かう切り出されると、クライドの心には、此の町で送る可き彼の生活に對する一つの問題が出て來た。カンサス市であんな事があつた爲めに、シカゴに行つての彼は、只々注意深く控目に生活しよう

として來たのだ。殊にあの倶樂部に關係して以來、彼はあの倶樂部の嚴肅な顏をした人達と同樣な、保守的な謹嚴な生活をして、金を溜めて紳士らしく見せる事を、生活の理想にしようと努めて來たのであつた。それは言つて見れば、夜のない樂園を夢見てるやうな生活であつた。

しかし、隨分靜かな町ではあり乍ら、此の町にも、この青年が今暗示したやうな、さうした娛樂は相當にあるやうに思へた。それは恐らくは無邪氣な氣晴らしであらうけれども、しかも尙、娘の子や招待事と關係のある事柄であつた。夕食後、町を歩いて見ると、さうした樣子の美しい娘や青年が、澤山居るのを見掛けた。しかし、此の青年が今暗示したやうな事をやつて居る彼を見た場合に、彼の新しい親戚達は、彼の事を何と思ふだらう？　たつた今、彼は、此の町が怖ろしく狹い町で、あらゆる人のあらゆる事が、あらゆる人に解ると話したではないか？　クライドは、どうしてよいか解らないので、暫く默つてゐた。しかし、何とか返事をしなくてはならないし、友達も欲しい時なので、彼はとう〳〵答へた。「さう、それもいゝと思ふのですが、無論、僕の親戚達が――」

「いや、それは大丈夫です。無論、君は充分注意なさつた方がいゝですし、僕も注意しますから」

彼は兎も角、グリフィスと名のつく人間と一緒に歩き廻れる事は、自分に對する信用をつける事だと思つてゐた。既に今でもさうであるし、今後一層さうであると思つて居るのだつた。

そこで、彼はクライドに煙草を買つてやらうの、ソーダ水を飲まうのと色々の事を言つたが、クライドはそれを斷つて、やがて自分の下宿に歸つて行つた。此の青年の門閥や地位に對する馬鹿らしい程な崇拜が、彼を嫌な氣にさせたからであつた。彼は母親に手紙を出す約束をしてゐた事を思ひ出して、歸へつてそれを書いた方がいゝと思つた。偶然にも、それが今夜の新しい交際について、彼に多少のことを考へさせた。

八

しかし、その次の日は土曜日で、半休日であつた。ホイガム氏が給料袋を持つて入つて來た。

「あゝ、グリフィスさん。これを」彼はクライドの今の地位に特別に印象せられた樣子で言つた。

「さん付けで呼ばれて多少嬉しかつたクライドは、それを受け取ると脫衣箱に行つて、素早く袋を開けて、金をポケットにねじ込んだ。彼は帽子と外套を着て、ぶら〳〵と自分の下宿に歸つて晝飯を食べたが、ディラードも未だ歸つて居ないし、酷く淋しかつたので、トロッコに乘つて、グローバースビルに行つて見やうと思つた。それは、約二萬の人口を持つ町で、ライカーガス程美しくはないが、活動的な町だと言ふ話だつた。彼はライカーガスと全く違つた此の町を見て、非常に面白かつた。

しかし、翌日の日曜日は、彼一人でぶら〳〵し乍ら、無駄にライカーガスで日を送らねばならなかつた。約束をして置いたディラードが、或る用事でフオンダに歸らねばならなくなつたからである。月曜の夕方、クライドに會ふと直ぐ、彼は今度の水曜の晩に、ディグビイ通りの組合教會の地下室で親睦會があるから、其處に行つて見やうと言つた。ディラードの話に依ると、これも相當に面白さうであつた。

「僕たちも行つて、少し娘達を揶揄つて來ようぢやないですか？」と、言ふのが彼の言葉だつた。「僕の伯父も行つてますし、例の娘達も行つてますから。いや、さう馬鹿にしたもんぢやないですよ。そして、先づ十時になつたら、こつそり出て來て、ゼラの家か、リタの家かへ行くんですね。リタの方がいいレコードを澤山持つてますが、踊るにはゼラの家の方がいゝんです。それはさうと、君は夜會服をお持にならなかつたんではないですか？」

實は、彼は、クライドの留守中に、クライドの部屋を調べて、小さいシュートケース一つの外にはトランク一つ、夜會服も持つて居ない事を知つてたのであつた。クライドの父がホテル業者であり、クライド自身もシカゴのユニオンリーグ倶樂部で勤めて居たと思つて居る彼は、それを只クライドが、社交的準備に全く無頓着な結果だと思つて居た。さうでなければ、誰からも助力を受けないと言ふ一

種の修養の爲めに、こんな事をして居るんだと思つてゐた。これは彼の好みとは正反對であつた。彼の好みから言へば、人は決してかうした社交的必要をおろそかにしてはならないのであつた。だが、何と言つても、グリフイス家のクライドであるから、彼は別段怪しみもしないで、見過して居たのだつた。

「いや、持つて居ませんが、一着買ふつもりでゐるんです。」

此の町に來て以來、彼は既に其の必要を感じて、此の頃蓄へた貯金の中から、三十五弗計り引出して一着買はうと思つて居たのだつた。

ディラードは、色々と彼等の事を話した。ゼラ・シューマンの家は決して金持ではない。自分の住む家を持つてる程度だが、でも、彼女は相當な家の娘達と交つて居る。リタ・リッケルマンも矢張りさうだ。ゼラの父親は、フォンダの近くのエッケルト湖に小さい別莊を持つて居る。今年の夏は、週末や休暇の日に、二人で其處へ遊びに行かう。クライドの氣に入れば、リタを連れて行つてもいゝ。リタとゼラとは離れられない仲善しなんだから。しかも彼等は二人とも美しい。「ゼラは暗いし、リタは明るい」と、彼は熱心に言ふのだつた。

クライドは、娘達が美しいと言ふ事に興味を持つたし、此の孤獨の際に、突然ディラードがこんな

事をして呉れる事にも興味を持つたが、此の男と非常に親しくなる事が果して賢い事かどうかは、寧ろ問題だと思つた。彼は此の男の事を何も知つて居なかつたからである。彼はディラードの樣子から察して、ディラードはこの娘達の代表する世界の、社交的空氣に興味を持つてると言ふよりも、寧ろ此の娘達そのものに――彼女達の或る自由さや、祕密なだらしなさに、遙かに多く興味を持つて居るのだと思へた。しかもこれこそ、カンサス市に於て彼を破滅に導いたもの、そのものではなかつたか。何はともあれ、此のライカーガスでは、その事を忘れる譯には行かない。もつと高い或る物を求めねばならないなのだ。

さて、次の水曜日の八時半になると、彼等は其處に出かけて行つた。そして九時にはもう、此の半宗教的、半社交的、半情緒的なお祭り騒ぎの眞中に居た。此の會の目的は、教會の爲めに金を作るのにあつたが、事實は老人達に噂話の機會を與へ、若者達に、お互ひの批評と、さりげない媚とくどきとの機會を與へるに過ぎなかつた。パイ、菓子、アイスクリームから、レース、人形、ハンカチ類に至るまでの樣々の賣店が出來て、會員各自がそれを供給して、その利益を教會の爲めに使ふ事になつて居た。牧師のピーター・イイズレール氏夫妻も出席して居たし、ディラードの伯父や伯母も來てゐた。仲々快活な夫婦だが、大して面白い人物でもなささうで、此處で重きを置かれて居さうにも見えな

かつた。皆な快活さうで、基督教徒獨特の隣人的感情でひどく社交的であつたが、たゞ、グローバー・ウヰルソンだけは、時々、スターク會社の仕入掛りらしい尊大な樣子を見せることがあつた。

彼は小柄なづんぐりした男で、甚だ風采の上らない男であつた。彼の甥がりゆうとした衣裝をして居るのに、彼の着物はまるで身に合つてさへ居なかつた。ブレッスもしてないし、よごれても居た。そのネクタイも同樣であつた。彼には、番頭らしい揉手の癖や、眉をしかめたり、後頭部を掻いたりする癖があつた。そんな時の彼は、大變な事を言つてる樣な樣子をしたが、クライドの聞いた處では、一向大變な事を言つてるのではなかつた。

頑丈なウィルソン夫人も、絶えず亭主の側に立つてゐて、ひどく愛嬌よく笑つて計り居た。生れつき快活である上に、此處での扱ひがいゝからでもあつたが、また一つには、クライドが居たからであつた。事實、ウォルター・デイラードは、早速、クライドがグリフィス家の人間である事を彼等に話したのであつた。彼はクライドと仲善しになつて、今彼の介添役になつてるのだと言ひ振らした。

「ウォルターの話では、あなたは此方にいらした計りで、伯父さんの所で働いていらつしやるんださうで御座いますね。今、カッピーさんの家にいらつしやるのですつて？　私は未だその方にはお目にかゝりませんけれど、家なんぞも大變綺麗にしてるさうでは御座いませんか。あの人の主人のバースレ

ーは、私と同窓で御座いますけれど、滅多に會はないので御座いますよ。あなた、あの人にお會ひになりまして？」

「いゝえ、未だです」

「あゝ、此の間の日曜日に、宅にいらつしやる筈で御座いましたのね。生憎、ウォルターが家に歸つて行きまして。でも、亦いらして下さいまし。何時でも結構で御座いますから。私もどんなに嬉しいか知れませんわ」彼女が笑ふと、その灰色の眼が輝いた。

クライドは、自分がかうして珍らしがられるのは、伯父の名前の御蔭だと言ふ事を知つて居た。事實、此處に居る人達は皆、彼を珍らしがつた。サミュエル・グリフィス一家や、その名聲を知つて居る彼等は、そんな富豪の甥が、彼等の中に來て居る事を、少からず面白くも思ひ、不審にも思つた。只クライドの樣子が酷く物軟らかで、一向金持の甥らしい樣子が見えない——積極的でも、傲慢でもない事が、彼等の煩ひの種になつた。彼等の大部分は、傲慢を惡德だと言ひ乍ら、內心それを尊敬する傾向の人達であつたから。

しかし、更に若い娘さん達になると、その騷ぎは一層大變であつた。デイラードが早速、クライドの親類關係を、皆なに觸れ廻つたからである。「之が例のサミュエル・グリフィスの甥で、ギルバート・

グリフィスの從兄弟のクライド・グリフィス君です。近頃、此の町に來て、伯父さんの工場でカラー業の研究中なんです」かう言はれてクライドはひや〳〵したが、それでも、それの與へた印象を少からず喜んだ。無論、ディラードは、厚顏無恥であつた。彼はクライドを利用して、皆なに威張らうとして居るのだ。此の時も、彼は、あちこちとクライドを引張り廻して、一時も側から離さなかつた。實際、彼は、自分の好きなあらゆる男女にクライドの事を知らせて、同時に、彼を提供する自分をも知らせようと思つてゐるのだつた。無論、彼の嫌ひな人間には、紹介をしようともしなかつた。「なアに、あの娘は駄目ですよ。あいつの親父は此の町で小さい自動車車庫を一つ持つてるだけですからね。僕があなたなら、あんな娘なんか見向きもしませんよ」とか、「あの男は此の町では大したものではないです。僕達の店の番頭ですからね」とかと、言ふのだ。しかも他の連中には、あらん限りのお世辭笑ひを浮べるし、さうでなくても、何とか辯解をしてやるのだ。

その中に、クライドは稍々遲れて來たゼラ・シューマンや、リタ・デイツケルマンに紹介された。彼等が遲れて來たのは、その方が多少利巧さうにも見えるし、こんな會を馬鹿にしてる事にもなると言ふ、彼等自身の理由からだつたが、事實、彼等は、他の連中よりも多少變つて居た。これまで、デイラードが彼に紹介した娘達よりも、遙かに複雜で、奔放な娘らしかつた。彼等は他の連中のやうに

宗教的でもなければ、道德的でもない。彼等は、自分でさうとは思つて居ないが、異教的享樂には相當に熱心な娘である事を、會ふと直ぐ、クライドは覺つた。彼は、紹介をされたその時の樣子だけで、彼等が他の連中とまるで變つた人間である事、――必ずしも非道德的で、宗教的に不健康であるとは言へないが、他の連中よりは遙かに自由で、奔放で、無遠慮である事を感じた。

「まア、あなたがクライド・グリフィスさんでいらつしやいますの」とゼラは言つた。「本當にお從兄弟さんによく似ていらつしやいますこと。私、時々中央通りをドライブしてゐらつしやるあの方を、御見掛けいたしますのよ。ウォルターがしよつちうあなたの事を御噂してますの。いかゞ、ライカーガスは御氣に召しまして？」

クライドは彼女が「ウォルター」と言つた言葉の調子で、二人の關係が、ディラード自身が言つてゐるよりも遙かに進んで居る事を感じた。彼女の咽喉の所に廻した小さい眞赤なリボンや、小さい柘榴石の耳輪や、きつちりと身體に合つた黑い衣裳や、襞の多い重さうなスカートは、此の場には寧ろ不釣合な程であつて、そんな事に何の抑壓も受けて居ない事、寧ろ、それを奬勵されてる事を示して居た。

一方リタ・デイツケルマンは、頰の赤いブロンドで、ゼラのやうな積極的な敏活さはなかつたけれ

ども、何處か彼女等の自由さと調和するものを持つて居るやうに思へた。彼女の樣子に、わざとらしい無遠慮さは見えなかつたが、しかし自ら人の心を誘ひ込む樣な所は、充分用意されてゐた。クライドに紹介をされた時にも、彼女はひどく肉感的な、解けるやうな樣子をして見せたが、しかしそれがクライドには、少からず心配の種になつた。此のライカーガスでは、さうした交際に非常に注意しなければならないと思つて居る矢先に、ホルテンスと同樣な親しさを彼に感じさせたからである。彼をあゝした困難に陷らせたのも、矢張りかうした自由な態度からではなかつたか？

「では、僕達は少しアイスクリームでも飲んでから此處を出るから、君達二人は少し歩き廻つて挨拶をして來給へ。後でアイスクリーム屋で會つて、君達がよかつたら、一緒に出ようぢやないか。どうだい、君達は？」

彼が、「萬事は君に解つてるだらう」と言ふ樣にゼラの顏を見ると、ゼラも直ぐ笑つて答へた。

「あゝ、いゝわ。從兄弟のメリーや、母や、フレッドブルックナーが居るから、今直ぐに歸る譯には行かないけれど、少し泳ぎ廻つてから後で會ふわよ」

リタも、クライドに親しさうに笑ひ掛けて、向ふに行つた。

二十分計りぶら〳〵して居ると、ゼラが、鳥渡ディラードに合圖をした。彼はクライドと二人でア

イスクリーム店に這入つて行つたが、間もなく、其處へゼラやリタも來て、アイスクリームや、菓子を食べた。その頃には、もうぼつ〳〵と歸りかける人もあつたので、ディラードはそつとゼラに云つた。

「さて、どうだい君の家は？　行つてもいゝかい」

「えゝ、勿論」

ゼラが囁いたので、彼等は一緒に外套室の方へ出て行つた。だが、此の場の樣子がはつきり解らないクライドは、默り勝であつた。彼は、自分がリタを好いて居るのかどうだかも、よく解らなかつた。しかし、此の敎會から出て、家庭享樂者の群から離れると、何時の間にか彼は、リタと二人で歩いて居る自分を發見した。ゼラとディラードとは、先に立つてどん〳〵と歩いて居た。クライドは、かうするものだと思つて、彼女と腕を組んだが、彼女は直ぐそれを解いて、ねつとりと溫かい手を彼の肘に掛けた。彼女は肩と肩とを喰付けて、倚り掛るやうに身體を寄せ乍ら、此のライカーガスの生活を早口に喋り始めた。

彼女の聲には、何處か舌たるいやうな甘さがあつた。クライドはそれが好きだつた。彼女の身體にも、何處かだるさうな、重さうな所があつて、それが何かの光線か電氣かのやうに、彼の身體を突き刺した。彼は、彼女の手を擦つたり、腰に手を廻して見たりしたいと思つた。だが、自分はグリフィ

ス家の人間だ。ライカーガスのグリフイスだ。と言ふ思ひが、同時に彼を萎縮させた。しかし、グリフイス家の人間なればこそ、娘達が自分にちやほやするのだとも思つた。だが、さうした思ひにも拘らず、彼はそつと女の腕を締めて見たが、彼女は何も言はないで、知らない顔をして居た。やがて彼等はゼラの家についた。それは圓天井の大きな舊式な角張つた家で、周圍には樹木だの、芝生だのがあり、家具も相當に立派であつた。クライドは、こんな家を見るのは始めてゞあると思つた。彼等が居間の方に落着くと、ディラードは、直ぐレコードを撰び出して、大きな二枚の敷物を部屋から取出して了つた。

「此の家のいゝ事は、周りに木がある事と、弱音針がある事ですよ」彼は今でもクライドを、自分の樣子を見守つて居る嚴格な人間かも知れないと思つて居たので、わざとクライドの爲めにこんな事を言つた。「ねえ、ゼラ。外からではちつとも蓄音機の音が聞えないだらう？　二階なら弱音針でなくたつて聞えないだらうと思ふんだ。僕は此處で、三時四時までも踊つた事があるんですが、二階の人さへ知らないんですからね。さうだらう、ゼラ？」

「さうよ。だけど、本當はお父さんの耳が少し遠いのよ。お母さまになると、御自分の部屋で何か讀み出したが最後、もう何も聞えないのだから。でも、その針だと殆んど聞えなくなるのは事實だわ」

「しかし、此處で踊るのに、そんなに苦情を持込む人があるんですか？」とクライドは聞いた。

「いや、工場の連中は何も言はないのですが、たゞ教會の連中が喧しいんですよ。僕の伯父や伯母もさうですし、今晩教會で會つた連中も殆んどさうですよ。もつとも、ゼラとリタだけは別ですがね」ディラードはかう言つて、變に取入るやうな挑發するやうな眼付きをした。「此の人達は、そんな事をぐづぐづ言ふ程、狹量ではないですからね。だらう？　ゼラ」

ディラードに惚れ込んで居る此の娘は、大きく笑つて肯いた。

「全くよ。だつて、ダンスを踊つたつてちつとも惡くはないぢやないの」

「さうよ」とリタも口を入れた。「家の父だつて母だつて、何とも言はないわよ。只、二人の前でそんな話をしたり、餘り深入りしたりしてはいけないと言ふだけよ」

やがてディラードが『鳶色の眼』と言ふレコードを掛けると、直ぐにクライドはリタと、ディラードはゼラと一緒に、踊り始めた。踊るに從つてクライドは、何時とはなく此の娘との親しみが增して來るやうに感じた。彼女のダンスは溫かくて、熱情的であつた。それは抑へられてゐた熱情の、自からなる發露であるらしく、その唇はさうした飢渴を暗示するかの樣に、一種抒情的な微笑で引歪んでゐた。彼女は踊つて居る時と、笑つて居る時とが、特に美しく見えた。

「少しおとなし過ぎるけれども、仲々いゝな」とクライドは思つた。「どの男にもかうなんだらうが、しかし僕を好いてゐるのは確かだ。僕を相當な人間だと思つてゐるだらうからな」

だが、それと殆んど同時に彼女は言つた。

「まア、隨分見事ですわね。あなた本當に御上手ですわ。グリフィスさん」

「いや」とクライドは、彼女の眼に微笑を送り乍ら答へた。「あなたが踊つていらつしやるんですよ。あなたと一緒だから僕も踊れるのですよ」

今やクライドは、彼女の腕が大きくて軟かい事や、彼女の胸が若さで滿ち滿ちてゐる事や感じる事が出來た。ダンスの爲めに陽氣になつて來た彼女は、今や醉つたやうになつて、彼に身を委せてゐた。『蔦色の眼』が濟むと、デイラードが叫んだ。

「さあ、今度は『愛のボート』だ。君とゼラとで踊つて下さい。僕はリタと一廻りしますから。ねえリタ」しかし、此の上もなくダンス好きであり、自分のダンスに自信のあるデイラードは、レコードを代へる暇も待つて居られない樣子で、直ぐにリタの手をとつて、あちこちと滑り廻つて、クライドにはとても出來ない樣な巧妙なステップを踏んだりした。

しかし、ゼラと踊り始めて見ると、クライドは、今夜は二人宛の愛人が互ひにそれ〴〵樂しむ可き

であつて、お互ひに邪魔をしてはならないことを感じた。と言ふのは、彼がゼラと踊つてゐる間ぢう、彼女はよく踊りもしたし、色々の事を話しもしたが、彼女は矢張りデイラードだけを愛して居て、彼と一緒に居たがつて居ると言ふ事が、解つたからである。數回の踊りが濟んだ。クライドは、リタと二人で長椅子に腰かけて話し合つたが、その間にゼラとデイラードとは、臺所に何か飲みに行つた。しかし、クライドには、何かを飲むにしては少し時間が掛り過ぎるやうに思へた。

しかし此方でも、その休みの間、故意にさうするかのやうに、リタは身體を擦り寄せてゐた。二人の會話が鳥渡とぎれると、彼女は立上つて、音樂も何も無いのに、もう少し踊らうと誘つた。彼女は先刻、デイラードと踊つたと同じステップをクライドに敎へようとしたが、そのステップの性質上、彼等はぴつたりと身體をつけ合はねばならなかつた。くつ付け合つて立つて、クライドの肘や腕の置き力を敎へて居る間に、彼女の顏や頰が、クライドのそれに迫つて來た。クライドはもう、自分の意志ではどうする事も出來なかつた。彼が、彼女の頰に自分の頰をつけると、彼女は此方を向いて、勇氣づける樣な眼付きで笑つて見せた。その瞬間、彼は我にもなく、彼女の唇に接吻した。しかも二度も三度も。クライドは、彼女がそれを避けるかと思つたが、彼女はその儘にしてゐた。もつともつと、接吻をさせたいかのやうに、ぢつとしてゐた。

クライドは、彼に委ぜて居る溫かい身體や、彼の接吻に答へる彼女の唇を感じて、突然、これは容易に逃げられない關係になつたなと思つた。しかし、彼が彼女を好いて居り、彼女も明らかに彼を好いて居る今になつては、それに抵抗する事が非常に困難であることも思はないで居られなかつた。

九

だが、此の瞬間的な刺戟と香味とから離れると同時に、クライドの心は、例に依つて、彼の本來の道の問題に歸つて行つた。今、彼には、こんなにも露骨に、意味ありげに近づいて來る娘がある。而も、彼は、たつた今、此の町に來てはこれ迄とは全く別な道を取らうと、自分にも言ひ、母にも言つてやつたのではないか？　だが、それにしても——。

今や彼は、烈しい誘惑を感じて居た。リタの樣子では、今にも彼が、もう一歩進んで呉れるのを待つて居るらしく見えるからである。だが、それならば、どうして、何處で？　此の變な大きな家の中では駄目かしら？　ディラードとゼラとが這入つて行つた臺所の他にも、隨分部屋はあるらしい。だが、それにしても、さうした關係が一度出來たら！　その後はどうなるだらう？　後を續ける事を求められないだらうか？　續けない場合には厄介な事が起りはしないだらうか？　彼は、自分から進ん

で、勇敢に踊つたり、抱いたりして居乍ら、心の中では考へて居た。これは俺の爲す可き事ではない。此處はライカーガスだ。俺はグリフィス家の人間だ。俺には、彼等が俺をどう感じるかゞ解つて居る。一體俺は、彼女が好きなんだらうか？　こんなにわけなく俺の役に立たうとする此の娘は、たとひ、將來に何かの危險はないにしても、全然滿足すべき娘なのだらうか？　あんまり早い馴れ馴れしさではないか。——彼は今、カンサス市に居た頃の氣持に近い、或る感覺を味ひつゝあつた。——心を牽かれ乍ら、尙且つそれに反撥したいやうな思ひであつた。彼が遠慮勝ちに、接吻したり抱いたりしてゐる中に、やがてディラードとゼラとが歸つて來た。彼等が歸つて來ては最早、今迄のやうな親しみを見せるわけには行かなかつた。

やがて何處かで二時の音がしたので、リタは突然歸ると言ひ出した。こんなに遲くまで外に居ると言ふ事は、彼女の兩親が許さないのであつた。しかしディラードは未だゼラと別れる氣がないらしいので、當然クライドが、彼女の家まで送つて行かねばならなかつた。それは、双方がおぼろげに感じて居る失望や失敗の氣持を和らげる一種の喜びになつた。クライドはクライドで、自分が彼女の期待に添はなかつたゞらうと思つてゐたし、彼女は彼女で、この人には自分に隨いて來るだけの勇氣がないのだと、彼女自身に說明して居た。

間もなく彼等は、彼女の家まで來たが、其處でも未だ、彼等の會話には、將來の有望を暗示する親しさが籠つて居た。彼女の態度は、此の時も未だ思ひ切つて挑發的であつた。しかし、一人になるとクライドは、未だ此の新しい關係が、餘りに早く發展し過ぎる事を、自分自身に呟きつゝあつた。此の町で、かうした關係に陷る可きかどうか――少くともこんなに早く陷つていゝものかどうか、自分にもはつきりしなかつた。だが、此の町に來る前にも、彼が何か立派な決心をした事があるだらうか？　一體彼は、何を決心しようと思つてゐるのだ？　しかも尙彼は、リタの感能的な溫かさと、その引力とに煩はされて、彼の決心とその無能力との爲めに、いら〳〵させられてゐた。

此の事について、彼を結局の決心に導いたものには、次のやうな二つの事が密接に結びついて居た。

一つは、グリフィス家の人達の態度であつて、ギルバートは別として、彼等のクライドに對する態度は、反對ではなかつたが全くの無頓着であつた。それはサミュエル・グリフィスの最初からの失策であつた。今一つは、此の町に放けるクライドの、全く孤獨ではないまでも、變則的な地位であつて、それはグリフィス家の人達が、少くとも多少の好意を示すか、時々懇ろな忠告でも與へてやらなければ、堪らないものであつた。それにも拘らず、絕えず時間に餘裕のないサミュエル・グリフィスは、最初の一ケ月間は、クライドの事なぞは思ひ出したことさへなかつた。クライドが此の町に來て、

適當な地位を與へられたと聞いた彼は、將來に於ても、多分適當に眼を掛けられるだらう。――それ以上何を考へる必要がある。――と思つて居るのだつた。

かうして、五週間計りが無事に過ぎて行つた。その間、ギルバートは、無論自分の樂しみに沒頭してゐたが、クライドはあの地下室で日を送り乍ら、彼自身は一體どうなるのだらうと思つて居た。デイラードや、あの娘達や、その他の人々の彼に對する態度を見るにつけても、彼は、彼の現在の地位に、多少の不思議さを感じないでゐられなくなつて來た。

しかし、クライドが此の町に來て一ケ月計り經つた或る日、父親のグリフィスが、ギルバートに、クライドの事を尋ねて見た事があつた。

「それで、お前の從兄弟はこの頃、どうしてる？　今何をやらしてるんだ？」

ギルバートは何を言ひ出されるかと、多少心配し乍ら答へた。

「あゝ、無事にやつて居りますよ。先づ皺伸部屋から働かせる事にしてますが、それでいゝんでせう？」

「あゝ、いゝだらう。此の工場での手始めは先づあすこからだからね。だが、あの男の事を、今、お前はどう思つてるんだ？」

「あゝ、いや」ギルバートは、少からず遠慮はして居たが、嘘はつかなかつた。「大丈夫でせう。あれなら働き續けるでせうが、しかし、此の仕事に打つて付けの男だとは僕には思へませんですね。御承知の通りに、あの男にはまるで教育がないのですからね。そいつが誰にでも解るんですよ。それに、あの男は、非常に積極的でも精力家でもなさゝうに見えますですね。どうも、少し優し過ぎると思ふんです。しかし僕は、あの男をよさせる積りはないのですし、まア、段々よくなるでせう。あなたが好いていらつしやるのですから、僕の方が間違つてるのでせう。しかし僕の考へでは、あの男が此處へ來たのについては、あなたからもつと色々な事をして戴く積りではなかつたのかしらと、思へてならないのです」

「成程、お前はさう思ふのか。いや、若しあの男がさう思つて居るとすれば、それはあの男が惡いんだよ」父親はさう言つたが、直ぐに揶揄ふやうな微笑を浮べて「お前は今、あの男が實務には不向きかも知れないと言つたが、そんな事が言へる程、未だ日が經つて居ないぢやないか？　だらう？　シカゴで會つた時には、そんな風には見えなかつたがね。それに、あの男でも間に合ふやうな仕事位、何處かにありさうなものぢやないか。たとひあの男が世界一の腕利きでないにしても、大して無駄をしないであの男を使つて置けるやうな位置が。無論、あの男がつまらない位置でも滿足するならば、

それでも構はないさ。しかし、何れにしても、あの男を今追歸す必要はないし、間に合はせ仕事をさせるやうな事も、儂にはしたくないのだ。兎に角、儂達の親類だから、見つともない話だよ。まア、もう少しうつちやつて置いて、あの男がどうするか、見てゐようではないか」

「いや、結構です」父親に彼の事をすつかり忘れさせて、現在のまゝの最下層の仕事をさせて置きたい息子は、かう答へた。

しかし、彼を失望させたことだが、サミュエル・グリフィスはまた、こんな事を言ひ出した。

「近い中に、あの男を一度、家の夕飯に呼ばうと思つてゐるのだが、どうだね？　これまでもちよいちよいその事を考へたのだが、どうもその暇がなかつたのでね。本當は、お前に話す前にお母さんに話す筈だつたのだが。あの男は未だ一度も來ないのだらう？」

「僕の知つてる限りでは、まだの樣ですね」彼はいや〳〵ながら、さう答へた。彼は一向有難くなかつたのだが、直ぐにそれに反對する程、策の無い男では無かつた。

「いや、僕達も、何かお話しがあるだらうと思つて、待つてゐたのでした」

「よろしい。では、お前、あの男の處書を調べておいてくれ。支障が無ければ、此の次の日曜日あたりが好いだらうと思ふのだが」息子の眼に多少疑はしげな、不得心らしい影がさすのを見て、彼は云

ひ添へた。「兎に角、ギル、あの男はわしの甥だし、お前には從兄弟だし、あの男を全然無視する譯には行かないのだからね。さう云ふ事は悪い事だよ。だから、今晩にも、お前がおつ母さんに話して、いや、わしが話してもいゝが、その用意をして置いてお呉れ」

彼は、探し物をしてゐた机の抽斗を閉めて、立ち上つて、帽子と外套とを取つて此の事務室を去つた。

此の相談の結果として、此の次の日曜日の六時半に、グリフィス家の晩餐に出るやうにと云ふ招待狀が、クライドの處に送られた。日曜日の一時半には、此の家に親しい二三の人を招んで、相當に大袈裟な家庭宴會を開くのが此の家の例になつて居た。六時半になると、かうした客は大抵歸つて了ふし、グリフィス家の人達も、時には一人二人出掛けるので、其の時にはグリフィス夫婦とミラとだけで冷たい小餐をとるのであつた。ベラやギルバートは、大概どこかの招待に行く事になつてゐた。

併し今度の場合だけは、皆で相談した結果、家族全部が揃ふ事にした。尤もギルバートだけは、此の事に反對でもあつたし、他に約束もあつたので、一寸の間だけ顔を出さうと云ふ事になつた。併し、其の日若し午後から居殘る人があつても、クライドを紹介したり、說明したりする樣な事は、一切拔きにし樣と云ふ事も、其の相談で決められた。

其日は皆でクライドを研究して、遠慮なくそれを報告しようと云ふ事も話し合はされた。

だが、其間にも、ディラード、リタ、ゼラ達との關係は、段々進みつゝあつた。と云ふのは、あの晩の樣子で、クライドがリタの魅力にひき附けられて居る事を信ずる樣になつた三人は、彼等の親しみを加へる爲に、此の週末にユティカかアルバニーか何處かへ旅行しよう、と、ディラードを通して申込んで來たからである。娘達も勿論行く筈だ。リタに對しては、ゼラを通して相談をさせるから、ちつとも心配する事は無い。「ね、彼奴は君に惚れてるんですよ。ゼラの話だと、彼奴、此の間、君の事をキャンディだつて云つてたさうですからね。姫殺しだと云ふんですよ」彼はじり〳〵とクライドに取り入つて、かうした事を申込んで來た。

無論、此の申込みは、クライドを身振ひさせるに充分であつたが、同時に彼に無限の困惑を與へさうでもあつた。第一に彼には、金が無かつた。一週間の後では十五弗しか無い筈であつた。若し彼がさうした贅澤な旅行に金を拂はねばならないとすれば、無論彼には出來ない相談であつた。汽車賃や食事代や、ホテル料も要るし、二人の爲の自動車代も要るだらう。其後で、殆ど知らない此のリタとの密接な關係に這入るだらう。無論彼女は、今後も此のライカーガスで親しみを續ける事を豫期して、彼が日を決めて訪ねて行く事を期待するだらう。——それから色々の處へ行く。それから——さうだ、

糞ッ――あのグリフィス家だ。――あの從兄弟のギルバートが、それを見るか聞くかしたら。――既にゼラが云つたではないか――此のライカーガスで、始終、彼處此處でギルバートを見掛けると。二人で一緒に居る處を、何時か何處かで彼等に見附からないと、誰に云へるだらう？　然もさうなれば、彼がディラードの樣なよその店のやくざ者と、親しくして居る事が解るのではないか？　それは、彼の、此の町に於ける經歷を汚すだけの事だ。其の結果がどうなるか、それを語り得る者は居ない。

彼は咳き入り乍ら、樣々な口實を考へて見た。今、自分には、する仕事が澤山ある。のみならず、さう云ふ冒險になると、少し考へて見なければならない。第一にあの親戚だ。それに、次の日曜日からは、多少餘分な仕事をしなければならないから、此のライカーガスを離れる譯に行かない。それが濟んだら考へて見てもいゝ。事實、彼は、樣々に思ひ迷つて、どうしたらいゝだらうと考へて居たのだ。兎に角、彼は、此の二三週間、出來るだけの儉約をしなければならないのだ。彼は新しい夜會服と、織り疊み式のシルクハットとを買はうと思つて、多少の貯蓄をしてゐたのではないか。惡い事だが、それを少し使つてやらうかしら？

あの可愛いゝ、小肥りな、肉感的なリタよー

丁度其時――ではないが、それから間も無く、グリフィス家の招待狀が屆いたのであつた。或る夕

方、まだあのディラードの申込みに就いて考へ乍ら、すつかり疲れて工場から歸つて來ると、グリフィス家の下男が留守中に持つて來た、重い立派な手紙が、テーブルの上に乘つて居た。見ると、其の狀袋の緣には、EGの頭文字が、浮字になつて出て居た。直ぐに聞いて、彼はがつくゝと讀んだ。

親愛な甥よ、あなたが此處に來られてから、一度お招きし度いと申して居たのですが、主人が絶えず不在勝ちなので、今日迄其運びがつかなかつたのです。併し今は暇になりましたから、今度の日曜日の六時に、私共で晩餐を共にする事が出來れば大變幸福だと思ひます。私達だけの極く內輪の食事ですから、あなたがいらつしやれなくとも、お手紙や電話の必要はありません。禮服の着用にも及びません。只、支障が無ければいらして下さい。お目にかゝるのを樂しみにしてゐます。

伯母　エリザベス・グリイフス

これ迄、伯父の家から何とも云つて來ない上に、厭で堪らないあの皺伸室で働かされた爲に、次第に失望して、あの大親戚とはもう何の交渉もなくなるのかと思つて居たクライドは、此の手紙を讀んで、ひどくロマンティックな、從つてまた非實際的な印象を受けた。だつて、此の素晴しい手紙には

「お目にかゝるのを樂しみにしてます」と書いてあるではないか。かう云つて來るからには、少くとも彼を惡く思つてゐるのではない。サミユエル・グリフイス氏が絶えず不在であつた。それだよ、理由は。然も今、彼は、伯父や從兄弟に會へるし、あの太邸宅の中も見られるのだ。素晴しい事ではないか。今後は彼等も、彼を取り上げるかも知れない。——取り上げないと誰に云へるのだ？　併し、今も今、彼等に斷念し樣と思つて居る時、彼等が取り上げてくれるなんて、何と素晴しい事だらう！

ゼラやディラードは別にしても、リタに對する彼の興味は、これに依つて忽ち消散し始めた。何だつて？　ライカーガスの町で、いやしくもグリフイスと呼ばれる人間が、こんなに下等な人間と交つて、此の偉い家族との關係を危險に導くなんて、そんな事は絶對に出來ない。これは大失策だ。此の手紙が丁度今來たと言ふ事が、その證據ではないか。しかも幸運にも——（さうだ、何と言ふ幸運だらう！）——彼は未だ、身を落し入れないだけの嗜を持つてゐたのだ。今ならば、大した面倒もなく、ディラードから自然に離れる事が出來る。必要があれば、カツピー夫人の家から移轉してもいゝし、伯父から或る事を注意されたと言つてもいゝ。兎に角、彼等と別れなければならない。それは、彼の此の新しい出世の爲めに危險である。そこでクライドは、リタやユチカの事を考へる代りに、再びあのグリフイス家の家庭生活や、彼等の出入りする素張らしい家の事や、彼等の接觸する面白い人

達の事を、密かに想像し始めた。彼は早速、夜會服か、さもなくばタキシードが必要な事を考へ始めた。そこで翌朝、十一時から一時までの暇をゲメラー氏から貰ふと、早速出掛けて行つて、タキシードとエナメル靴と絹の白手袋とを買つた。彼はこれで、自分も安全だと思つた。これならば、よい印象を與へ得るだらう。

かうしてクライドは、次の日曜の晩が來るまで、リタもディラードもゼラもなく、只此の機會の事計り考へてゐた。明らかにそれは、彼を素張らしいものに面接させる出來事であつた。

だが、それにしても氣懸りなのは、彼に何時でも冷眼を向けるあのギルバート・グリフイスである。恐らく彼もその場に居て、高慢な樣子を見せるであらう。しかし、若し彼が（クライドが）この家族の面前で、餘り樣子振つた態度を見せれば、恐らくギルバートは、その償ひを工場の仕事でするだらう。例へば、彼は、クライドに不利な事計りを父親に話すであらう。しかも、此の皺伸部屋の慘めな仕事をさせられて居る限り、彼には何の望みもないではないか。だが、彼が此の町に着くや否や、彼とそつくりのギルバートを發見して、しかも不可解な理由の爲めに反對されてると言ふ事は、クライドの爲めには幸運だつたのである。

しかし、かうした樣々な懸念の中にも、彼は此の機會を出來るだけ上手に利用しようと思つたので、

月曜日の六時になると、試驗に出る時の樣に緊張して、グリフィス家に向つた。グリフィス家の玄關からは、廣い煉瓦の鋪道が斜に出て居て、その前に大きな鐵の門があつた。彼は何かの冒險でも冒すやうな氣持で、その門を外して這入つて行つたが、鋪道を歩き乍らも、澤山の批評的な眼で見られてゐる樣な氣がした。恐らくはサミュエルもギルバートも、他の二人の娘達も、あの重いカーテンの向ふから、彼の樣子を見て居るだらうと思つたからである。今や階下には、軟かい招くやうな光が幾個も輝いて居た。

しかし、此の氣持が幾らも續かない中に、扉が開いて、一人の下男が現れた。彼のコートを脱がすと直ぐ、非常に大きな居間に案内して行つた。それはグリン・デビッドソンやユニオン・リーグに馴れたクライドにも、非常に美しい部屋のやうに思へた。そこには樣々な立派な家具や贅澤な敷物や窓掛けがしつらへてあつた。大きな高い暖炉が燃えて居る前に、長椅子や小椅子が半圓形に並べてあつたし、ランプや大時計や大テーブルも置いてあつた。部屋にはその時誰も居なかつたので、クライドはもじ〳〵と邊りを見廻して居たが、忽ち梯子段の方から絹づれの音がして、グリフィス夫人が近づいて來るのが見えた。彼女はもう女盛りを過ぎた、物優しさうな婦人で、何處か明るい丁寧な樣子があつたので、一三分も話して居る中に、クライドはすつかり寛いだ氣持になれた。

「私の甥、さうですわね？」と彼女は微笑した。

「さうです」クライドは簡單にさう答へたが、神經質になつて居る彼は、何時になく固苦しい樣子で、

「僕はクライド・グリフィスで御座います」と言ひ添へた。

「お目に掛れて嬉しう御座います」グリフィス夫人は、此の地方の上流に多年交際しなれた威嚴で、さう言つた。「無論、子供達も大變喜ぶ事で御座いませう。ベラとギルバートとは、今、鳥渡出掛けてますけれど、でも直ぐ歸つて參るでせう。主人は今休んでますが、只今、物音が聞えた樣ですから、直ぐに參るで御座いませう。まア、お掛けになりません？」と彼女は二人の眞中の大きな長椅子を指さした。「私達は、日曜の晩には大抵何時でも、私達だけの御飯を此處で戴くので御座いますよ。だから今日も、私達だけの處へ來て戴く方がいゝと思ひましたの。如何です？　ライカーガスは御氣に召しましたか？」彼女が暖爐の前の大きな長椅子に腰掛けたので、クライドも適度な距離を置いて、遠慮さうに腰を下した。

「はア、非常に好きで御座います。無論未だ幾らも見て歩かないので御座いますが、見ただけですと、隨分いゝ町で御座います。殊に此の通りは、此の町でも一番立派な通りだと思ひます。家も大きくて立派ですし、周圍も實に綺麗ですから」

「さうです。私達此のライカーガスに居る者でも、此のワイキアヂィ通りだけは自慢にして居るのでございますよ」此の通りでの自分の家の地位に限りない滿足を感じて居るグリフィス夫人は、微笑し乍ら言つた。「此の町を見た人は、皆なさうお感じになるやうで御座いますよ。何と言つても此のライカーガスが未だ村であつた時分からの通りで御座いますからね。此の町が今の樣に立派になつたのは、やつと十五年此の方の事ですけれど」

「でも、あなたの御兩親の事を少し話して下さいましな。御承知の通りに、私は未だ一度も會つた事はないのですけれど、主人はしよつちうお噂をして居るので御座いますから。でも、主人も未だ、あなたのお母樣にはお會ひして居ないので御座いませう？　御父樣は今どうしていらつしやいます？」

「父も母も大へん丈夫に暮して居ります。以前、暫くカンサス市に住んで居ましたが、三年計り前にデンバーに引越して、今は其處に住んで居ります。つい先達、母から手紙が參りましたが、萬事旨く行つてゐると言ふことでございました」

「では、しよつちう、お手紙のやり取りをして居らつしやるんですわね。それは結構な事ですわ」彼女は段々面白くなつて來たし、殊にクライドの樣子が氣に入つて來たので、微笑を含んで言つた。彼がこんなに氣持のい〻樣子をして居る上に、こんなにも息子に似て居る事が、多少の驚きと共に彼女

の興味をそゝつたのである。尤も、クライドは、幾らか背が高く、身體もがつちりして居るので、男振りもよく見えるのであつたが、彼女は決してそれを承認しようとはしなかつた。彼女に對するギルバートは、時に頑固であつたり、傲慢であつたりするけれども、習慣的にも實際的にも愛情を示して呉れて居るし、誰の前でも平氣で思ふ事を仕遂げるので、彼女はギルバートを頼しく思つて居るのだつた。しかもクライドはと見ると、酷く物優しくはあるが、曖昧で中ぶらりんであるではないか？息子の此の力强さは、恐らくは、良人の內部的な能力に依るのであらうが、同時に又彼女自身の血筋をも受け繼いでるのに違ひない。クライドの力弱さも、多分その兩親の個人的なやくざから來て居るのであらう。

かうして、此の問題を息子に都合い〻樣に解決したグリフィス夫人は、更に彼の兄弟達の事を聞き始めたが、丁度その時、サミュエル・グリフィスが近づいて來た。クライドはもう一度固くなつて立上つたが、その樣子にすつかり滿足したサミュエルは、

「やア、やつて來たね。その後會はなかつたが、儂の工場に來てゐるんだらう？」

「はア、參つて居ります」クライドは、此の大人物の前に、うや〳〵しくお辭儀をして答へた。

「あゝ、それはいゝ。まア、坐り給へ、坐り給へ。それで儂も安心したよ。今の處、皺伸部屋で働い

て居ると言ふ話だつたが、まア愉快な場所ではないが、手始めとしては、大して悪くもないだらう。偉い人間は時々どん底から叩き上げるものだからね」さう言つて微笑した彼はまた言ひ添へた。「お前が來た時、儂は丁度此の町に居なかつたので會へなかつたよ」

「はア」

答へたきりクライドは、相手が大きな椅子に腰を下すまで坐らうとしなかつた。グリフイス氏は、クライドが、シカゴの倶樂部の制服を着てゐた時とは違つて、今、普通のタキシードを着て、洒落れた襞シャツや黒いネクタイを着けて居るのを見て、見違へる樣に立派になつたと思つた。此の樣子では、ギルバートが言ふ程の事はないと思つたが、それでもクライドに、實務的精力が缺けて居る事は認めねばならなかつたので、もう少し確かりした處が欲しいものだと思つた。さうすれば、此のグリフイス家と言ふ血族をもつと立派に見せる事にもなるし、息子を喜ばせる事にもなるだらうと思つた。

「どうだね、今の仕事は氣に入つてるかね？」彼は鷹揚に尋ねて見た。

「はア、いえ、非常に好きだとも申せませんけれども、しかしそんなことは何でもございません。手始めには、何をやつても同じだと思ひますから」

その時彼の心には、自分がもつと高いものを望んで居ると言ふ事を、印象させたいと思つて居たの

だつた。從兄弟のギルバードが此の場に居ないと言ふ事も、彼に勇氣を與へた。

「いや、その心掛けが大切だよ」とサミユエルも嬉しさうに賛成した。「それはあの仕事が餘り愉快でない事は儂にも解つて居るが、此の仕事を始めるには、第一に知つて置かなきやならん仕事だからね。それに、何の仕事に依らず、何かの仕事をやるには、多少の時間がいるものだからね」

しかし、一體どの位、あんな不愉快などん底に働かして置くのだらうと、クライドは思つてゐた。その中に、ミラが這入つて來た。彼女はクライドをどんな男だらうと、興味を持つて來たのだつたが、ギルバートが言つた程不愉快な男でもなさゝうなのを見て、非常に喜んだ。クライドの眼に、何處か神經質な、密やかな、訴へ求めるやうな何かゞあると思つた彼女は、自分自身社交的に不向きである事から思ひ合はせて、彼にある興味を感じたのであつた。

「ミラ、お前の從兄弟のクライド・グリフイス君だよ」サミユエルは、氣輕に立上つてクライドを紹介した。「娘のミラ」とクライドにも言つて、「これが儂が話してた青年だよ」

クライドは御辭儀をしてから、差し出されたミラの冷たい細い手を取つた。しかし、此の握手には、普通の客を歡迎する以上の友情と思ひやりとが籠つて居るやうに感じた。

「まア、よくいらつしやいました。私達は皆な此のライカーガスが好きなのですから、あなたも好き

なつて戴きたう御座いますわ。シカゴにいらしつたのでは、此の町はつまらないかも知れませんけれど」ミラは快活に笑ひ乍ら言つた。クライドは此の素張らしい親戚の人達の前で、すつかり固くなつて、只「有難う御座います」と言ふだけだつたが、彼が腰を掛けようとすると、表の扉が開いて、ギルバートが這入つて來た。その前に自動車の止る音が聞えて「ドルジ、鳥渡待つて呉れ。直ぐだから」と言ふ聲がしたのであつたが、這入つて來るなり、彼は家族の者に「鳥渡失禮、直ぐ歸つて來ますから」と言つて、梯子段を駈け上つて行つた。間もなく彼は降りて來たが、そのクライドに向けた眼は、あの工場で彼を惱まして居るあれと、ちつとも變りがなかつた。彼は、派手な縞の明るい自動車コートを着て、眞黑い皮の帽子を被り、長い皮手袋を着けて居るので、鳥渡軍人のやうな恰好になつてゐたが、クライドに肯いてから、「どうだね」と言つたきり、父親の肩に手を置いて、「いや、お父さん。殘念ですが僕は今夜家に居られませんよ。僕は今、ドルジやユースチィスと一緒に、コンスタンスやジャックリンを連れにアムステルダムから歸つて來た計りなんです。今晩、ブリッグマンの處で或る催しがあるもんですからね。しかし、朝までには歸つて來ます。遲くとも、事務所には間に合はせますから。どうです、萬事旨く行つてますか。お父さん？」

「あゝ、何にも不平はないが、今晩一晩中は、お前少し長過ぎるぢやないか」

「いや、その積りぢやないんですがね」と彼はクライドを全く無視して答へた。「只、二時までに歸つて來られなかつたら、向ふへ泊ると言ふだけの事ですよ」

彼は快活さうに父親の肩を叩いた。

「自動車を何時もの樣に走らしてはいけないよ。危いからね」と、側から母親が言つた。

「えゝ、一時間十五哩ですよ。一時間十五哩ですよ。それが規則ですからね」と、彼は亢然と笑つた。

かうした總てに、クライドは、彼の威張り散らして居る樣子を感じた。確かに、此處でもあの工場と同樣に、彼は重んぜられてる人間なのだ。父親以外に、彼が尊敬すべき人間は居ないのだ。何と言ふ優越的な態度だらうとクライドは思つた。

自分で儲けた譯でもないのに、こんなに我儘に威張り散らせる息子があるとは、何と驚く可き事だらう！　成程、此の樣子では、彼に對して威張つたり無頓着であつたりする事も無理ではない。だが、こんな若者になつて、こんな勢力を持ち得て見たら！

十

此の時、一人の女中が、食事の用意が出來た事を知らせに來た。直ぐにギルバートは出て行つたが、

家族の者達は食堂に立つた。

「未だベラから電話が掛つて來ないかい？」とグリフィス夫人は女中に尋ねた。

「はい、未だで御座います」

「では、ツルースデールにさう言つて、フインチユレーさんへ電話を掛けさせて、あの娘が居るかどうか聞いて御覽。直ぐ歸つて來るやうに私が言つたつて」

女中が出て行くと、一座の人々も裏梯子段の西側の食堂に行つた。クライドの眼に映じた此の部屋は、薄い鳶色を基調とした立派な部屋で、彫刻のある大きな胡桃材のテーブルが置かれてあつた。それは何か特別の場合にだけ使はれる部屋であるらしかつた。テーブルの廻りには、倚り掛りの高い椅子が用意されてゐて、その上に吊られた花燭臺が邊りを照してゐた。此の部屋の向ふに、天井の低い可成り廣い半圓形の別間があつて、そこから南側の庭を見渡すやうになつて居たが、食事は意外にも、此の別間で攝られる事になつて居たのである。そこには小さいテーブルを圍んで、六脚の椅子が置いてあつた。

ゆつたりと腰を下してゐるクライドは、彼の家族の事とか、彼の過去現在の生活だとか、彼の兩親の年齢だとか、色々の質問に答へなければならなかつた。デンバーに移る前にはどんな暮しをしてゐ

たか、兄弟は幾人あるか、長女のエスタは幾歳であるか、彼女はどんな事をしてゐるか、他の兄弟達は何をして居るか、父親はホテルの仕事が好きなのか、カンサス市では父親はどんな仕事をして居たのか、何年そこに住んでゐたのか――そんな事を聞かれてゐた。

クライドは、此の夫婦の鄭重な矢繼早の質問に、少からず面くらつた。そのおど〳〵した答へ方、殊に彼の家族がカンサス市に居た時の有樣を話す時の、彼の困つたやうな樣子から、二人はその質問の何かに、クライドを困らせる物があつたのだらうと思つた。無論彼等は、それを極端な貧乏の爲めだと解釋した。例へば、彼等が、「では君は、學校が濟んでからカンサス市のホテルで働き始めたのだね」と、尋ねた時、クライドは眞赤な顏をして、あの自動車を盜んだ時の事や、自分が殆んど學校なぞへ行つて居ない事なぞを思ひ出して居た。言ふまでもなく、此の時、クライドは、カンサス市のあのホテル生活、殊にグリン・デビッドソンの事等は、思ひ出したくなかつたのである。

しかし、有難い事には、丁度此の時、部屋の扉があいて、ベラと他に二人の娘とが這入つて來た。クライドは直ぐ、此の二人を、かうした上流社會の娘だと思つたが、彼等は、クライドが最近まで心を奪はれてゐたリタやゼラとは、別世界の人達の感じがあつた。無論、彼は、ベラが家族達に親しけに話し出す迄は、彼女がベラである事を知らなかつたが、他の二人――一人はベラが度々母親に話

して居る例のソンドラ・フインチユレーで――その、利巧さうで、派手で、美しい樣子は、クライドには曾つて見た事も聞いた事もない程崇高なものに思へた。彼女は、きつちりと身に合つた着物を着、暗い色の皮帽子を目深かに被り、同じ色の皮紐を首にまいて居た。その手の皮鎖につながれてゐるフランスブル犬から、片手にさげて居る黑と鼠色の市松模樣の外套まで、何から何まで、クライドには、曾つて世の中で見た最も崇拜すべき女性のやうに思へた。實際、彼女の感銘は、クライドを電氣のやうに突き刺した。それは所有欲と同時に、所有す可からざるものに對する絶望の交錯した、不思議な感覺であつて、彼女を手に入れたいと思ひ乍ら、而かも彼女から一顧だも與へられない苦しみを籠めて居た。それは、苦しみであると共に、眩めく思ひであつた。一瞬間、眼を閉して彼女を追出さうとする彼は、他の瞬間には、彼女を眼離さないで見て居たい彼でもあつた。

だが、彼女は、クライドを見たのか見なかつたのか解らなかつた程、自分の犬に計り氣を取られて居た。

「さア、ビッセルや、おとなしくしないと、表へ出して繋いで了ふわよ。駄目よ。そんなに騷いぢや。かうして居られないぢやないの」

犬は、此の家の飼ひ猫を見附けて、その方へぐい〳〵と近寄らうとして居るのであつた。

今一人の娘には、クライドはそれ程心を牽かれなかつたが、でも、ソンドラに劣らない程悧巧さうで人眼を牽く娘だつた。彼女の髪の毛は金髪で縮れて居たし、その眼は巴旦杏の樣に美しく、瞳は濃い綠色で、その全體の面ざしや態度には、何處か優雅な小猫と言ふ處があつた。部屋に這入るや否や、グリフイス夫人の坐つて居るテーブルの端に行つて、先づ彼女に倚り掛つた。

「まア、伯母樣、御機嫌よう。御眼にかゝれて嬉しう御座いますわ。隨分御目に掛りませんでしたのね。だつて、私も母も此方に居なかつたんですもの。今日は、父も母もアルバニーに行つてるものですから、ランベルヒさんのお宅で、ベラやソンドラにお會ひしましたの。伯母樣達は今、お食事を始めていらつしやるのでせう。ミラさん、如何？」

さう呼び掛けて、彼女はグリフイス夫人の肩越しに、ミラの腕を把つた。それは只儀禮の爲めにしたゞけらしかつた。

一方、ソンドラに次いで可愛いらしい娘のベラは「まア、遲くなつて濟みません。もうそんな時間ですの」と、大きい聲で言つたが、始めてクライドに氣がついたやうな顏をして、半ば目下に對するやうな謙遜さで口を噤んだ。クライドは、彼等が這入つて來た時から既に立上つて居たのだつたが、かうした樣子を見ると、今更のやうに自分の身分を感じないで居られなかつた。かうした位置にある

若さと美しさとは、女性の最高の勝利を代表するものゝやうに思へたからである。リタの場合は兎も角も、ホルテンス・ブリッグスに對する彼の態度から見ても、クライドは極端な女性崇拜家であつたに違ひなかつた。

「ベラ」クライドが未だ立つて居るのに氣附いて、サミュエル・グリフィスが重々しい調子で言つた。

「お前の從兄弟のクライドだ」

「まア、さう」ベラはクライドがギルバートにそつくりであるのに氣付き乍ら答へた。「御機嫌よう。近いうちにいらつしやるつて事は、母から聞いてましたの」さう言つて、僅かに一二本の指をさし出したが、直ぐ友達の方を向いて「私のお友達のフィンチュレーさんと、クランストンさん。こちらはグリフィスさん」

二人の娘は、しかつめらしくお辭儀をしたが、同時にじろ〳〵とクライドの顏を見て居た。そして

「隨分ギルバートに似ていらつしやるぢやないの？」と、ソンドラがベルチンに囁いた。

「全くだわ。でもこちらの方が少しゝ男ぢやない？」

ソンドラは首肯いて見せた。彼女は、クライドがベラの兄よりも多少いゝ男である事を喜んだが、それは彼女がギルバートを好いて居なかつたからでもあるが、また、クライドが、彼女に參つて居る事

を見付けたからでもあつた。若い男に會つた時、その男が彼女に參つて居るかどうかを先づ見極める事が、彼女の常習であつた。しかも今、クライドの眼が、絶えず彼女の方に向けられるのを見ると、彼女はもう彼に注意を向けない事にした。此の男の餘りに他愛ないことを見てとつたからである。

しかし、ベラが思ひ掛けなく友達を引張つて來て、此の場合をどう扱つていゝかに迷つたグリフィス夫人は、幾らかいら〳〵した調子で言つた。

「さア、お二人共外套を脱いでお坐んなさいな。今、ネーディンに言つて、別のお皿を待つて來させますから。さア、ベラもお父樣のお隣りに御坐り」

「まア、いゝのですのよ。」

「本當にいゝのですの。これから家に歸る處ですから、ゆつくりして居られませんの」

ソンドラとベルチンとが同時に言つたが、クライドの人好きのする樣子を見ると、彼の交際振りに多少の興味を寄せないでも居られなかつた。實を言ふと、彼等はベラには非常に好意を持つてゐたが、ギルバートは、餘り好いて居なかつた。かうした自惚の強い美人にとつて、ギルバートは餘りに押しが強く、強情張りで傲慢であつたからである。しかもクライドはと見ると、その樣子を見たゞけで、既に從順さうであつた。若し彼が彼等と同じ地位の人間であり、少くともグリフィス家でさうだと認

めれば、彼は此の町で相當な扱ひを受けるに違ひなかつた。何れにしても、彼が金持であるかどうかを知る事には、興味がなくもなかつた。だが、その興味は、直ぐにグリフィス夫人の言葉に依つて滿された。彼女ははつきりとベルチンにかう言つたからである。

「グリフィスさんは、私達の甥で、今度私達の工場で働いて見る爲めに、西部の方からいらしたのですよ。此の人が自分で獨立して身を立てようとして居らしたのを、うちのお父樣の御親切で、私達の所でやつて見られる事になつたのですから」

クライドは顏を赤らめた。かうした言葉は、明らかに彼の社會的地位が低い事を示して居るからである。事實、かう聞いて、財產や地位のある青年に計り興味を持つてゐるベルチン・クランストンは、その好奇心に充ちた顏から、忽ち無頓着な顏付きになつたが、しかし、一方ソンドラ・フィンチユレーは、彼女自身素晴らしい美貌の持主であり、その兩親は富豪であつたけれども、ベルチンのやうに打算的ではなかつたので、今一度クライドの顏を見直して、氣の氣だわねぇと言ひたげな顏をした。實際それ程に、クライドが面白さうな男に見えたのであつた。

「さア、ソンドラ、その犬を食堂の椅子に繫いで置いて、私の側にお坐り。その外套もその椅子の上に置いて。さア、此處が空いてゐ」

その時、ソンドラを特別に可愛がつてゐるサミユエル・グリフィスが言つた。ベルチンに對しては彼もグリフィス夫人も、餘りに狡猾だと言つて嫌つてゐるのだつた。

「でも、をぢ樣、私さうしては居られませんの」ソンドラは、此の好意に取入るやうに、甘えた調子で言つた。

「もう今日は遲いんですし、それにビツセルが、こんなに騷ぐんですもの。私もベルチンも、本當に家に歸る處ですから」

「あゝ、さう、お父さん」ベラが早速口を入れた。「ベルチンの馬が、昨日、脚に釘を立てゝ、今日は跛にならうとしてますの。お母さんもお父さんもお留守だから、どうしたらいゝかあなたに聞いて見たいと言つてらつしやるのよ」

「どつちの脚だな」グリフィスが尋ねたが、その間にもクライドは、ソンドラの顏を見詰めて居た。全く綺麗だとクライドは思つて居た。その鼻はすんなりと立派だつたし、その唇も惡戲者らしく弓なりに反つてゐた。

「左の前脚ですの。昨日の午後、イースト・キングストン道路を走つて居る時、蹄鐵が取れて、何か立つたらしいのですけれど、ジョンではよく解らないらしいんですの」

「釘が立つてから餘程騎り續けたらしいのかね？」
「えゝ。歸り道全部ですから、八哩位だつたかも知れませんわ」
「さう。では何か塗藥を塗つて、繃帶をして置いてから、獸醫を呼ぶとよかつたんだね。だが、獸醫ももう來るだらう、屹度」
彼女達が歸つて行く樣子もないので、クライドは只一人、彼等の安樂な愉快さうな生活の事を考へてゐた。實際、此處には、何の心配もなさゝうであつた。彼等の話と言へば只、今度建つた家の事だとか、彼等が乘廻す馬の事だとか、彼等が會つた友達の事だとか、彼等が行く筈の場所の事だとか、彼等が行ふ筈の計畫だとか、そんな事に過ぎなかつた。ギルバートはギルバートで、少し前に、若い仲間と一緒に自動車で何處かへ行つたばかりだし、彼の從兄弟のベラはベラで、かうした金持の娘達と遊び歩いて居るのではないか。しかもクライドはと言ふと、あのカッピー夫人のむさくるしい下宿より他に行き所もなく、十五弗の週給で生きて居るのだ。明日の朝になれば、彼は再びあの地下室で働かねばならないのに、かうした娘達は、今日よりも更に愉快な日へと向つて進むのだ。しかもあのデンバーの町では、彼の兩親が、此處では口にする事も出來ない樣な慘めな下宿屋と傳道とを、業として日を送らなければならないのではないか。

突然、二人の娘は別れを告げて歸つて行つた。再び、クライドとグリフィス家の人達だけになつたが、彼は自分が此の場に不似合ひな人間に見えて仕方がなかつた。ミラは別として、サミュエルにしても、その夫人にしても、ベラにしても、只彼に不似合ひな世界を見せてやつてるのだと思つてるやうな氣がしたし、彼の樣な貧乏人がどんなに夢想しようとも、かうした驚く可き娘達には附合ふ事も出來ないのだと、思つてるやうにも見えた。忽ち、クライドは悲しくなつた。彼の暗くなつた眼や顏色は、只にサミュエルばかりでなく、彼の妻君やミラにもそれと氣がついた程であつた。彼が若しかうした社會に這入れたなら、何かの道が開けるであらう。――だが、彼の淋しさや絶望を多少でも感じて呉れたのは、只ミラだけであつた。そこで、みんなが立つて居間の方に歸つて行く時、ミラはそつとクライドに近づいて行つた。
「でも、あなただつて、もう暫く此の町にいらつしやれば、屹度ライカーガスが御好きになれますわよ。アディロンダックは、此處から北に七十哩ばかりですし、湖水だの何だの隨分面白い處が、此の附近には澤山あるのですから。それに夏が參りますと、私達はみんなグリーン・ウッドに行く事になつてますから。屹度父達も、あなたをお呼びするだらうと思ひますわ」
彼女には、父達にその積りがあるか無いか、全く解らなかつたのだが、此の場の成り行きで、さう

言はないで居られないのだつた。クライドは、彼女と話して居るのが氣持が好いので、他の人達を無視しない程度で彼女と話し耽つたが、やがて九時半になると、彼一人置去りにされてゐるやうな氣がして來たので、立上つて別れを告げた。サムユエルは一緒に玄關まで送り出して呉れたが、彼も先刻のミラと同樣に、クライドをうつちやつて居たやうな氣がしたので、その償ひをする積りで愉快さうに言つた。

「ねえ、外に出ると氣持が好いぢやないか。ワイキアヂイ街も、未だ餘り好くはないが、もう二三週間もすると好くなるよ。春が來るからね」彼は空を見上げて、四月の空氣を嗅いだ。「まア、その頃にまた來て見ると好い。此の邊の花が咲き出すと、實に美しくなるからね。では、左樣なら」

彼の聲には微笑と好意とが見えてゐた。クライドは、ギルバードがどうであらうとも、此の父親だけは彼に無頓着ではないと、思はないでゐられなかつた。

十一

その後、幾日か日が經つても、グリフィス家からは何とも言つて來なかつたが、クライドは、此の一度の出來事を樣々に誇張して考へて、絶えずかうした娘達と會ふ日を夢想し、かうした娘達の一人

と戀愛關係にでもなつたら、どんなに素晴らしいだらうと考へてゐた。彼等の住むあの世界の美しさよ！　彼のそれに正反對な、贅澤と魅力とよ！　ディラードー　リター　ふン！　彼等は既に彼の前には死んで居た。彼は一方に熱中すると共に、出來るだけディラードから離れるやうな態度を採つたので、ディラードも遂に彼を、上に詔らふ俗物だと見て了ふやうになつた。しかし、その後になつても、彼の仕事は相變らず下等で、その給金も安いまゝであるのを見て、クライドは今更、リタやディラードの所に歸らうとは思はなかつたが、もう一度、シカゴやニューヨークに行つて、其處でホテルにでも働いて見たいと、思ひ始めるやうになつた。だが、丁度その時、彼の最初の夢と勇氣とを搔立てる樣な事件が起つたので、彼は再びグリフィス家の人達が――父も子も――彼を尊重し始めたのではないかしらと思ひ出した。それは春の或る土曜日の事、サミユエル・グリフィスが、ホイガムを連れて、工場中を巡視して見たことがあつた。彼が皺伸部屋に行つたのは、丁度正午頃であつたが、見るとクライドが、シヤツとヅボンの一枚きりになつて、乾枠の所で働いて居た。その頃には、彼も既にその仕事に熟練して居たが、サミユエルは、二三週間前、彼の家に來た時の甥の立派な樣子を思ひ出して、現在の彼の樣子の變り方に吃驚した。彼がシカゴでゝも彼の家ででも、クライドに就いて感じた唯一つの事は、彼が快適な樣子をして居ると言ふ事だけであつたからである。しかも彼は、彼

の息子と殆んど同様に、グリフィス家と言ふものゝ、此の工場の使用人や一般社會に對する體面を考へてゐた。從つて　此處でクライドに會つて、ギルバートに似た彼が、腕無しシャツを着て働いて居るのを見た時、彼は何時になく、クライドが彼の甥である事を感じて、こんな下等な仕事をこの儘に續けさせる事は出來ないと感じたのであつた。こんな事をさせて置けば、彼の親戚を不當に無頓着に扱つて居ると見られると思つたのであつた。

無論その時には、ホイガムにも誰にも、何とも言はなかつたが、月曜の朝になつて、息子が小旅行から歸つて來ると、待ち受けてゐたやうに、彼の事務室に現れた。

「實は儂は、此の間の土曜日に、工場を廻つて見たのだが、あの若いクライドが、未だ鐵伸部屋に居るぢやないか？」

「え、、ですが、それがどうしたのです？」息子は、父親がこんな風にクライドの事を言ふのを怪しみ乍ら答へた。「他の連中もこれ迄、皆、あそこで働いて來たのですが、それで別に差支へはなかつたと思ひますが」

「うむ、それはさうだが、しかし他の連中は儂の甥ではなかつたからね。それにあの男ほど、お前に似てた者もゐなかつたからね」――かう言はれると、ギルバートは我にもなく苛々して來た。「しかし

お前に言ふが、あれはいけないよ。儂にもいけないと思へるが、他の連中も、餘り感心した事だとは思はないだらうと思ふんだ。何しろお前にそつくりだし、お前の從兄弟で、儂の甥だと言ふ事は誰でも知つてるんだからね。儂も、あそこへ行つた事がないので、それに氣が付いたのは今度が始めてだが、あの男をあの儘にして置く事は賢い事ではないと思ふね。何處かへ變へてやつて、あんな恰好をしないで居られるやうにしてやらうではないか」

彼の眼は暗くなり、彼の額は皺ばんだ。ほろ着物を着、汗だらけになつて彼の面前に立つたクライドの印象は、決して愉快なものではなかつたのだ。

「しかしお父さん、お言葉ですが」ギルバートは、そのクライドに對する反感から、出來るだけ彼をあの儘にして置かうと思つて、言ひ張つた。「あの男を今使ふやうな位置が、他にありますかしら。それには、少くとも、長い間働いてその地位を得た人を、誰か他に移さなくちやならないと思ひますが。何しろ、あの仕事より外には、全然訓練の出來てない男ですからね」

「さうかも知れないが、しかし構はないぢやないか」父親は息子が嫉妬の爲めにクライドに不公平な事を言つてるのだと感じて言つた。「あの仕事を、あの男にやらせるわけには行かないよ。あれでもうあの仕事を相當にやつたのだらうし、それに、苟くも吾々と同姓の人間が、あゝした仕事をして居る

とあつては、吾々の家族の信用にもかゝはる事だからね。此の工場の仕事の爲めにもよくないよ。その爲めに、もつと悪い事が起らないとも限らないからね。どうだい、解つたゞらう？」

「いや、社長、よく解りました」

「さうか、では儂が言ふ通りにして呉れ。ホイガムにさう言つて、あゝした勞働でない何かの地位を作つてやると好いね。あの男をあすこへやつたのが、最初から間違つてたんだよ。何處かの頭にしてもいゝし　第一助手でも第二助手でも第三助手でもいゝが、兎に角、ちやんとした着物を着て、相當な人間に見えるやうな場所がありさうなものではないか。若し必要があれば、何かの仕事が見つかるまで、充分の給金をやつて、あの男の家に歸して置いても好いから、今の仕事は變へてやらなくてはいけない。時に、あの男に今、幾ら拂つてゐるのだ」

「十五弗ばかりだと思ひますが」

「それは少い。此の町で相當な體面を保つには、とてもそれでは足りないだらうよ。二十五弗にしてやるが好いな。あの男にそれだけの働きがない事は儂にも解つてゐるが、今の所止むを得ない事だからね。あの男が此の町に居る限りは、生活に足るだけのものはやらなくちやならないのだから。今後は儂が拂つてやらう。あの男を不當に扱つて居ると世間から思はれるよりはましだからね」

「いや、かしこまりました。かしこまりました。どうぞまア、さう怒らないで下さい」ギルバートは父親の興奮に氣付いて、賴むやうに言つた。「しかし、これは何も僕だけが悪いんぢやないですからね。あなたも最初から御賛成なすつてゐらした事ではないですか。しかし、今さうおつしやられゝば、僕もあなたのおつしやる事が好いと思ひますから、萬事は僕に任せて下さい。早速、相當な仕事を探す事にしませう」

彼は早速、ホイガムを探しに出て行つたが、心の中では、これ等總てに、クライドを重視してると思はせてはならないと思つてゐた。――かうしてやるのは、凡て彼への好意からであつて、彼の働きによるものではない事を、感じさせねばならないと思つてゐた。

ギルバートに會つたホイガムは、話を聞いて頭を振り振り出て行つたが、間もなく歸つて來て、クライドをリゲットの助手の一人に使ふより他にない事を復命した。リゲットはその時、五階の縫工部を五部屋ばかり監督してゐたが、その管轄の中に、或る特別な小さい部があつて、其處に助手が一人いると言ふのだつた。

これは捺印室であつて、此の縫工部の西の端の一室をなして居り、其處には毎日七萬五千から十萬打の未縫カラーが裁斷部屋から送られて來て、一群の女工に依つてそれ〴〵の大きさや商標が捺印さ

れるのであつた。此の部の監督助手の唯一の仕事は、此の捺印作用が滑らかに進行するかどうかを見張つて居る事であつて、同時にさうして捺印された數を記入して置く事であつた。それ〴〵の女工の捺印した數に從つて、給金が決まるのであつたから、

其處には小さい机が一脚あつて、その上に樣々な記入帳が置いてあり、裁斷室から送られた傳票が、現物と一緒に、捺印女工の手から監督助手に渡される事になつてゐた。それは、極く單純な事務であつて、これまでは、色々な老幼男女が、間に合はせにやつて居たものであつた。

だが、此の仕事について、ホイガムが怖れた事は、クライドの樣な未經驗な若い人間は、此の仕事に必ずしも、適當でないと言ふ事であつた。此の部屋に働いて居るのは若い娘ばかりであつて、しかもその中には、相當に眼につく女も居た。さうした部屋に、クライドの若さの青年を置く事は、果して賢明な策だらうか？　さうした青年は、兎角寛大に流れ易いし、娘達もそれを利用しようとするかも知れない。さうだとすると、彼を此の部屋に長く置いておく事は出來ない事になるが、と言つて、現在此の工場で空き間があるのは此の位置より他にない。だから、當分彼を五階にやつて試驗的に使つて見ようではないか。その中には、リゲットかホイガムかのどちらかに、彼がその仕事に適するか否かゞ解つて來るだらう。その時になつて、また他の仕事に移しても好いではないか――彼がギルバ

ートに言つたのはこれだつた。

そこで、その日の午後三時頃、クライドはギルバートの部屋に呼ばれて行つて、例に依つて、十五分許り待たされた後に、勿體振つて面會を許された。

「此の頃、どんな樣子だね？　君の仕事の方は」

ギルバートが冷酷な調子で尋ねた。彼の前に行くと、何時でも壓迫を感ずるクライドは、無理に微笑を浮べて、

「いや、別に變つた事もありませんし、不平に思ふ事もありません。僕も多少馴れて來たかも知れません」

「かも知れないのかい？」

「いや、無論、多少の事は覺えた積りです」

クライドは多少赤くなつて、內心烈しい憤りを感じたが、同時に、取入るやうな辯解するやうな微笑を浮べる事も忘れなかつた。

「さうか、それなら、まア多少ましだよ。あれだけ長く居て、仕事が手に入つたかどうかも解らないやうでは仕樣がないからね」だが、それも餘りに無遠慮だと思つたものか、彼は多少言葉を和げて言

つた。「しかし、君を呼んだのはその話ではない。もう一つ話したい事があるんだ。君はこれまで一遍でも、君自身でなく他人の仕事に責任を持つた事があるかい？」

「それはどう言ふ意味なんでせう？　僕にはよく解らないのですが」

いくらか苛々してゐたクライドには、彼の質問の意味がはつきり解らないのだつた。

「つまり、君の輩下を使つた事があるかと言ふ事さ。君が命令して、他人を使つた事があるかと言ふのさ。何處かで助手監督とか、さうした者になつた事があるかい？」

「いゝえ、未だ一度もありません」クライドは、殆んど吃るやうに答へた。ギルバートの樣子には、酷く冷酷な傲慢な所があつたが、此の質問の性質は彼にも解つてゐた。こんなに冷酷で、無愛想な態度ではあるが、尙彼の主人が、彼を何かの監督にしようとして居る事を察するに足りたからである。

「しかし、クラブやホテルでは監督する人の事を見てましたから、さうした位地に置かれゝば、出來るかも知れないと思つてますが」

さう言つた時、彼の頰は眞赤になつて、眼が澄み渡つてゐた。

「いや、しかし、それは駄目だな。それは駄目だよ」ギルバートが鋭く言ひ張つた。「見る事とする事

とは全然別だからね。經驗のない人間は、何とでも考へるもんだが、やつて駄目な事が解るもんだよ。誰にも出來ると言ふ仕事ではないからね」

彼は嘲弄するやうにクライドの顏を見詰めてゐたが、クライドはまた、自分が思ひ違ひをしたのだと感じて、落着いて居た。彼の頰はもとの色に歸つてゐたし、彼の眼の光も消えて居た。

「あゝ、いえ、それはさうだらうと私も察しますです」

「いや、しかし、君が何も察する事はないよ。物を知らない人間は、それが困るんだよ。何か言ふと察するんだからね」

ギルバートはその時、此の從兄弟にこんな地位を與へねばならない事を考へて、苛々して、その憤りを隱す事が出來ないのであつた。

「御尤もです」クライドはなだめるやうに言つた。彼は未だ、この暗示的な進級を當てにして居たからだつた。

「そこで、實を言ふとねエ、僕は君が特殊技能のある人間ならば、最初會計部の方へ廻したかつたんだ」（特殊技能と言ふ言葉を聞いて、クライドは或る恐怖に捉はれた。彼にはその言葉の意味が全然解らなかつたからである）「僕達は、君に出來るだけの事をしようと思つてゐたのだし、これまでの仕事

が餘り愉快でない事も知つてたのだが、今迄の所、どうも止む得なかつたのだよ。しかし今日、君に此處へ來て貰つたのは、此の頃、階上の工場の方に或る臨時の隙が出來たので、君をそこへやつたらどうかと思つてるからだよ。父も僕も、君に今少しよくじて上げようと思つてたのだが、何しろ君に實際經驗がまるでないのだから、非常に難かしかつたんだ。商賣の知識もないし、と言つて教育もなし、何處と言つて取り柄がない譯だからね」かう言つて彼は、何か思案に沈んだやうに、長い間默つてゐた。無論クライドに、彼が熟慮して居るやうに見せ掛ける爲めだつた。「しかし、折角君を此處へ連れて來た事だから、まア試みに、今少し好い仕事をさせて見やうと思つてるんだが、それについて、僕の考へてる事を君に少し話して置きたいんだ」かう言つて彼は、五階の仕事の性質を說明し始めた。

やがて暫くすると、ホイガムが呼ばれた。

「うむ、ホイガム。僕は今、君と今朝話した事を此の從兄弟に話したんだが、一つ此の人を、リゲット君の所へ連れて行つて、仕事の說明をして呉れないか」さう言つて彼は机に向いたが、直ぐに「說明が濟んだら此方へ歸して呉れ結へ。もう一度話して置く事があるから」と言ひ添へた。

やがて二人は此の部屋を出た。ホイガムは、此の試驗について未だ多少の疑ひを持つて居たが、今後クライドが、どんな人間になるか解らないので、努めて愉快さうな顏をして居た。その中にクライド

は、機械の音の烈しい廊下を西の端まで行つて、一つの小さい部屋に連れて行かれた。そこは低い柵で、隣りの大きな部屋から仕切られた部分で、二十五人ばかりの娘が、その助手達と一緒に働いて居た。助手達は手に手に籠を持つて、上階の瀧口から落して來る未縫カラーを、絕えず女工達の所へ運んで居るのだつた。

リゲット氏に紹介されると、彼は直ぐ小さい柵で隔てられた机の處に連れて行かれた。

そこには、彼と同年配の餘り美しくない小肥りの娘が坐つて居たが、彼等が近づくと立ち上つた。

「之がトッドさんで、この十日許りアンヂャー夫人の替りをして居たのです。それでトッドさん、このグリフィス君に、此處の仕事の樣子を出來るだけ上手に說明して上げて下さい。そして、此の人が此處で働く樣になられてからも暫く手傳つて上げて、此の人が自分一人で出來る樣に、敎へて上げて下さい。好いですね。賴みますよ」

「はい、はい。お易い御用ですわ」トッド孃はさう云ふと共に、樣々な帳面を取出して、それに記入する方法を敎へたが、やがて捺印がどうしてされるかとか、運搬女工達がどうして上階から來る包みを、捺印女工に配るかとか、捺印の濟んだカラーを他の運搬女工がどうして縫工部に運ぶかとか、そんな事を說明した。クライドは直ぐに、自分に出來る仕事だと考へたが、只こんなに澤山の女達の中

に居る事を變に感じた。此の五階全體に渡る縫工部には、實に數百人の女工達が働いて居た。其處は眞白い壁の間に幾本も白い柱があつて、天井まで屆く其高い窓からは、輝やかしい光の洪水が流れ込んでゐた。クライドは色々な説明を聞き乍ら、それとなく室じうを見廻したが、どの女工も大して綺麗だとは思へなかつた。

「それで、一番大事な事は、先づカラーの數に間違の無い事と、その作業に滯滯が無い樣にする事なのです。それから、女工達の出勤時間を嚴格にして、時間の間違ひを無くする事です」暫くしてホイガム氏が説明した。やがて自分のする仕事が解ると、クライドはその旨を云つた。彼は非常に神經質になつてゐたが、直ぐに、此の娘に出來る事なら自分にも出來るだらうと思つた。リゲットやホイガムも、クライドがギルバートの親戚だと云ふので、色々親切にして呉れた上に、大丈夫彼にも出來る仕事だと云つて呉れたので、彼はやがてギルバートの處に歸つて行つた。

「どうだね？　君の返答は？」諾かね、否かね？　君に出來ると思ふかね？　出來ないと思ふかね～」

「僕にも出來るだらうと思ひます」クライドは精一杯の勇氣を出して答へたが、でも、多少の幸運が無くては出來ない樣な氣もした。其處には、色々考へなければならない事があつたし、その上に、目上や同輩のものゝ好意も必要である樣に思へた。然も、さうした好意が、何時でも期待出來るものだ

らうか？

「それは好かつた。まあ腰掛け給へ。もう少し君に話し度い事があるんだから。どうだね？　君には此の仕事が易しさうに思へたかね？」

「いゝえ、易しいと思つたとは云へませんが」

クライドは、緊張の爲に幾らか青ざめて答へた。自分の未熟を知つて居る彼は、此のまたと無い機會を、全力を盡して利用しなければならないと思つたからである。「併し、僕にも出來るだらうとは思つて居ります。事實、僕は、自分に出來る事が解つてますし、兎に角やつて見たいと思つてますから」

「うむ、その返答は多少氣に入つたよ」ギルバートは、きびくゝと、然し多少優しみをこめて答へた。

「そこで、君に一つ話して置き度い事があるんだが、今見た通りに、あそこには澤山の女が居る。まさか君も、あんなに女が居るとは思つて居なかつたゞらう？」

「はあ。此の工場のどこかに居る事は知つてましたが、あそこに居るのだとは思つて居ませんでした」

「實は、此の工場の仕事の全部は、地下室から屋根の上まで、女のする仕事で、男一人に十人の女と云つても好い位なんだ。從つて、此の工場で責任を負ふ可き人間は、道德的にも宗教的にも餘程しつかりした人間でなくつちや困るんだよ。君が若し僕達の親類でなく、從つて君を確かな人間だと感じ

なければ、僕達は君をさう云ふ地位には上げないんだ。と云つて、君が親戚だから、君を大目に見る僕達だと考へられては困るよ。君が親戚であればある程、僕達は君の行ひを監視しなくちやならない譯だからね。どうだ、解つたかい？　此の町のグリフィス家――其の意味も解つたかい」

「はあ、解りました」

「そこでだ」とギルバートは云ひ續けた。「我々は、誰に對しても、其の人を責任のある地位に置く場合には、その人が立派な紳士である事が絶對的に解つてからにしてるんだ。つまり、此處で働いて居る女達が、何時でも立派な取扱ひを受ける事が必要なんだよ。此の工場に這入つた若い者が、いや老人でも同じ事だが、此處に女達が居ると思つて、仕事をうつちやつて戯遊け廻つたり、乳繰り合つたりすれば、それがもうその男の最明だよ。先づ首が飛ぶものと思つて貰はなきやあならないんだ。此處に居る男女は、一にも二にも此處の雇人なのだから、その雇人としての態度を、工場の外でも續けて貰はなきあいけないのだよ。若し彼等がさうしないで、何か噂でも立つたが最後、その二人はお拂ひ箱だからね。さういふ人間は、僕達には入らないんだし、また欲しくもないんだ。向ふが向ふならこつちもこつちだからね」

かう云つて彼は、クライドを見詰めて居た。それは「だから君も氣を附け給へ。さう云ふ面倒はお

斷りしたいからね」と云つて居る樣に見えた。

「はあ、解りました。僕もそれが眞實だと思ひます」

「當然の事だからね」

「さうです。當然の事です」

併し、かう云ひ乍らも、彼は、ギルバートの云つた事が、果して眞實であるかどうか疑つて居た。彼は既に、かうした女工達の噂を、小耳に挾んで居なかつたらうか？　併し現在の彼は、五階に居るかうした娘達に就いて、何も考へて居る譯ではなかつた。今の彼の氣持では、彼等には絶對に關らない方が好いし、口も利かないで、冷淡な態度をとつて居る方がいゝと考へて居た。彼の女好きの性質から云つても、此の位置を保たうと思ふなら、それが必要であつた。彼は從兄弟の望み通り謹嚴に身を保たうと決心した。

「そこで、繰り返して君に尋ねるが、若し僕が君をあの部屋に入れるとしてだね、君はあの女達の間に立ち混つて、平然と肩を張り、頭を上げて働く事が出來るかね？　さう云ふ君を、僕が信用しても好いかい？」

「はあ、大丈夫だと思ひます」リタの事があるので、多少たじ〳〵とはしたが、此の從兄弟のきびき

びした要求に深く印象されて、クライドは答へた。

「君にそれが出來ないとすれば、今さう云つて貰はうぢやないか。我々は血の繼がつた親戚だ。君が我々を助けて、特に今度の樣な地位に坐るとすれば、君と云ふ人間が我々を代表する事になるんだからね。不正な事で、君と關係が出來る事は、絕體にお斷りするよ。だから、君は今後、充分注意して、君の行動をとつてくれ給へ。君の不評判になる樣な事は、一切して呉れない事だね」

「はあ」クライドは嚴肅に答へた。「解りました。決して間違ひはない積りですが、若しあればお暇を戴きます」

彼は眞面目にさう思つて居た。その時の彼には、あの五階の女達が、凡て緣故のない、遠い存在の樣に思へて居た。

「よろしい。ではもう一つだけ云ふがね、これからもう歸つてもいゝから、家に歸つてよく寢て、此の事を考へて見給へ。考へて見て、同じ事を感じたなら、明日の朝やつて來て、あの部屋で働き給へ。君の給金は今日から二十五弗にして上げるから、今後は成る可く身綺麗にして居て呉れ給へ。何と云つても君は、此の工場の模範になる可き人間だからね」

彼は冷淡に立ち上つたが、突然給料を上げて貰つた上に、服裝を立派にせよとまで云はれたクライ

ドは、すつかり恐縮してしまつて、何とかして自分の感謝を示したい思ひで一杯だつた。なるほど彼は冷酷ではあるが、兎に角伯父同樣に、彼の爲を考へて居て呉れるに違ひない。それでなければ、こんなにも早く、かうした事をして呉れる筈がない。然も彼が此の從兄弟と仲好しになれて、彼の好意を受ける事になれば、彼の幸福はどんなだらう？　何といふ社會的地位と、何といふ商業的利益とが、彼のものになる事だらう？

すつかり昂奮したクライドは、足も輕く此の大工場から出て行つた。道々彼は、色々の事を決心したが、中でも特に女に關してだけは、冷淡であらうと云ふ決心を强めた。彼の慾望が餘りに烈しくなる事があるとしても、少くとも彼の監督する工場の女達だけには、むしろ冷酷であらうと決心した。ディラードやリタやさう云ふ連中との事は、今の彼には問題でなかつた。

十二

一週二十五弗の收入！　使用女工二十五人の部長！　再び着られるやうになつた立派な着物！　彼は自分の机の前に坐つて、愉快な活動の流れを眺め乍ら、自分もとう〳〵二ケ月の後に、此の工場の多少重要な人物になれたのだと思つた。彼が社長の親類であり、新しい要職に就いた爲めに、リゲッ

トやホイガムまで絶えず樣々な助言を與へて呉れた。會計部や廣告部の連中までが、彼と會ふと立止つて聲を掛けて呉れた。仕事に馴れるにつれて、彼にも次第に色々の事が解つて來て、工場全體に對する興味も加はつて來た。此の工場の織物材料は何處から來るか。それの裁斷は何處でするか。裁斷師はどれ程の高給を取つて居るか。――さうした事も次第に解つて來た。此處には病院もあつたし、特別な食堂もあつて、會社の役員なら誰でも食事を攝れるやうになつてゐた。クライドも既に一部の部長であつたから、意のまゝに、此處で食事を攝る事が出來るのであつた。此の町から數哩離れたバントロープと言ふ村には、此の町の工場聯合で建てたカントリー倶樂部があつて、樣々な工場の部長級の連中が集まる事になつてゐたが、グリフィス會社では、その會社の社員が他の會社の社員と交る事を餘り喜ばないので、此の會社の人は餘り出掛けないと言ふ事も、間もなくクライドに解つて來た。しかし彼は、グリフィス家の一員であるから、行きたければ行つても好いだらうと、リゲットが一度言つた事があつた。しかしクライドは、あのギルバートの嚴しい警告もあつたし、自分が此の家族の親戚でもある爲めに、出來るだけ他の連中と離れて居ようと思つた。彼は出來るだけ皆んなに笑顔を見せて居たが、デイラードその他の同類は避けたいと思つたし、と言つて、今のまゝの淋しさには堪へられないので、土曜や日曜の午後には、缺かさず附近の町の公園等に遊びに行く事にした。後には、

伯父や從兄弟の信用を得る爲めに、此の町の長老教會へさへ出席し始めた。その教會は、グリフィス家の人達も出席する教會だと言ふ話だつたが、クライドは一度も顏を合はせた事がなかつた。彼等は、六月から九月までの間は、何時でも週末をグリーン・ウッド湖で過す事になつてゐたからである。

事實、ライカーガスの夏季生活は、交際社會に關する限り、非常に退屈なものであつた。その間の此の町には、何の特別の催しもなかつたが、その代り、それに先立つた五月には、グリフィス家の周圍に樣々な催しがあるのを、クライドは新聞でも見たし、遠くから眺めても居た。スネデカー學校の卒業祝ひが、グリフィス家の芝生で行はれて、樣々な天幕を張廻して、提灯を懸けつらねて居る樣子を、クライドも散歩のついでに見た事があつた。その光景を見て、彼は此の家の生活に樣々な好奇心を抱いたものであつた。しかし、現在の地位に就かせて以來、グリフィス家の人達はまた、彼のことを忘れて仕舞つたらしく見えた。彼は、かうしてやつて居る中には、またどうにかやつて呉れるのであらうと思ふより他に、仕方がなかつた。

その後暫くして、クライドは、此の地方の都市聯合自動車大會が、六月二十日に此のライカーガスの町で行はれると言ふ記事を、ライカーガス・スターで讀んだ。此の大會が、暑休前に此の町で行は

れる最後の社交的事件であるとも、新聞紙は報じてゐた。ギルバートの名前は出て居なかつたが、ベラやベルチンやソンドラの名前が、それ〴〵此のライカーガス方の選手として、書き立てられて居た。丁度その日は土曜だつたので、クライドもあらん限りの盛裝をして見物に出掛けて、あの日以來始めて、あの美しいソンドラを見る事が出來た。その日彼女は、頭をインディアン風に飾り立てゝ、マホーク河のインディアン傳説に型どつて、薔薇の花を撒き散らした河の上を、水仙で飾り立てた櫂で漕いで行く趣好を見せたのであつたが、その結果、彼女は賞品を得た上に、再びクライドの空想をも搔立てゝ了つた。何と言ふ素晴らしさだらうとクライドは思つた。

此の花自動車の行列には、ギルバートも、非常に可愛らしい一人の娘と一緒に加はつて、四季を現はした四つの車の一つを運轉して居た。その娘は、眞白い貂の毛皮に白薔薇を埋めて、雪降り景色を見せてゐたが、それに續く今一つの車には、透通るやうな着物を着たベラ・グリフイスが、菫で作つた瀧の下に蹲んで、春の景色を現はしてゐた。その趣好の素晴らしさは、クライドを直ぐに、戀と若さとロマンスとの世界に誘つて、こんな事ならば、リタを思ひ切るのではなかつたと思はせたほどだつた。

かうして、クライドの生活は無事に過ぎて行つた。尤も、今の下宿のカッピーの家を出て、今少し

ましな部屋に變りたいとは、兼ね兼ね思つてゐた事であつて、さうすればあのディラードとの接觸も避けられるし、自分の體裁もいゝと思つて居たのだつた。

そこで、給金が上つてから十日計りして、もつといゝ部屋に住み得る事が解ると、彼はワイキアヂイ街に並んだゼファソン街の或る家に、一つの部屋を借りる事にした。それは以前或る工場の支配人をしてゐた男の寡婦の家であつて、彼女には廣過ぎる家の二間を、部屋貸ししようと言ふのであつた。此の町に長く住んで居るピートン夫人は、グリフイス家の事もよく知つてゐたし、クライドがギルバートに似て居る事にも氣付いたので、早速愛嬌を見せて、一週五弗と言ふ安い値で、素張らしい部屋を貸さうと言つて呉れた。

クライドの工場生活はと言ふと、彼の部下に對してあれ程固い決心をしては居たものの、さて實際に接して見ると、さう〳〵堅苦しく、女工達を度外視してゐるわけにも行かなかつた。それは六月も末に迫つた夏であつた。二時、三時、四時の時刻になると、工場全體に隋氣が襲つて來る。と、何處となく懶い無頓着の中に、時としては一種官能的なものが忍び寄つて來るのである。其處には樣々な種類、樣々な氣分の多數の女達が居るのだ。而かも、あらゆる男から隔離された中に、彼一人が混つて居るのだ。部屋の中の空氣がどんよりと倦怠を誘つて來る中で、窓の外へ眼をやると、泡立ち流れ

るマホーク川のほとりには、青草の堤の上に樹々が影を作つて居る。それは、其處にそゞろ歩く者の喜びを、絶えず暗示するもの丶樣に見えた。而かも唯、機械的に働いて居るだけで、その心は絶えず享樂へ享樂へと向けられて居るかうした女工達は、絶えずかうした仕事から放たれた時計りを夢想し續けて居るのだ。

實際、元氣で欲情的な彼等の氣分は、彼等に一番近い者に向けられ勝ちであつた。而かもクライドが、彼等の眼前の殆んど唯一の男性であつたし、殊に此の頃は、好い着物を着てゐるので、自然彼等の氣持はクライドに向き勝ちだつた。クライドがグリフィス家の親戚であり、ギルバートに似てゐる事を知つて、樣々な空想に滿されてゐる彼等は、クライドが何處にどうして住んでゐるとか、どの女工に興味を持つて居るらしいとか、色々に噂し合ふのであつた。而かも、クライドはクライドで、ギルバートの言葉を忘れて居るやうな時には、自然に彼女等の事が頭に浮んで、或る種の女工等に、官能的な思慮を奪はれる事もないではなかつた。彼は此の會社の布望を知つてゐたし、その爲めにリタを棄てた程であつたに拘らず、何時の間にか三人の女工に興味を持つやうになつてゐた。彼等は何れも異教的な享樂的な娘で、クライドを非常な美男だと思つてゐた。ルザ・ニコフオリッチはロシア系のアメリカ娘で、金髪の、大きな娘で、獅子鼻を持つた、眼の綺麗な女工であつたが、始めからクラ

イドに惹きつけられてゐた。只、かうした場合のクライドは、何時でも、女を言ひ寄らせない樣な處を何處かに持つてゐた。彼の綺麗に分けた髪の毛や、明るい立縞のシャツや、腕までまくり上げてゐる袖や、さうした總ての樣子が、餘りに隙間のない人の樣に見えるのであつた。

今一人のマルサ・ボウダルウは、肥つては居るが何處か虛弱さうに見える、カナダとフランスの合の子娘であつて、元々、無智で異教的である爲めに、一時間でも好いクライドと一緒になつて見たいと言ふやうな事を、眞面目に考へてゐるやうな娘であつた。同時に、猫の樣な殘忍性を持つてゐる彼女は、クライドの興味を惹きさうな凡ての女に敵意を持つて、その爲めにルザをも輕蔑しきつて居つた。クライドが近づいて行くと、ルザが何時でも彼に倚り掛る樣な恰好をするのを、彼女は見てゐたからである。同時に、何かと言ふと、相手のあらを探し出さうと努めて、彼女のシャツが胸の處でたくれ過ぎてゐるとか、彼女のスカートが仕事の時にむくれ上るとか、彼女が腕を肩まで出して居るのはクライドに見せる爲めだとか、そんな事を言ひ散した。而かもクライドが近づいて行くと、狡さうな溜息をしたり、懶さうな顔付きをしたりして見せるので、とう〳〵或日、ルザが「何だ、フランス猫の野郎。あの人に見せようと思ひやがつて！」と大聲に叫んだほどであつた。クライド故に、彼女は相手を、毆りつけたいと思ひ詰めてゐるのだ。

更に今一人のフロラ・ブラントは、極端に下層なアメリカ系の娘であつて、その身體つきは全で男の樣であつたが、口元だけは變に官能的で美しかつた。彼女は、彼が此の部屋に來るとから、絶えず彼の顏計り眺めて、「どう？　妾がお氣に召さなくつて？」とか「何だつて、そんなに妾を無視するのよ？　他の男だつたら、どんなにあんたの地位を有難がるか知れないのに」と言ひたけに見えた。

暫く勤めて居る中に、此の三人についてクライドの頭に上つて來た考へは、かうした娘達は、こちらがどんな事をしようと、意のまゝだと言ふ事であつた。彼女達には何の自戒心もないし、因襲的な考へもない。彼等の一人を――いや、此方の氣が向けば三人が全部でも構はない――勝手に弄んだ處で、此方が恩惠的に相手になつてやるのだと言ふ顏さへして居れば、問題は何も起らないだらうと思つた。恐らくは彼は、勝手に彼女達を連れ出せるであらうが、その後になつて彼等を棄てゝ了つても、彼が現在の地位に居る限り、彼等は何も言はないであらう。しかし、かうは考へ乍ら、ギルバートに言質を與へて居る彼は、未だそれを破る氣にはならなかつた。それは只、時々浮んで來る空想に過ぎなかつた。しかも彼の性質は、性の化學と美の公式とに依つて、搔き立てられ易かつた。彼に取つて、性の要求に堪へる事は、決して容易ではなかつた。殊にかうした懶い夏の日に、行くところも交際する友もない彼にとつて、入れ代り立ち代り彼に近づいて來る彼女等は、常に烈しい誘惑を彼に

感じさせるのであつた。その誘惑に引ずられて、彼はさうした娘達の處に近づき乍ら、表面では何時も冷靜を裝つて居た。

丁度、その頃に、或る命令が下つて、クライドの處にも二三の試驗女工が、新しく入つて來る事になつた。此の工場には、さうした女工志願者が相當に澤山押しかけるので、最初は極く安い給金で使つて、仕事を一通り覺えてから、普通の給金にすることになつてゐた。無論、不景氣になれば、さうした志願者を拒絶して、『職工不用』の札を張出すのであつたが。

無論クライドは、未だ入社した計りで、さうした責任を持つわけに行かなかつたので、最初に先づリゲットが試驗をして、その後にクライドの處へ送る事になつた。

翌日になると、リゲットが四人の娘を一人宛、クライドの處に連れて來た。

「これが今度此處で働く事になつたティンダルと言ふ娘さんですから、一つ使つて見て下さい」

娘を連れて來ると、彼はそんな風に言つた。するとクライドは樣々な質問を發して、これ迄何處で働いてゐたかとか、これ迄どんな仕事の經驗があるかとか、此のライカーガスの住人であるかとか、（此の工場では、他の土地から來た獨り者の娘を餘り歡迎しなかつた）聞いた後に、彼等の仕事の性質や給金の事を說明して、それをトッド孃に引渡すのであつた。するとトッド孃は先づ彼等を衣裳箱のあ

る休憩室に連れて行つてから、彼等の働くテーブルにつかせるのである。彼等が如何に働くか、彼等を使用し續けるに足るかどうかを決めるのが、それからのクライドとトッド孃との仕事であつた。

實を言ふと、此の時までのクライドは、例の三人の娘達を除いては、大體として、此處で働く娘達に、それ程深い興味を持つてゐないのであつた。彼等の大部分が、寧ろ愚鈍にさへ見える彼は、今少し利巧さうな娘が欲しいと思つてゐたのだ。何故さした娘が此の工場に來ないのだらう？　ライカーガスの工場には、さうした娘は居ないのだらうか？　どれもこれも、ぶく〳〵の手と、丸い顏と、太い足と、大きな足首とを持つてゐるではないか？　中には、ポーランド訛を持つた貧民窟の娘さへ居るのだ。彼等は凡て、男を摑へる事ばかりに熱中して、ダンス場に行きたがつて居る。クライドはその中にアメリカ系の娘が居る事も認めたが、彼等は人種的道德的宗教的な遍見から、容易にかうした女たちと交らうとしないのを見た。

その後、數日の間に、更に幾人かの臨時雇ひが連れて來られてる中に、クライドはとう〳〵、他のどの女よりも勝れて居る一人の娘を見付けた。見た所、彼女は、ひどく頑丈ではなさゝうであつたが、どの娘よりも利巧さうで、愉快さうで、而かも精神的な女であるやうに見えた。事實、クライドは、最初に彼女を見た瞬間から、彼女が或る魅力と、或る憬憧と、或る自信との、一種獨特な表情を持つ

てゐて、相當な意力と信念とを持つてゐる事を見て取つたのだつた。彼女の言ふ處に依ると、彼女はかうした仕事に何の經驗もないので、此の工場でうまく勤まるかどうか、酷く不安に思つてゐる樣子だつた。

彼女の名はロバアタ・アルデンと言つて、此の工場に來るまで、ライカーガスから十五哩ばかり離れた或る町で、小さい靴下工場に働いてゐたと言ふ事だつた。彼女は、餘り新しくもなささうな小さい鳶色の帽子を目深に被つてゐたが、その顏はどちらかと言へば寧ろ小さい方で、その明るい鳶色の髮の毛と共に、彼女を可愛らしくしてゐた。彼女の眼は青く澄んで居た。極く普通の着物で、穿いて居る靴も相當に古物であるらしかつた。ひどく實際的な、眞面目な娘らしかつたが、何處か意志的な明るい處があつて、色々な希望を持つて居るらしい樣子が、彼女に最切に會つたリゲットに先づ氣に入つたらしかつた。明らかに彼女は、此の部屋のどの女よりも飛拔けて立派だつた。彼は、此の娘と話し乍ら、多少の不思議さを感じないで居られなかつた。此の會見を非常な冒險だと思つて居る彼女は、その結果を氣づかつて、少からず緊張して居る樣子が見えたからである。

彼女の說明に依ると、彼女はこれまでビルッと言ふ此の附近の町で兩親と共に住んで居たのであつたが、今は此の町の友達の處に居ると言ふのだつた。その話し振りの正直らしくて單純な所、が先づ

クライドを動かしたので、彼は直ぐ、此の娘を助けてやりたいと思つた。が、同時、にこんな仕事をさせる娘ではないのではないかとも思つた。彼女の眼は丸く青ばんで利巧さうであつたし、その唇も鼻も耳も手も、酷く小さく綺麗であつた。

「では、此の工場で働ける樣になれば、此のライカーガスに住む積りなんですね？」

彼は、他の娘よりも長く彼女と話し乍ら言つた。

「はア」彼女は眞直ぐ彼の顏を見詰め乍ら答へた。

「で、もう一度、名前は？」彼は帳面を取上げて聞いた。

「ロバアタ・アルデン」

「此の町の住所は？」

「テーラー街、二二八」

「僕は知らないな。そんな町は」彼女と話して居るのが嬉しいので、彼はそんな事まで言つた。「僕も此の町に來て未だ間がないんですからね」かう言つてから、彼は何だつて始めから自分の事なぞを言ひ出したのだらうと思つた。「もうリゲットさんから仕事の事は聞かれたかも知れませんが、兎に角、此處の仕事は、カラーに印を押す仕事ですから、まア、一寸來て見て御覽なさい。直ぐ解るから」か

う言つて彼は、近くのテーブルに連れて行つた。彼はトッド孃も呼ばないで、自分でカラーを取上げて、色々の事を説明してやつた。

此の説明の間、彼女がクライドの一擧手一投足も見逃すまいとする樣に、ぢつと眼をつけて見守つてゐる樣子は、クライドをまごつかせるに充分であつた。さうした時の彼女の眼つきには、此方を突き刺す樣な何かがあつた。クライドがもう一度賃金の割合を説明して、上手に働く者が幾ら採り、下手に働く者が幾ら採るかを説明して了ふと、彼女は自分でやつて見たいと言つたので、彼はトッド孃を呼んで脫衣室に連れて行かせた。やがて彼女はこの部屋に歸つて來たが、その頰は心持ち赤くなり、その眼は嚴肅さうに輝いてゐた。彼女は直ぐ腕をまくつて働き始めたが、その樣子で、クライドは、仕事の手早さや正確さを察する事が出來た。彼女は、此の位置を失ふまいとして、一生懸命であるらしかつた。

やがて、暫く働いた所で、クライドは彼女の處へ行つて見たが、想像した通りに、彼女は手早く正確に仕事を運んでゐた。と、ごく僅かの間だつたが、彼女は振返つて、クライドを見て笑つた。それは、無邪氣な喜ばしげな笑ひであつた。クライドも何となく嬉しくなつて、彼女に微笑を返した。

「あゝ、その調子なら大丈夫でせう」